

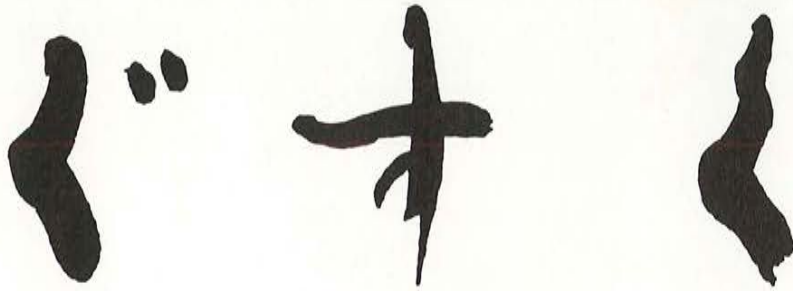
グスク分布調査報告書 (Ⅲ)

— 八重山諸島 —

1994年3月

沖縄県教育委員会

沖縄県文化財調査報告書第113集

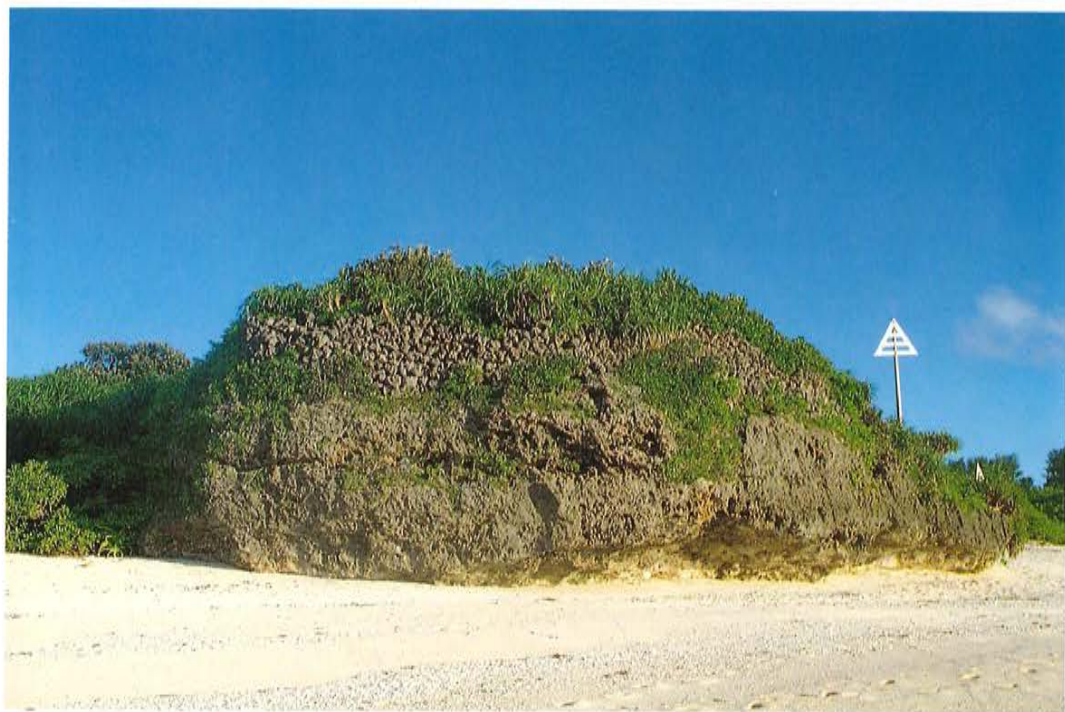


グスク分布調査報告書(Ⅲ)

— 八重山諸島 —

1994年3月

沖縄県教育委員会



巻首図版 上：アラスク遺跡、下：ニシヌブシヌヤ



巻首図版 上：イールウガン、下：伝マシュク村跡遺跡

序

本報告書は、八重山諸島域におけるグスク跡（スク跡）の分布調査の成果を記録したものです。昭和52年度に、沖縄本島及びその周辺離島に分布するグスク遺跡の調査を始めとして、さらに宮古諸島域のグスク調査、八重山諸島域の調査と漸次調査範囲を広げ、これまでに幾多の調査成果をあげることができました。

沖縄県内に分布するグスクはおよそ300カ所とも言われており、その大半が、比較的高所の石灰岩丘陵上に立地しております。特に主要なグスクについては、縄張り図の作成や試掘調査を行い、その性格や規模についてある程度把握することができました。これまでの調査によりそれぞれの地域に分布するグスクに特徴が残されていることも判明してきております。沖縄の歴史の流れの中における中世から近世の時期に形成されたこれらのグスクはきわめて重要な文化遺産の一つだと考えられます。

しかしながら、一方においてはグスク遺跡が石灰岩丘陵上に形成されていることから、建築工事や諸開発行為によって破壊の憂き目にあった例も少なくないと聞いております。このような現状を踏まえ、県下に所在するグスクの実態を可能な限り把握し、開発調整のための基礎資料を整備していくことがこの調査の大きな目的のひとつでもありました。

本報告書が県内外の方々に広く利用され、文化財保護啓蒙に結びつき、さらにはグスクの保存、活用、調査研究の一助ともなれば、幸いに存じます。

末尾になりましたが、文化庁並びに石垣市教育委員会、竹富町教育委員会、与那国町教育委員会、さらには地元の方々、多大なる御指導・御協力を頂いた関係各位に対し、衷心より感謝の意を表します。

1994年 3月

沖縄県教育委員会
教育長 嘉陽正幸

例 言

1. 本報告書は、国庫補助を得て平成2年度～平成5年度の4ヵ年にわたる継続事業の成果を記録したものである。
2. 本調査は、八重山諸島（石垣島、竹富島、黒島、小浜島、鳩間島、西表島、新城島、波照間島、与那国島）の9島を対象地区とした。
3. 本調査は、グスク（スク）跡と呼ばれる特徴ある遺跡に限定し、特に縄張り図を作成し、更に小範囲の試掘を行い、それぞれの特徴を把握することに努めた。
4. 遺跡の概略図作成については、県文化課専門員の調査によった。
5. 本報告書のタイトルは、先に刊行された『ぐすく グスク分布調査報告書（Ⅱ）—宮古諸島—』の報告書を踏襲した。
6. 原稿執筆者分担は第1章、第3節のとおりである。
7. 各グスク遺跡一覧表の番号と分布図番号は符号している。
8. 本書に使用した各島の遺跡分布図及び遺跡の位置図は国土地理院発行の地形図（5万分の1、2万5千分の1、5千分の1）を使用した。
9. 各島のグスク及びグスク相当期遺跡一覧は、『石垣島の遺跡—詳細分布調査報告書—』沖縄県教育委員会、1979年3月刊行の報告書と『竹富町・与那国町の遺跡—詳細分布調査報告書—』沖縄県教育委員会、1980年3月刊行の報告書から抜粋して作成した。
10. 竹富町管内採集の陶磁器については、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏の御教示を得ました。記して感謝いたします。

目 次

序 例 言

第Ⅰ章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査体制及び成果の記録	2
1. 調査体制	2
2. 成果の記録	4
第Ⅱ章 八重山諸島の位置と環境	6
第1節 八重山諸島の位置と環境	6
第2節 八重山諸島のグスク時代	6
第Ⅲ章 グスクの分布状況とその概要	8
第1節 石垣島	8
1. 位置と環境	
2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要	
第2節 竹富島	29
1. 位置と環境	
2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要	
第3節 黒 島	40
1. 位置と環境	
2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要	
第4節 小浜島・嘉弥真島	49
1. 位置と環境	
2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要	
第5節 鳩間島	59
1. 位置と環境	
2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要	
第6節 西表島	66
1. 位置と環境	
2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要	
第7節 新城島	78
1. 位置と環境	
2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要	
第8節 波照間島	86
1. 位置と環境	
2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要	
第9節 与那国島	105
1. 位置と環境	
2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要	
第Ⅳ章 まとめ	115

挿図目次

第1図	八重山諸島の位置	3
第2図	調査対象地域各島の位置	5
第3図	フルスト原遺跡の位置	9
第4図	フルスト原遺跡の現況	11
第5図	ピロースク遺跡の位置	14
第6図	吉野遺跡の位置	16
第7図	吉野遺跡の概略	17
第8図	ウイズ遺跡の位置	19
第9図	ウイズ遺跡の概略	20
第10図	吉野遺跡・ウイズ遺跡採集遺物(1・2・5・6・8:ウイズ遺跡、 3・4・7・9~11:吉野遺跡)	22
第11図	石垣島のグスク及び相当期遺跡の分布	27
第12図	花城御嶽(ハナスク村跡)の概略	30
第13図	花城村跡遺跡採集遺物(1・4:幸本御嶽、2・3・5~7:花城御嶽)	32
第14図	西新里村遺跡屋敷の配置	34
第15図	竹富島のグスク及び相当期遺跡の分布	39
第16図	ウブスク遺跡の概略	41
第17図	アラスク遺跡の概略	44
第18図	黒島採集遺物(1:アラスク遺跡、2~17:仲本村跡遺跡)	46
第19図	黒島のグスク及び相当期遺跡の分布	48
第20図	ユンドゥレースク遺跡の概略	50
第21図	ウテイスク山遺跡の概略	53
第22図	小浜島採集遺物(1・4~15:小浜旧部落遺跡、2・3:ウテイスク山、 16・17:嘉弥真遺跡)	56
第23図	小浜島・嘉弥真島のグスク及び相当期遺跡の分布	58
第24図	鳩間島のグスク及び相当期遺跡の分布	59
第25図	鳩間島採集遺物(1~6:ナーマヤーヤシキ、7~15・17:中森貝塚、 16:ブシンヤー)	64
第26図	船浦遺跡の概略	67
第27図	船浦遺跡採集遺物(1~5:磁器、6・7:褐釉陶器、8・9:土器、 10:須恵器、11:貝製品)	68
第28図	西表島のグスク及び相当期遺跡の分布	73
第29図	西表島・新城島採集遺物(1~8:上村遺跡、9~13:高那村跡、 14~16:横目家の墓)	76
第30図	ニシヌブシヌヤーの概略	80
第31図	新城島のグスク及び相当期遺跡の分布	84
第32図	下田原城跡の概略	87
第33図	伝マシュク村跡遺跡の概略	90
第34図	伝マシュク村跡遺跡採集遺物(1~12:磁器、13~15:褐釉陶器)	92
第35図	伝マシュク村跡遺跡採集遺物(1・2・4:褐釉陶器、3:陶器、5~7:土器)	94

第36図	伝マシユク村跡遺跡採集遺物(土器)	96
第37図	伝ペーミシユク村跡遺跡の概略	98
第38図	伝ペーミシユク村跡遺跡採集遺物(1:陶器、2・9:褐釉陶器、 3-6・7・10-12:土器、8:磁器)	100
第39図	採集遺物(1-4:伝ヤグ村跡遺跡、5-8:伝ミシユク村跡遺跡、 9-16:保多盛御嶽周辺遺跡)	102
第40図	波照間島のグスク及び相当期遺跡の分布	104
第41図	伝ダンノアジ屋敷の概略	111
第42図	与那国島のグスク及び相当期遺跡の分布	114

図版目次

P L . 1	フルスト原遺跡(上:遠景、下:近景)	10
P L . 2	フルスト原遺跡の石積み	13
P L . 3	ピロースク遺跡の遠景	15
P L . 4	吉野遺跡(上:遠景、下:内部の状況)	18
P L . 5	ウイズ遺跡(上:遠景、下:内部の状況)	21
P L . 6	吉野遺跡・ウイズ遺跡採集遺物	23
P L . 7	花城村跡遺跡(上:遠景、下:内部の状況)	31
P L . 8	花城村跡遺跡採集遺物	32
P L . 9	西新里村遺跡(上:1号屋敷、下:2号屋敷、いずれも西側より)	35
P L . 10	西新里村遺跡(上:2号屋敷北側入口、下:3号屋敷南側石積み)	36
P L . 11	遺跡遠景(上:ンブフル遺跡、中:カイジ村跡遺跡、下:豊見親城遺跡)	38
P L . 12	ウブスク遺跡内部の状況	42
P L . 13	フカスク遺跡近景	43
P L . 14	遺跡近景(上:アラスク遺跡、下:仲本村跡遺跡)	45
P L . 15	黒島採集遺物	47
P L . 16	ユウンドゥレースク内部の状況	49
P L . 17	ユウンドゥレースク内部の状況	51
P L . 18	ウティスク山遺跡(上:遠景、下:内部の状況)	52
P L . 19	小浜旧部落遺跡近景	54
P L . 20	嘉弥真遺跡(上:遠景、下:石積み)	55
P L . 21	小浜島採集遺物	57
P L . 22	鳩間島中森貝塚近景	60
P L . 23	鳩間島中森貝塚内部の状況	61
P L . 24	ナーマヤーヤシキ(上:遠景、中・下:内部の状況)	62
P L . 25	ブシンヤー(上:遠景、下:遺物の散布状況)	63
P L . 26	鳩間島採集遺物	65
P L . 27	船浦遺跡遠景	66
P L . 28	船浦遺跡採集遺物	69
P L . 29	上:高那城跡遠景(西側より)、下:高那村跡遺跡の石積み	70
P L . 30	上:古見赤石崎遺跡遠景、下:浦内フチュクル遺跡近景	72

P L .31	西表島・新城島採集遺物	77
P L .32	ニシヌブシヌヤー（上：遠景、下：内部の状況）	81
P L .33	上：ボンヤマー遺跡、下：イールウガン	82
P L .34	上：横目家の墓、下：ウブドゥムル遺跡内部の状況	83
P L .35	下田原城跡遠景（北側より）	86
P L .36	下田原城跡石積み	88
P L .37	伝マシユク村跡遺跡石積みの状況	91
P L .38	伝マシユク村跡遺跡採集遺物	93
P L .39	伝マシユク村跡遺跡採集遺物	95
P L .40	伝マシユク村跡遺跡採集遺物	97
P L .41	伝ペーミシユク村跡遺跡内部の状況	99
P L .42	伝ペーミシユク村跡遺跡採集遺物	101
P L .43	採集遺物	103
P L .44	与那原遺跡（上：遺跡遠景 西側、下：遺跡近景 南側）	106
P L .45	与那原遺跡（上：発掘状況 西側、下：発掘状況 南側）	107
P L .46	与那原遺跡 上：第1号・第10号土壌（J-19）	108
	下：第2号～第4号土壌、P i t .23（J-20）	108
P L .47	与那原遺跡 柱とP i t .	109
P L .48	伝ダンノアジ屋敷（上：遠景、下：石積みの状況）	112

表目次

表1	八重山諸島先史時代の編年	7
表2	石垣島のグスク及び相当期遺跡一覧	24
表3	竹富島のグスク及び相当期遺跡一覧	39
表4	黒島のグスク及び相当期遺跡一覧	48
表5	小浜島・嘉弥真島のグスク及び相当期遺跡一覧	58
表6	鳩間島のグスク及び相当期遺跡一覧	59
表7	西表島のグスク及び相当期遺跡一覧	75
表8	新城島のグスク及び相当期遺跡一覧	85
表9	波照間島のグスク及び相当期遺跡一覧	99
表10	与那国島のグスク及び相当期遺跡一覧	113

第I章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

グスク分布調査は、沖縄県が本土に復帰して以後今日に至るまで、大規模化した諸開発による遺跡の破壊、消滅への歯止めをねらったものである。特に鉱業権との関わりで石灰岩丘陵上の高所に立地するグスク遺跡が消滅の危機に瀕することから、現地踏査を行い、縄張り図を作成し、遺跡の範囲・性格等を把握するとともに、早急なグスクマップ作成の必要が痛感された。

これに伴い、昭和52年度から4ヵ年計画で、沖縄本島及び周辺離島を対象に調査が実施された。調査はまず昭和52年度の本島北部地区を最初に、昭和53年度に中部地区、次いで南部地区と順次調査を進める予定であったが、中部地区の調査が終了した時点で、諸開発に伴う埋蔵文化財の調査が急増し、昭和54・55年度の2ヵ年間は調査を中断せざるを得ず、昭和56年度より南部地区の調査が開始され、翌昭和57年度に「ぐすく グスク分布調査報告（I）—沖縄本島及び周辺離島—」として、調査の成果が報告されている。

その後、新知見も相次ぎ、また考古学的な同時代の研究も進み、考古学からのアプローチによる立地、形態の差異の検討の必要性があることが確認された。

このような成果に基づき、宮古・八重山地域を含めた先島地区におけるグスク遺跡の展開と様相の実態把握が必要となった。また、急増する諸開発との協議・調整資料作成を早急に行う必要性があり、先島地区へのグスク分布調査が実施されることになった。

まず、昭和62年度から平成元年度までの3ヵ年計画で宮古地区のグスク分布調査が実施され、平成元年度に「ぐすく グスク分布調査報告書（II）—宮古諸島—」として調査の成果が報告されている。引き続き、平成2年度より平成5年度までの4ヵ年計画で八重山地区のグスク分布調査が実施され、本報告をもって、長期にわたって続けられたグスク分布調査は完結することになる。

第2節 調査の方法

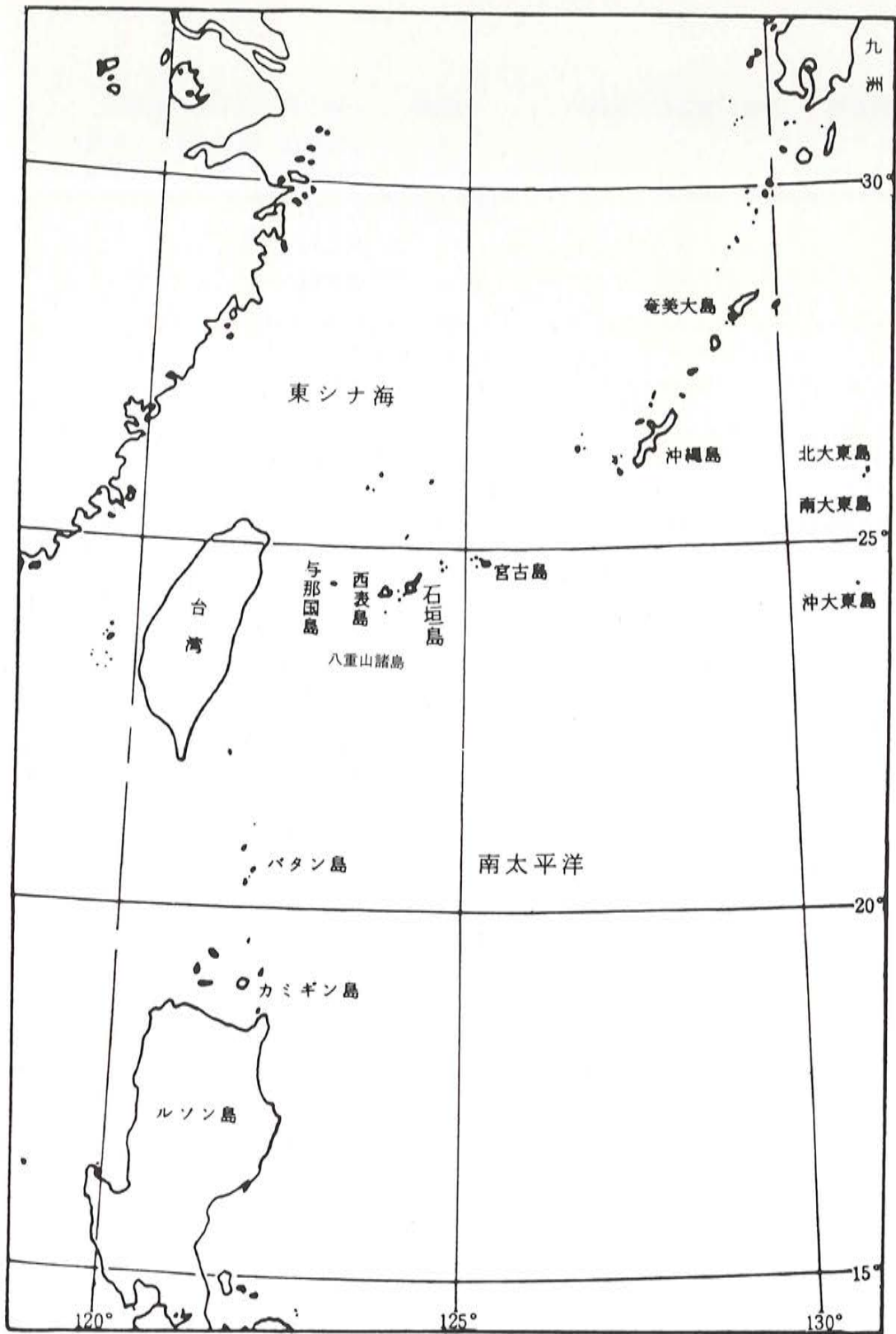
調査は石垣島、竹富島、黒島、小浜島、鳩間島、西表島、新城島、波照間島、与那国島の9島を対象地域とし、文献や口碑伝承あるいはこれまで確認されている遺跡の表面踏査を行い、聞き取り調査も併せて行った。地形図に遺跡の位置をプロットし、特徴的な遺跡については草木の伐開を行い、平板測量により縄張り図を作成した。また、伐開が困難な場合は、コンパスを利用して縄張り図を作成した。各遺跡地内では随時遺物の表面採集も行い、遺跡の年代判定の参考とした。

第3節 調査体制及び成果の記録

1. 調査体制

調査体制については県文化課の史跡・埋蔵文化財担当専門員が主たる調査員となり、当該の市町村の文化財担当職員へ協力を依頼した。また、現地での伐開作業については地元の方々を作業員として雇用し作業を進めていった。聞き取り調査についても地元の古老を中心に進めていった。

事業主体	沖縄県教育委員会	教育長	高良清敏 (平成2年度)
		〃	津留健二 (平成3・4年度)
		〃	嘉陽正幸 (平成5年度)
事業所管	沖縄県教育庁文化課	課長	宜保栄治郎 (平成2・3年度)
	〃	〃	金城 功 (平成4年度)
	〃	〃	糸数兼治 (平成5年度)
	〃	課長補佐	上江洲均 (平成2年度)
	〃	〃	伊佐真一 (平成2・3年度)
	〃	〃	知念 勇 (平成3～5年度)
	〃	〃	川満一成 (平成4・5年度)
事業総括	沖縄県教育庁文化課	史跡・埋蔵文化財係長	安里嗣淳 (平成2年度)
	〃	〃	大城 慧 (平成3～5年度)
事業事務	沖縄県教育庁文化課	文化振興係長	仲里哲雄 (平成2年度)
	〃	文化振興係・管理係長	大村光仁 (平成3～5年度)
	〃	〃 主事	新垣昌頼 (平成2・3年度)
	〃	〃 〃	伊波盛治 (平成4・5年度)
調査員	沖縄県教育庁文化課	史跡・埋蔵文化財係	
		充指導主事	玉津博克 (平成2・3年度)
		〃	我那覇念 (平成4・5年度)
		〃	豊見山禎 (平成2～5年度)
		主任専門員	岸本義彦 (平成2～5年度)
		主任	金城亀信 (平成5年度)
		主任	島袋 洋 (平成5年度)
		専門員	大城秀子 (平成2年度)



第1図 八重山諸島の位置

調査員	沖縄県教育庁文化課	専門員	上地千賀子 (平成2年度)
	〃	〃	上地克哉 (平成4・5年度)
	〃	〃	山城安生 (平成4・5年度)
	〃	嘱託調査員	比嘉優子
	〃	〃	高良三千代
	〃	〃	大城聖子
	〃	〃	安次富智子
	〃	〃	豊見山ゆかり
	〃	〃	仲嶺朋恵
	〃	〃	上原 明
	〃	〃	普天間直也
調査指導	文化庁記念物課	文化財調査官	須田 勉 (平成2年度)
	〃	〃	岡村道雄 (平成3年度)
調査協力	石垣市教育委員会、竹富町教育委員会、与那国町教育委員会 池田栄史 (琉球大学助教授)		

発掘作業員

上地正夫、園田淳美、新城トシ、新城悦子、比屋定百枝、當山光子、石仲信子、親盛 重、宮良フジ、前花トヨ、美底静江、宮良英子、那良伊孫一、那良伊知子、那良伊正伸、石垣金星

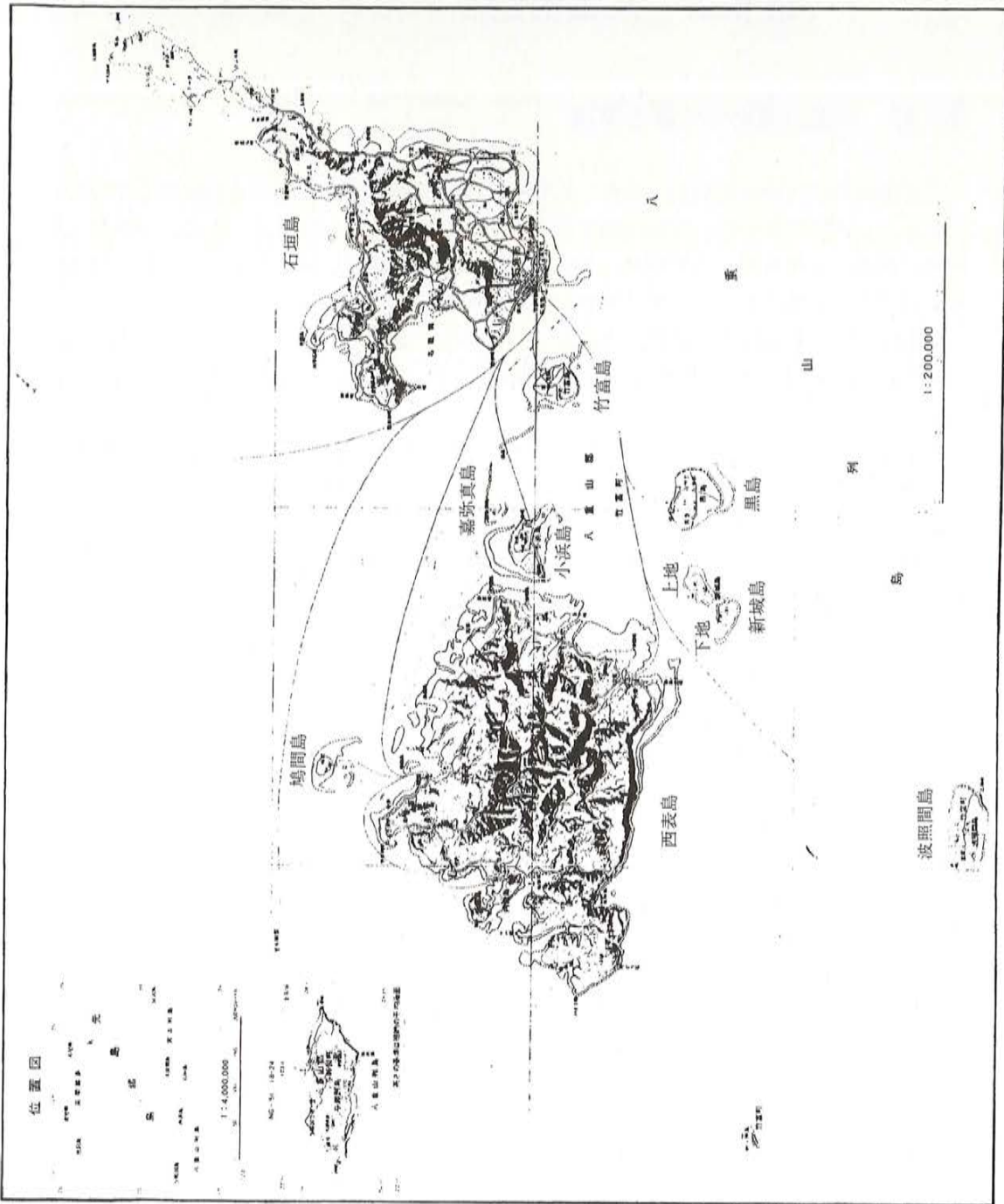
資料整理作業員

崎原美智子、浜元春江、平良貞枝、高宮とり、比嘉昌子、金武雅子、当山慶子、仲宗根三枝子、石嶺真由美、岡村綾子、城間悦子、金城礼子、大城淳子、仲唐雅見、宮城由江、當間麻子、新垣ゆかり、新城さゆり、鶴元寿充、宮城康二、進村真之、西園勝彦、井上正隆、田尻義了、松尾卓、金城健太、池原直美、小嶺禮子、西銘パトロシニア、又吉純子、平良貴子、津波古良子、杉山知寿子、玉寄智恵子

2. 成果の記録

第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章第1節・第4～6節・第8・9節、第Ⅳ章	豊見山 禎
第Ⅲ章第2節	金城 亀信
第Ⅲ章第3節、第7節	岸本 義彦

報告書全体の編集は豊見山禎・島袋洋があたった。



第2図 調査対象地域各島の位置

第Ⅱ章 八重山諸島の位置と環境

第1節 八重山諸島の位置と環境

八重山諸島は、沖縄本島から南西へ約460km、宮古島より約150km、多良間島より約80kmに位置し、宮古諸島と共に先島諸島を構成している。石垣島、竹富島、黒島、小浜島、鳩間島、西表島、新城島、波照間島、与那国島、仲ノ御願島の10島から成り、与那国島の西海上には台湾が控えている。仲ノ御願島を除き有人島である。

地形的には、石垣島、小浜島、西表島、与那国島では中央部に山地が発達し、周辺には石灰岩台地や平地、砂丘地が広がるという形状を呈し、他の島々は島全体が琉球石灰岩に覆われ、一般に低平である。

八重山地域における考古学研究は明治の頃より断片的な調査がなされていたが、本格的な調査研究は戦後からである。特に、1959年早稲田大学八重山調査団が来島し、八重山諸島各地の遺跡の発掘調査を実施し、翌年、その成果を基に八重山の編年を発表している。

編年は第一期から第四期の4期編年で、第一期が無土器の貝塚で土器を伴わず、石器、貝斧、スイジガイ・イモガイ製利器が出土する時期、第二期は下田原式土器に代表される土器を伴う時期、第三期と第四期は八重山式土器と輸入陶磁器が伴出する時期である。第三期と第四期の明確な区別は困難であるが、第三期が13～15世紀頃、第四期が16～17世紀頃と考えられている。この編年は近年の調査事例から第一期と第二期が逆転しているが、第三期・第四期については詳細な検討がなされておらず、基本的に現行の通りである。

第2節 八重山諸島のグスク時代

八重山諸島において、沖縄本島及び周辺離島のグスク時代に相当する時期は八重山編年の第三期と第四期である。この時期は、前述したように八重山式土器、輸入陶磁器が出土するほか、須恵器、鉄製品、炭化米・麦等が出土し、沖縄本島のグスク時代と同じ様相を示す。

遺跡の調査例もカンドウ原遺跡、フルスト原遺跡、ピロースク遺跡、桃里恩田遺跡、石城山遺跡、竿若東遺跡、平得仲本御嶽遺跡、アラスク村跡、与那原遺跡、慶田崎遺跡、新里村遺跡等が調査されている。しかしながら、石積み等の施設を有する遺跡の調査例はフルスト原遺跡、ピロースク遺跡、新里村遺跡と少なく、八重山諸島に同時代に存在したと思われる石積み等の施設をもつ遺跡の立地・構造・性格を明らかにする上でも、また沖縄本島地区との比較研究の点からも課題が残る。

一方、八重山地域では、沖縄本島の「グスク」に対応する語として「スク」・「シュク」がある。「グシク」という語もあるが、これは一般に石積みそのものを指す語で、西表島

では屋敷の石囲いや猪垣等を「グシク」と呼んでいる。「スク」・「シュク」の名を冠する遺跡は八重山地域に広く見られ、石垣島のピロースク、竹富島のハナスク、黒島のフカスク、小浜島のユンドゥレスク、波照間島のマシュク、ミシュク等各島に存在する。

また、伝承ははっきりしないが昔武士が住んでいたと伝えられ、「ブヌヤー」と呼ばれる場所もある。今回の分布調査では、前述の観点から可能なかぎりこれらの遺跡の縄張り図の作成を行い、基礎資料の収集に努めた。

表1 八重山諸島先史時代の編年

編年	遺跡名	遺物
第一期	仲間第一 (西表)	<u>石器 (磨製・半磨製)</u>
第二期	下田原 仲間第二 大原川付近小貝塚(西表)	<u>土器 (小量) ・石器、貝器・骨角器</u>
第三期	山原 (石垣) 平西 (西表) フルロウ山 (小浜) フルスト原 (石垣) 波照間貝塚群	<u>土器 (外耳多量・磁器・その他)</u> 鉄製品・ <u>石器</u> ・ <u>貝器</u> ・ <u>骨角器</u>
第四期 ?	大原 (西表) 野底 (西表) 川平第一 (石垣) 川平第二 (石垣) 川平第三 (石垣) 名蔵川 (石垣) 黒島	<u>土器 (ハナレ系? 磁器・その他)</u> ・鉄製品

——線は各遺跡に共通するもの

(滝口宏編『沖縄八重山』より)

第Ⅲ章　グスクの分布状況とその概要

第1節　石垣島

1. 位置と環境

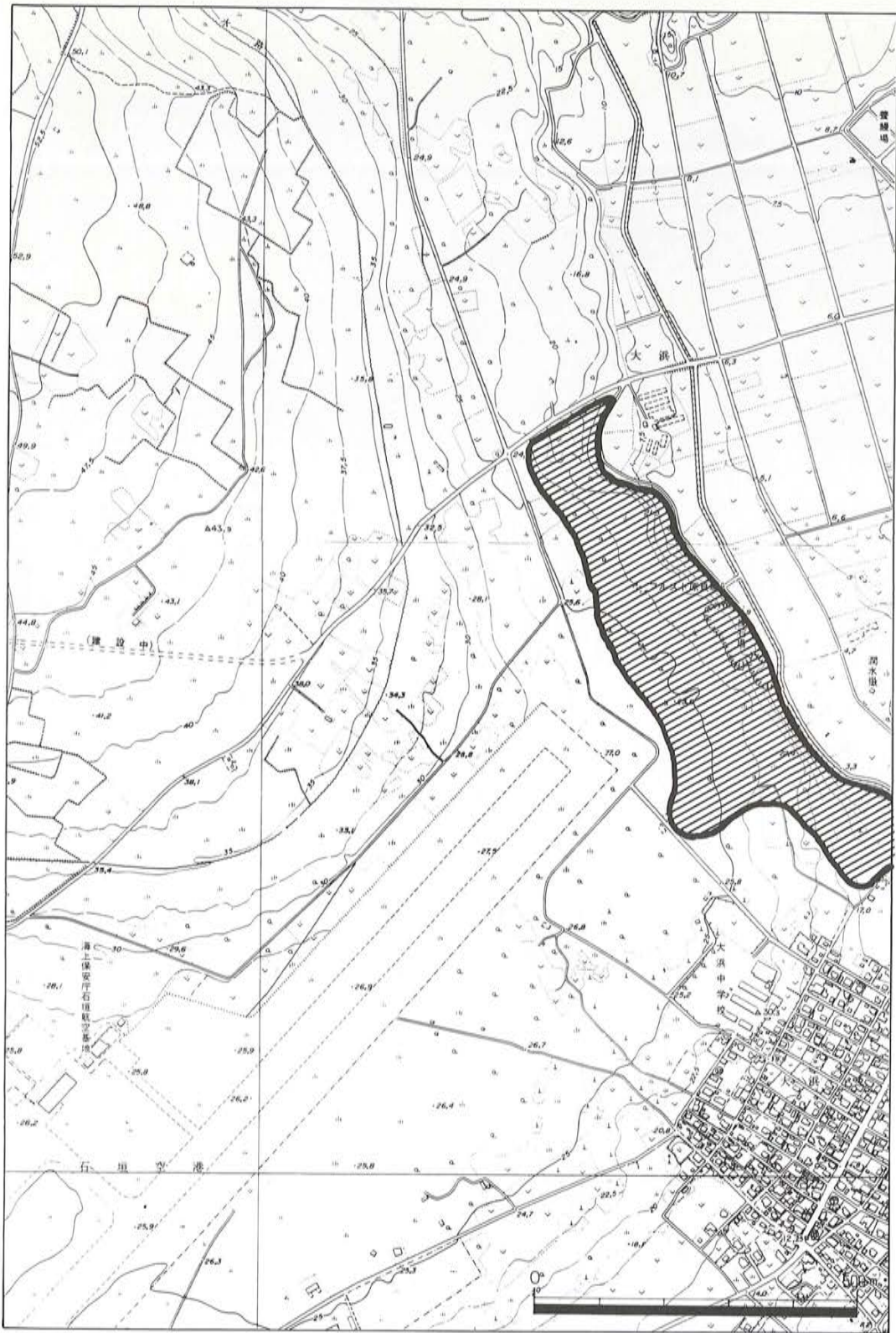
石垣島は、北緯24度1分～37分、東経124度4分～20分の間に位置し、八重山諸島中2番目に大きな島である。那覇より南西へ432kmの地点にある。地形は、島の中央部に於茂登岳（標高526m）・東にホーラ岳・ヌスクマーペー・金武岳が聳え、これらを源に北に荒川、吹通川、南に宮良川、轟川が流れ、河口付近では平地の発達が見られるが、概してこれら山々を境に島の北半分と南半分は異なる地形を呈している。すなわち、北半分はこれらの連山が海岸近くまで迫っているため、名蔵一帯を除き平野の発達が乏しい。これに対し南半分は山裾が広く、石灰岩台地や沖積平野が発達している。海浜砂丘地も南半分のほうが良く発達している。遺跡はこれら石灰岩台地・沖積平野・海浜砂丘地に立地している。

2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要

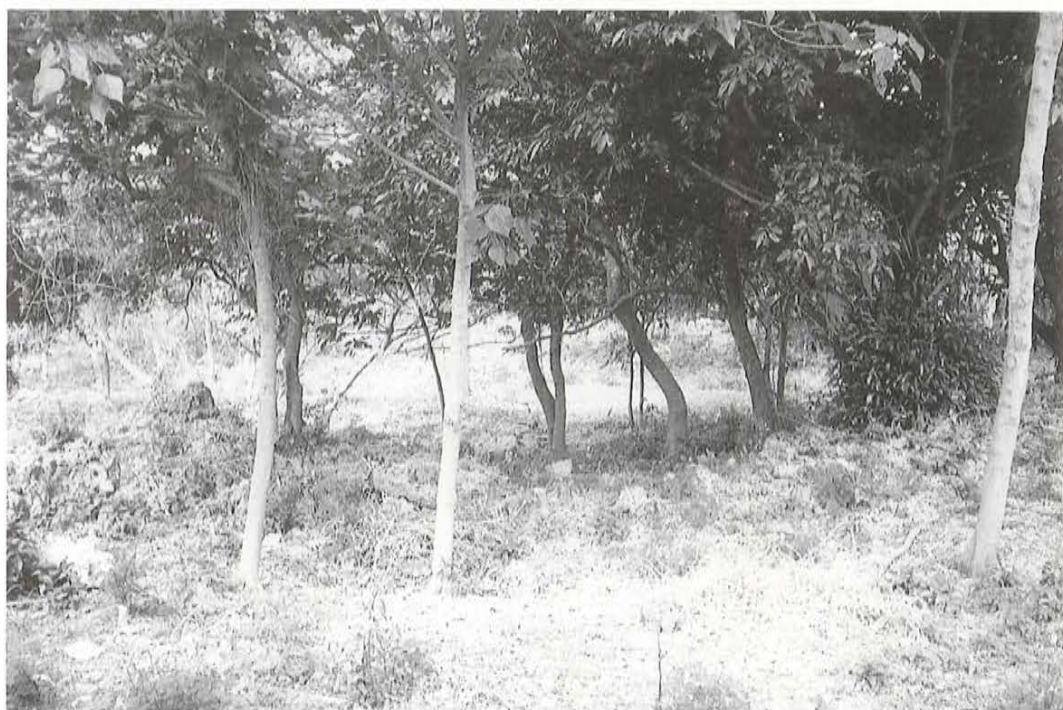
①フルスト原遺跡（第4図）

遺跡は石垣空港の東隣、宮良湾に面した標高約20mの琉球石灰岩台地上に形成されている。遺跡の北側から東側にかけては断崖となっており、西側から南側にかけては緩やかな斜面となっている。遺跡の規模は南北約900m、東西約200mと広大な範囲におよび、昭和51年に実施された調査では、石塁区画・城門・古墓等の遺構が確認されている。また、北側の崖下には貝塚が形成されている。

石塁区画は崖の縁辺部で5基、崖から約20mほど奥まった所に10基、計15基確認されている。形状はほぼ方形をなし、規模は20m四方である。周囲を琉球石灰岩の野面積みで囲み、石積み幅は3～4m、高さは残存高1～1.5mを測る。城門は北東部で確認されており、断崖が途切れ緩傾斜となっている箇所に二重の石積みを巡らせている。遺物は土器・輸入陶磁器等が出土している。本遺跡はオヤケアカハチの居館跡と伝えられ、昭和53年に国指定史跡となっている。



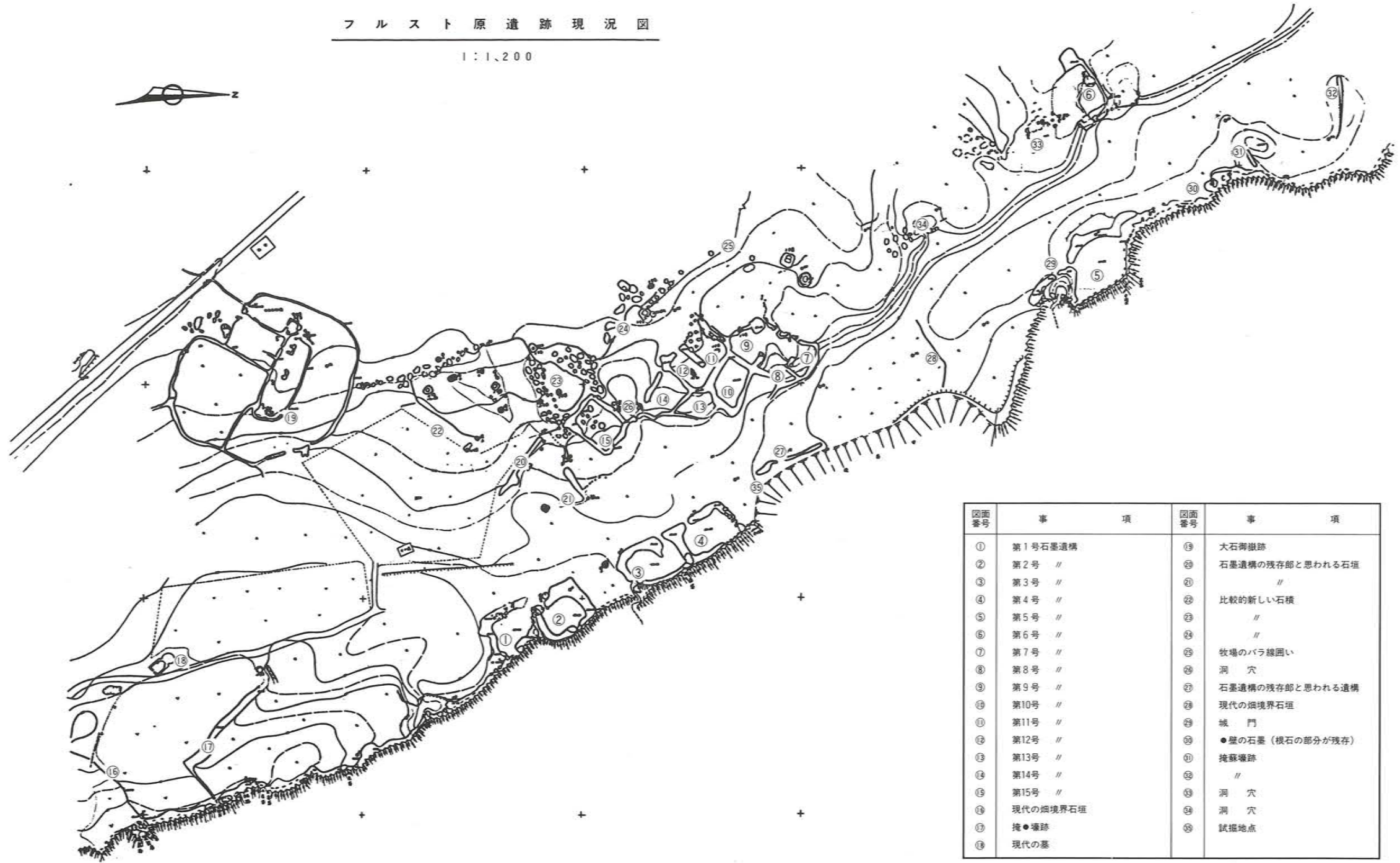
第3図 フルスト原遺跡の位置



P L . 1 フルスト原遺跡（上：遠景、下：近景）

フルスト原遺跡現況図

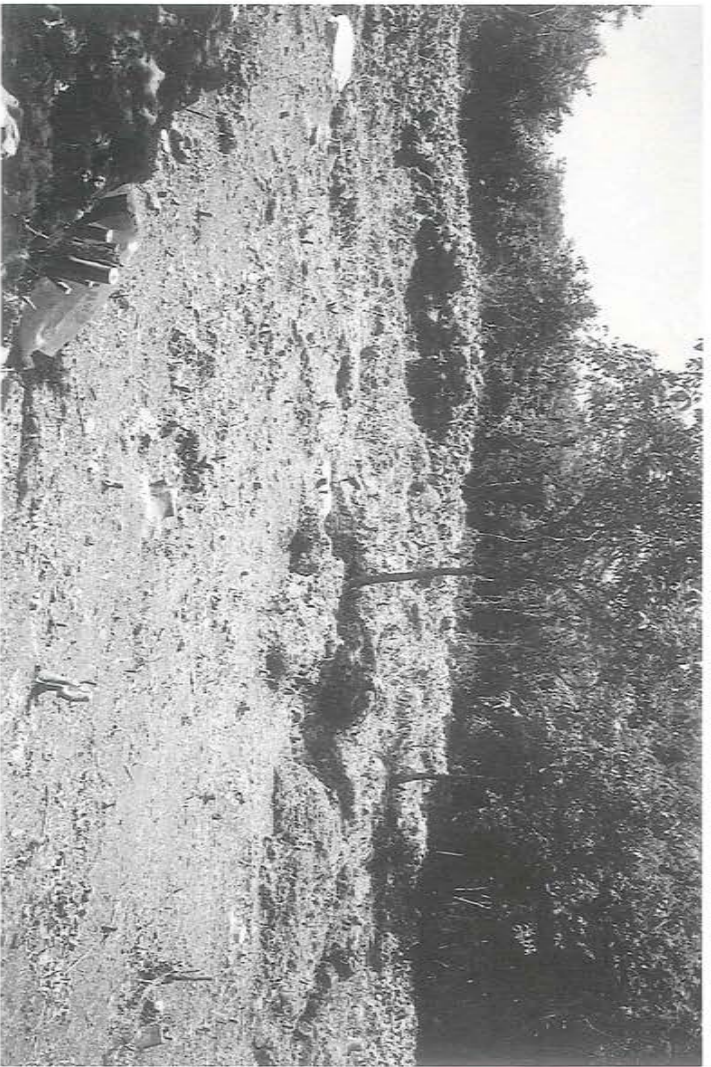
1:1,200



当真、原屋、津波 測量 1976. 12. 20

第4図 フルスト原遺跡の現況

(フルスト原遺跡基本構想 1990より)



PL. 2 フルスト原遺跡の石積み



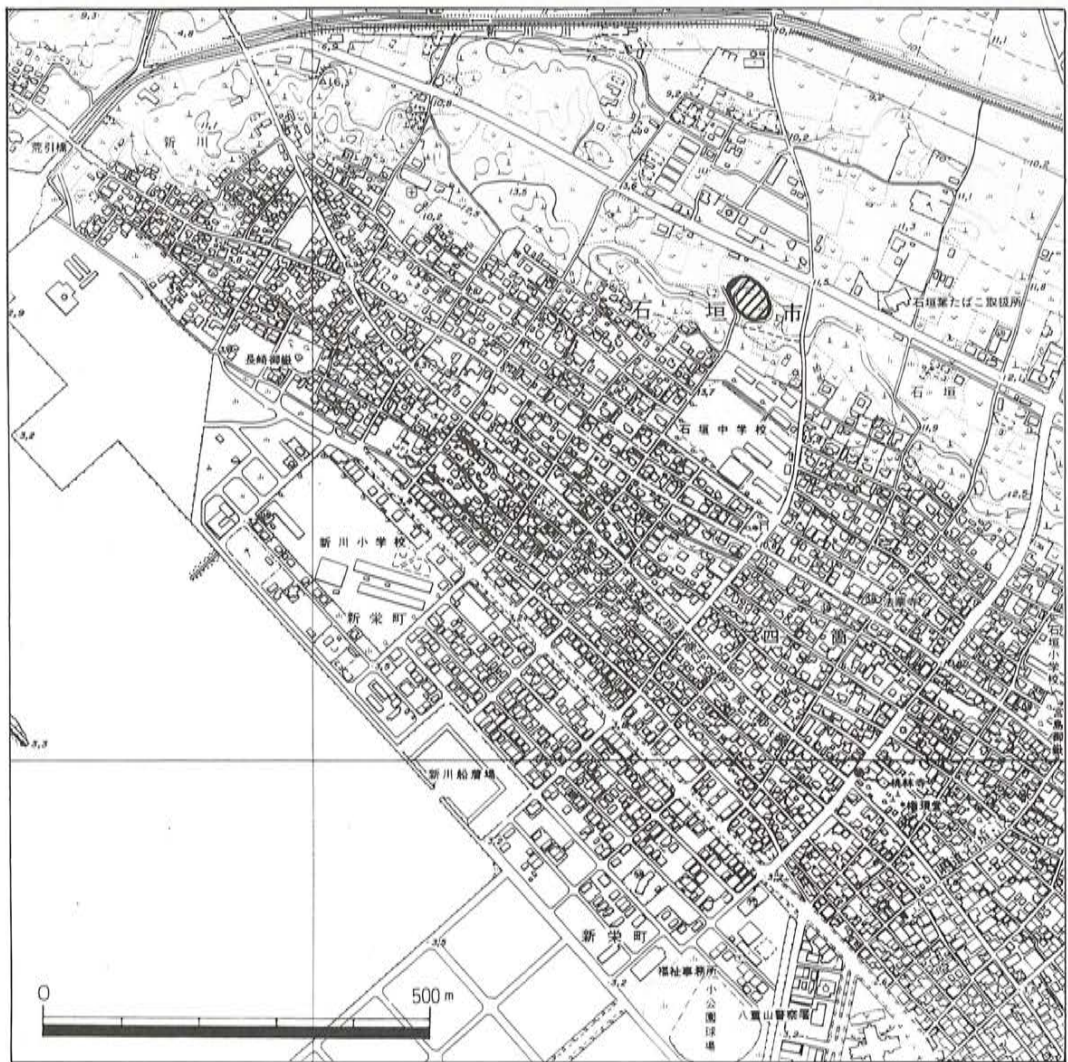
P.L. 2 フルスト原遺跡の石積み

②ピロースク遺跡

遺跡は石垣中学校の北側約50mにある琉球石灰岩の小丘上（標高約18m）に形成されている。遺跡の北側は崖になっているが、南側は緩やかな斜面となっている。

本遺跡は昭和56・57年に範囲確認調査が実施され、2枚の遺物包含層が確認され、第1層が14～15世紀、第2層が12～13世紀という年代を得ている。住居跡、石垣、排水溝、炉跡などの遺構が検出され、中国産陶磁器・土器・貝製品などが出土している。調査の結果、石垣は14世紀以降に築かれていること、住居跡の形態が12～13世紀が円形状の平地住居跡、14～15世紀には方形の住居跡に移行することが確認されている。

本遺跡出土の白磁内弯碗はピロースクタイプと分類され、編年上の指標になっている。また、土器も本遺跡特有の鍋形土器が出土している。



第5図 ピロースク遺跡の位置

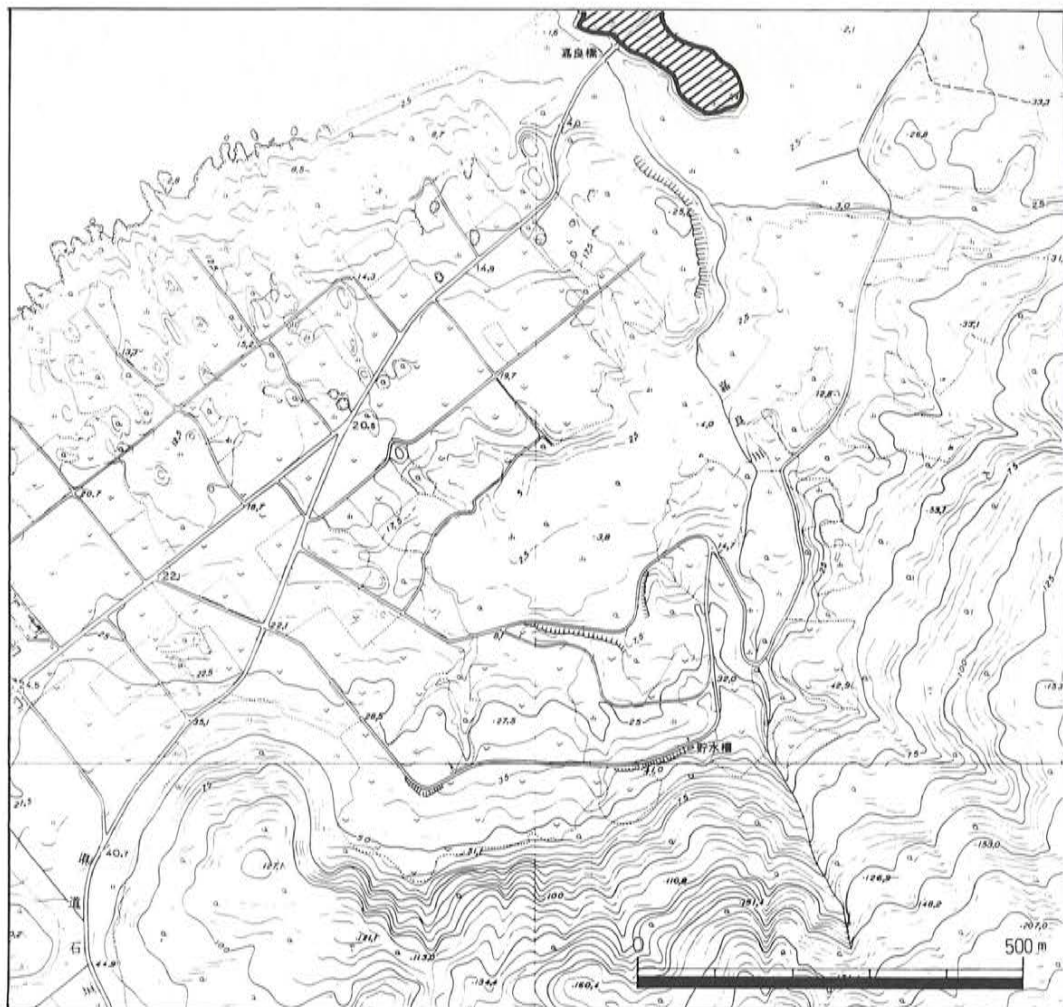


P.L. 3 ビロースク遺跡の遠景

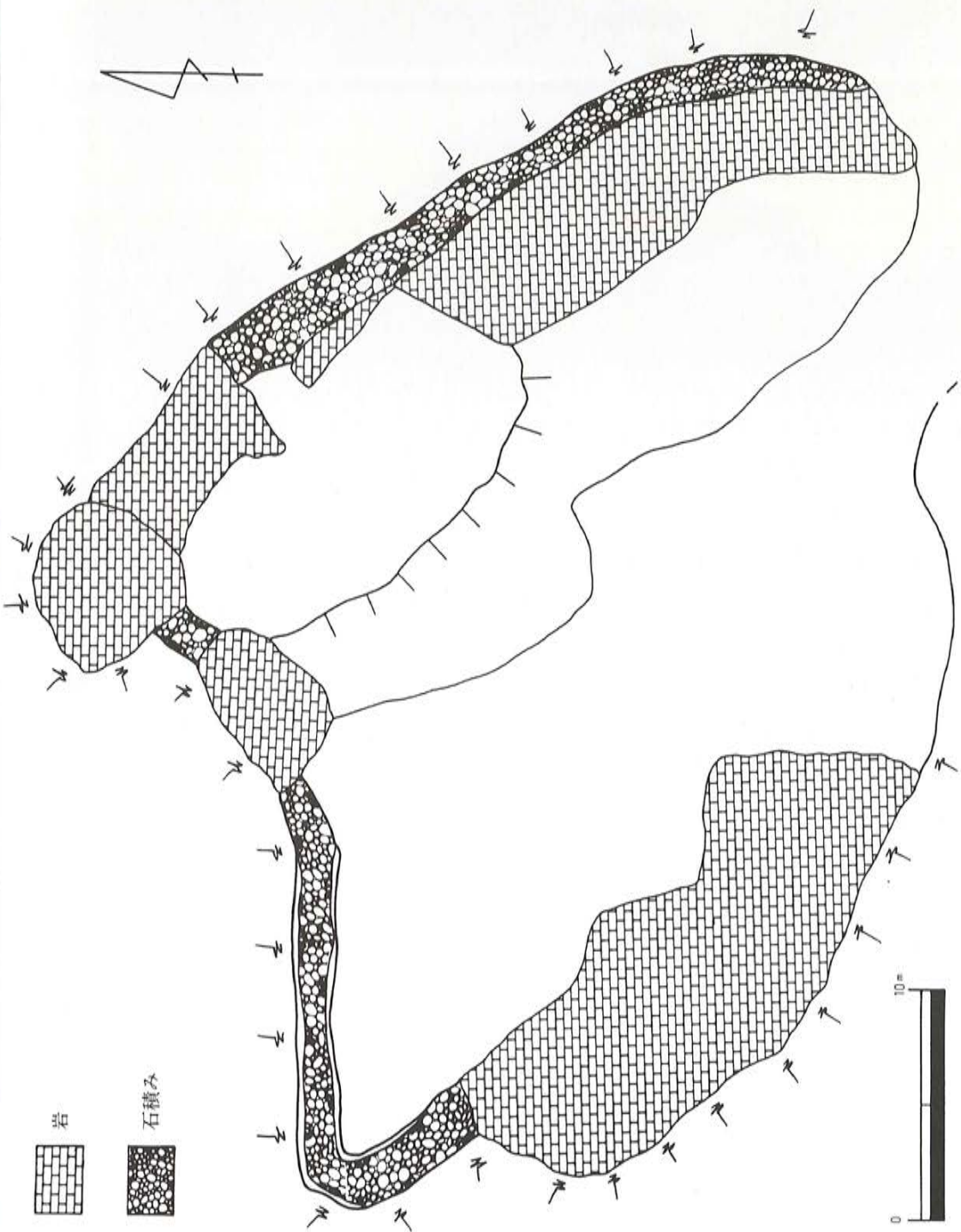
③吉野遺跡（第7図）

吉野部落の南南西約500m、嘉良橋の北隣に位置し、海岸に突出した標高7～8mの琉球石灰岩からなる小丘上から県道をこえた雑木林内にかけて遺跡は形成されている。今回は小丘部分の調査を行った。

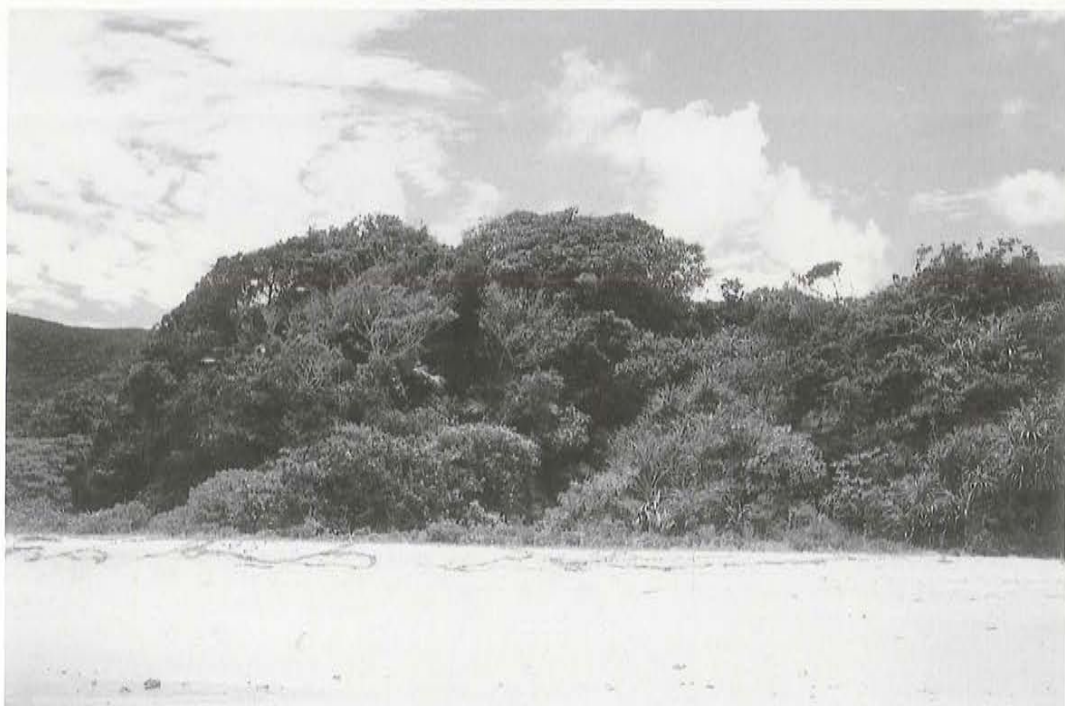
遺跡の現況は三方が崖になっており、南側は県道によって断ち切られている。内部は石灰岩の露頭が各所にみられるが、平坦面が2段確認された。石積みは琉球石灰岩の野面積みで石灰岩の露頭をうまく利用しながら石積みを巡らせている。東側と北側の崖の縁辺部で確認され、東側は石灰岩の露頭の上に積んでおり、1段目の平坦面からみれば露頭自体が障壁の役割を果たしている。この部分の石積みは崩れがひどく根石部分しか確認できないが、崖の縁辺部下1m程のところから積み上げているのが観察される。北側の石積みは石灰岩の露頭の間を崖線に沿って巡らせている。残りが比較的良好で、残存高約80cmを測る。西側は露頭自体が障壁となっている。遺物は輸入陶磁器・土器・貝殻片が散布している（第10図3・4・7・9～11）。



第6図 吉野遺跡の位置



第7図 古野遺跡の概略

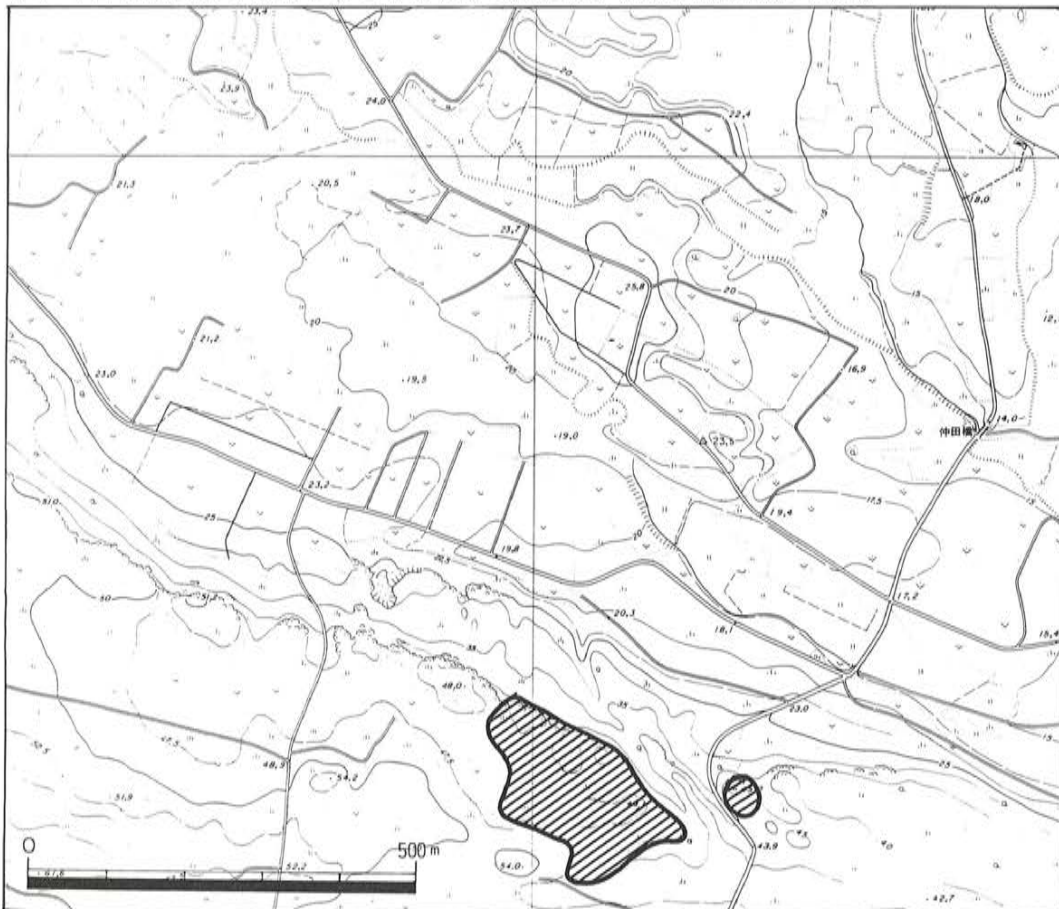


P L . 4 吉野遺跡（上：遠景、下：内部の状況）

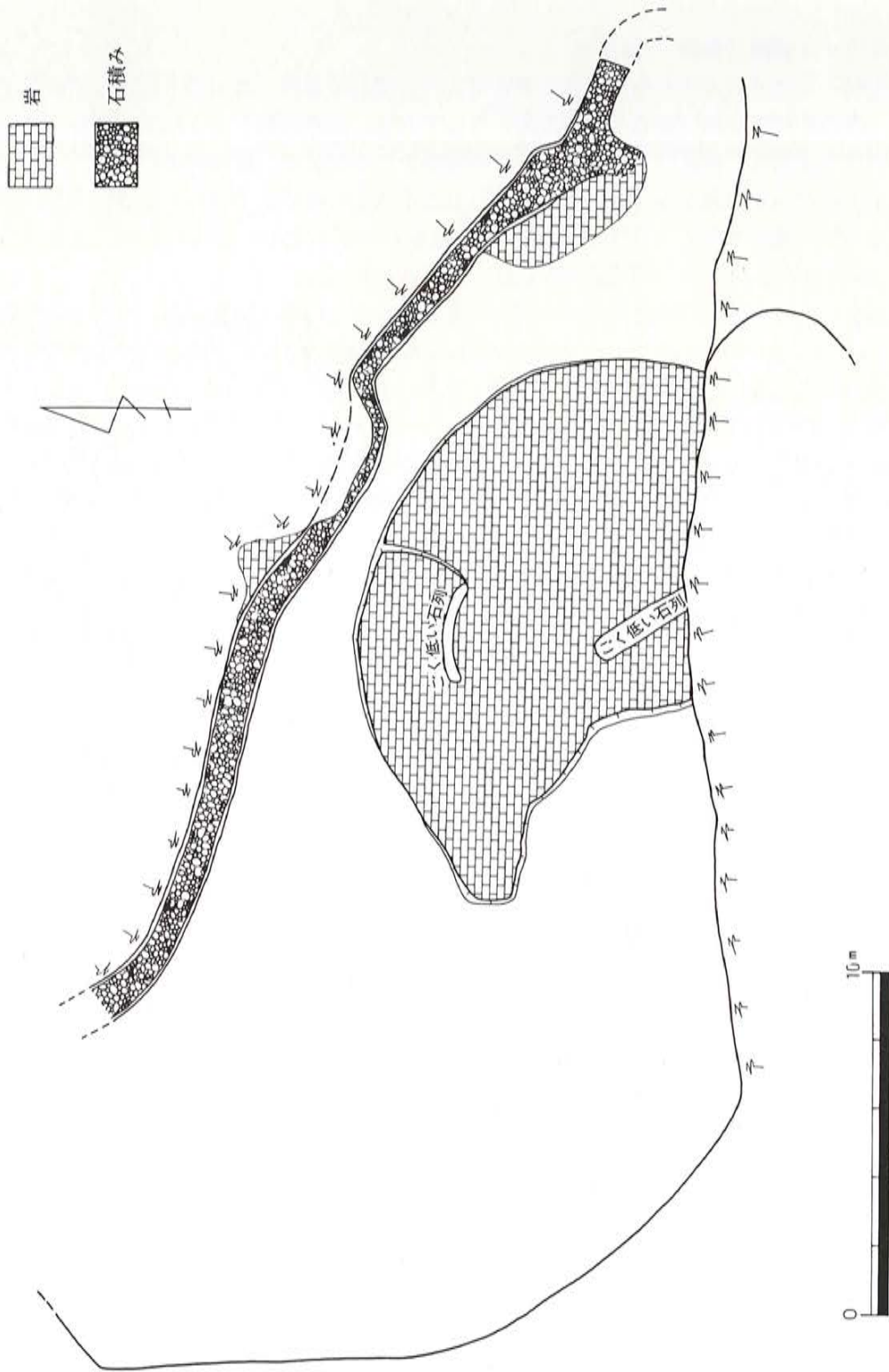
④ウイズ遺跡（仮称）（第9図）

盛本勲・玉津博克両氏の発見に係る遺跡で、宮良部落の北西、轟川の上流近くに位置する。一帯の地形は北側は琉球石灰岩の崖となっており、南側は緩やかな傾斜地となっている。両氏の確認した遺跡はの中で小丘上の地形をなす部分で、現在牧場になっている。丘の中央は凹み平坦面がみられ、坪所と見られる小さな石囲いが平坦面の南隅にある。斜面には石灰岩塊が散乱しており、根石とみられるものがわずかに認められる。遺物は土器・貝殻片が見られ、輸入陶磁器は白磁片が採集されている。

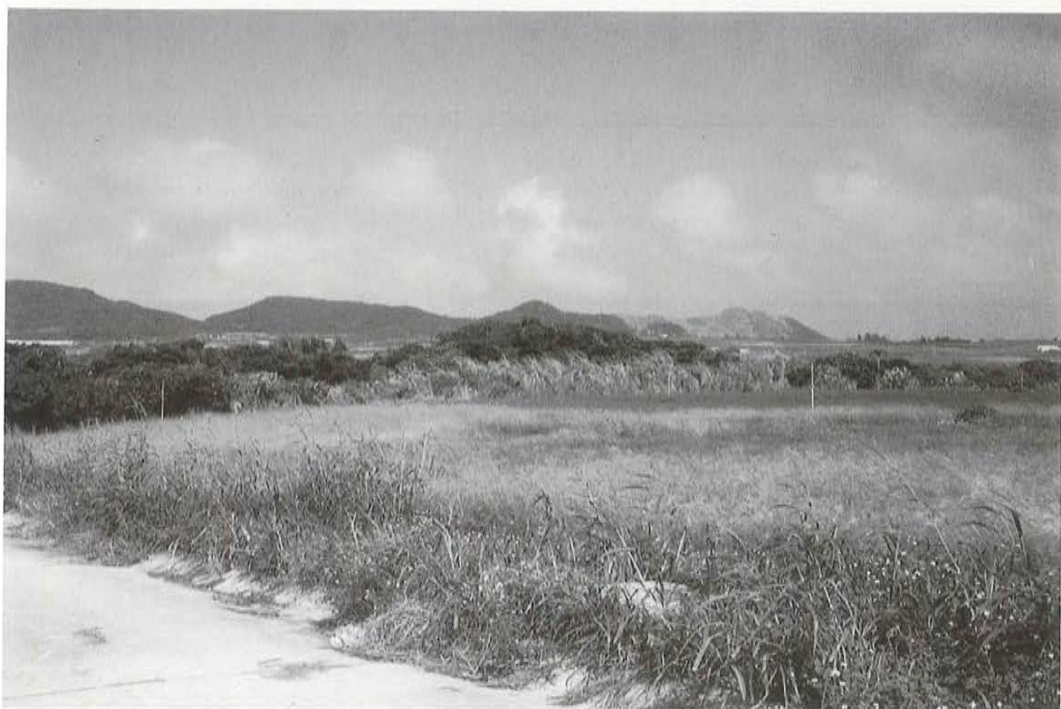
今回更に道路を越えて西側の雑木林内の踏査を行ったところ、崖線に沿って石積みが残存していることが確認された。石積みは琉球石灰岩の野面積みで、幅70~80cm、残存高80cmを測り、崖線に沿って東西方向に延びている。東の方で石積みは2つに分岐するようであるが、崩れて確認できなかった。内部は石灰岩のフラットな露頭があり、石灰岩塊を並べた石列が2箇所みられる（第9図）。遺物は遺跡の西の畑地との境界近くに散布しており、輸入陶磁器・土器片・貝殻片が採集できる（第10図1・2・5・6・8）。遺跡地の周辺は遺跡部分が雑木林として残るほかは畑地の造成によって地下げされており、旧地形を窺うことができない。玉津氏の聞き取りではこの一帯はウイズと呼ばれているようであるが、今回は聞き取り調査をおこなえなかったため、遺跡名は仮称とした。



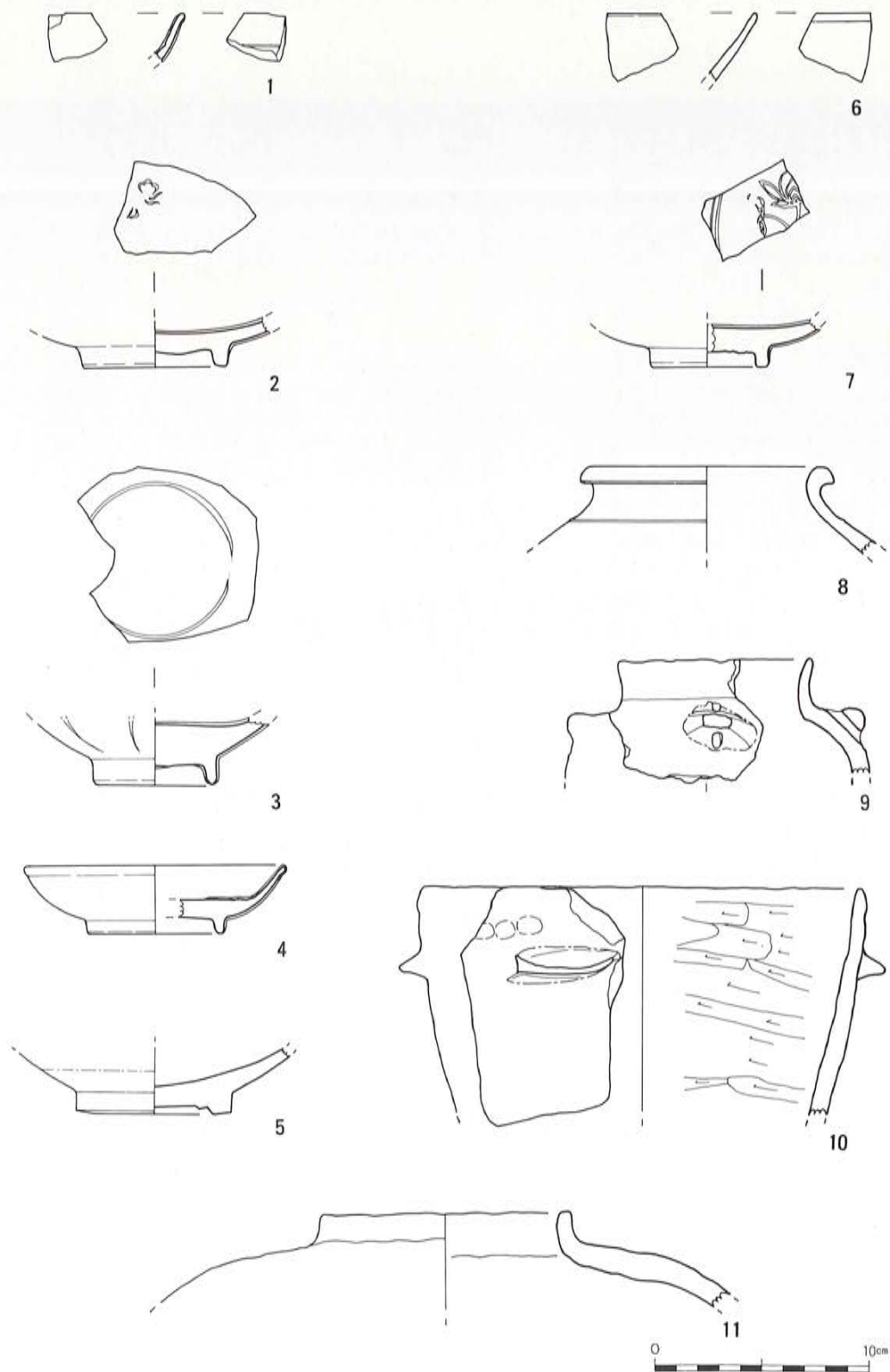
第8図 ウイズ遺跡の位置



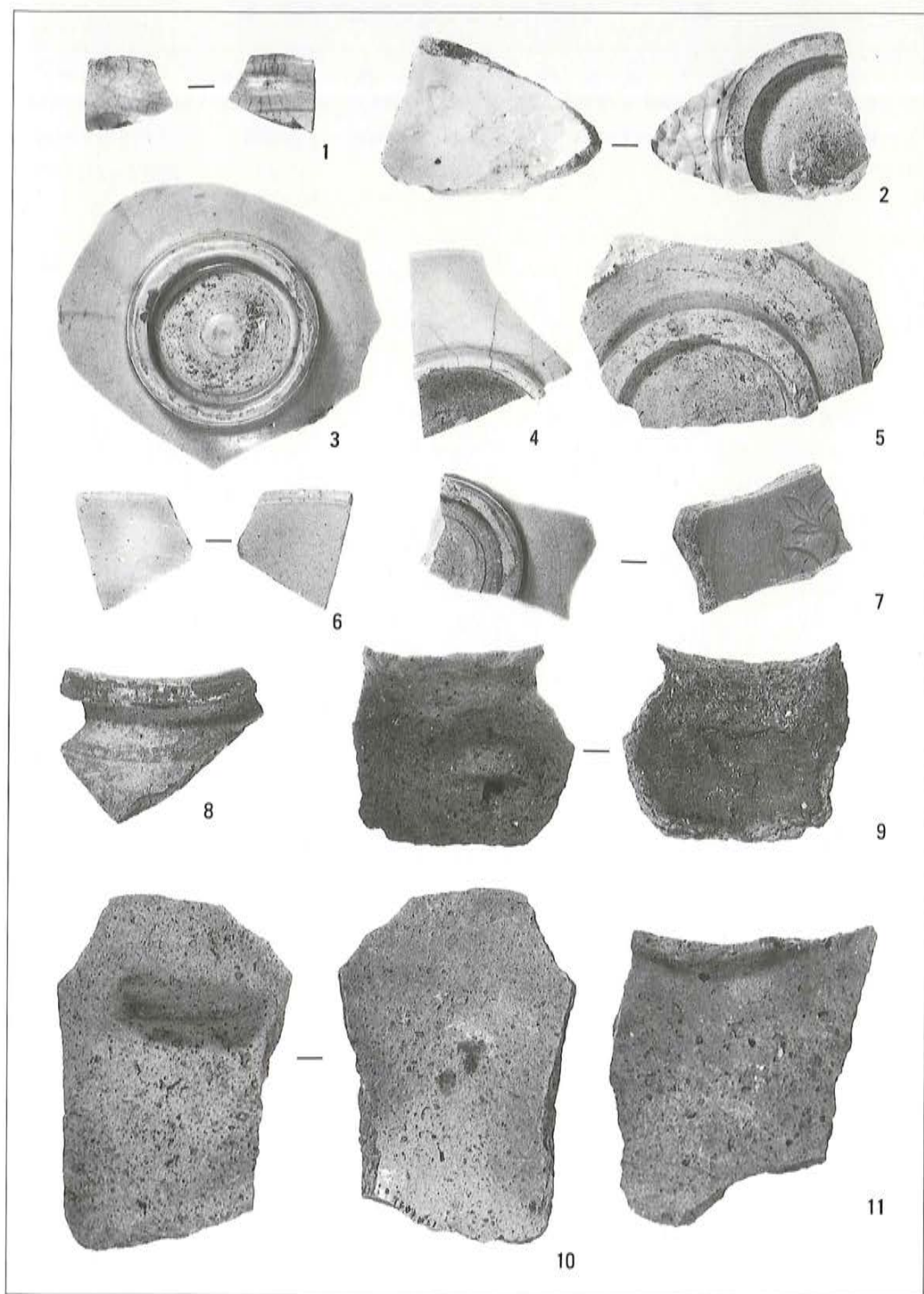
第9図 ウイス遺跡の概略



P L. 5 ウイズ遺跡 (上：遠景、下：内部の状況)



第10図 吉野遺跡・ウイズ遺跡採集遺物（1・2・5・6・8：ウイズ遺跡、3・4・7・9～11：吉野遺跡）



P.L. 6 吉野遺跡・ウイズ遺跡採集遺物

表 2-1 石垣島のグスク及び相当期遺跡一覧

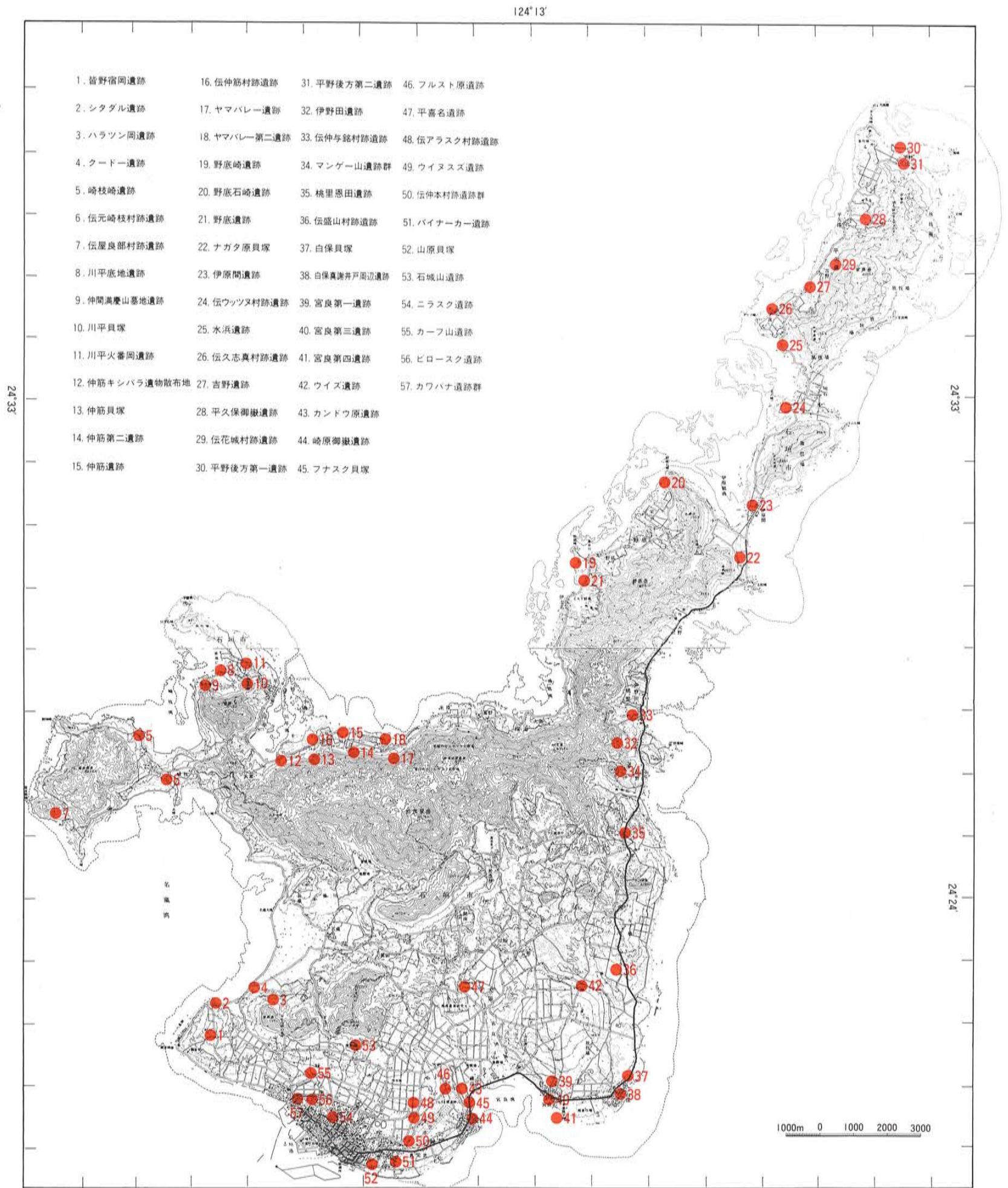
遺跡名	所在地	遺物	編年	備考
1. 皆野宿岡遺跡	石垣市字大川	土器・外来陶磁	第三期	伝ガボネアジ館 海底からも外来 陶磁採集され る。
2. シタダル遺跡	〃	外来陶磁	〃	
3. ハラツン岡遺跡	〃	〃	〃	
4. クードー遺跡	〃	土器・外来陶磁・ 貨銭	〃	
5. 崎枝崎遺跡	石垣市字崎枝	土器・外来陶磁	〃	近世の村落跡 〃
6. 伝元崎枝村跡遺跡	石垣市字崎枝	土器・外来陶磁	第四期	
7. 伝屋良部村跡遺跡	〃	〃	〃	
8. 川平底地遺跡	石垣市字川平	土器・外来陶磁	第三期	昭和47年5月15 日国指定
9. 仲間満慶山墓地遺跡	〃	土器・外来陶磁	〃	
10. 川平貝塚	〃	土器・外来陶磁・ 勾玉	〃	
11. 川平火番岡遺跡	〃	土器・外来陶磁・ 染付	第四期	
12. 仲筋キシバラ遺物散 布地	石垣市字仲筋	土器・外来陶磁	第三期	近世の村落跡
13. 仲筋貝塚	〃	土器・外来陶磁	〃	
14. 仲筋第二遺跡	〃	土器	〃	
15. 仲筋遺跡	〃	土器・外来陶磁	第三期	
16. 伝仲筋村跡遺跡	〃	土器・石器	〃	
17. ヤマバレー遺跡	石垣市字米原	土器・外来陶磁	第三期	
18. ヤマバレー第二遺跡	〃	土器・外来陶磁	第三・四期	
19. 野底崎遺跡	石垣市字野底	土器・外来陶磁	第三期	村落跡？
20. 野底石崎遺跡	〃	土器・外来陶磁	〃	
21. 野底遺跡	〃	土器・沖縄産陶器	第四期	

表 2-2 石垣島のグスク及び相当期遺跡一覧

遺 跡 名	所 在 地	遺 物	編 年	備 考
22. ナガタ原貝塚 23. 伊原間遺跡	石垣市字伊原間 〃	土器・外来陶磁 土器・外来陶磁	第三期 第四期	近世の村落跡？
24. 伝ウツヌ村跡遺跡	石垣市字明石	土器・外来陶磁	第三期	
25. 水浜遺跡 26. 伝久志真村跡遺跡	石垣市字久宇良 〃	土器 土器・外来陶磁	第三期 第三・四期	
27. 吉野遺跡	石垣市字吉野	土器・外来陶磁	第三期	
28. 平久保御嶽遺跡 29. 伝花城村跡遺跡	石垣市字平久保 〃	土器・外来陶磁 土器・外来陶磁	第三期 第四期	
30. 平野後方第一遺跡 31. 平野後方第二遺跡	石垣市字平野 〃	土器・外来陶磁 土器・外来陶磁	第三期 〃	伝平久保加那按 司館址
32. 伊野田遺跡 33. 伝仲与銘村跡遺跡	石垣市字伊野田 〃	土器・外来陶磁 土器・外来陶磁	第三期 第四期	近世の村落跡
34. マンゲー山遺跡群	石垣市字星野	土器・外来陶磁	第三期	
35. 桃里恩田遺跡	石垣市字大里	土器・外来陶磁	〃	
36. 伝盛山村跡遺跡 37. 白保貝塚 38. 白保真謝井戸周辺 遺跡	石垣市字白保 〃 〃	土器・外来陶磁 土器・外来陶磁 土器・外来陶磁	第四期 第三期 〃	近世の村落跡
39. 宮良第一遺跡 40. 宮良第三遺跡 41. 宮良第四遺跡	石垣市字宮良 〃 〃	土器・外来陶磁・ 骨製品 土器・外来陶磁 土器・外来陶磁	〃 〃 第三・四期	

表 2 - 3 石垣島のグスク及び相当期遺跡一覧

遺 跡 名	所 在 地	遺 物	編 年	備 考
42. ウイズ遺跡	石垣市字宮良	土器・外来陶磁	第三期	
43. カンドウ原遺跡	石垣市字磯辺	土器・外来陶磁・ 鉄器	第三・四期	
44. 崎原御嶽遺跡	石垣市字大浜	土器・外来陶磁・ 鉄滓	第三・四期	
45. フナスク貝塚	〃	土器・外来陶磁	第三期	
46. フルスト原遺跡	〃	土器・外来陶磁	〃	1977年 3 月 3 日 国指定
47. 平喜名遺跡	石垣市字平得	土器・外来陶磁	〃	
48. 伝アラスク村跡遺跡	〃	土器・外来陶磁	〃	村落跡
49. ウイヌスズ遺跡	〃	土器・外来陶磁	〃	村落跡？
50. 伝仲本村跡遺跡群	〃	土器・外来陶磁	〃	
51. パイナーカー(井戸) 遺跡	〃	土器・鉄滓	第三・四期	
52. 山原貝塚	石垣市字登野城	土器・外来陶磁・ 貨銭	第三期	
53. 石城山遺跡	石垣市字石垣	土器・外来陶磁	〃	鹿化石骨多量に 産出
54. ニラスク遺跡	〃	土器・外来陶磁	〃	
55. カーフ山遺跡	〃	土器・外来陶磁	〃	
56. ピロースク遺跡	石垣市字新川	土器・外来陶磁・ 石器・骨器	〃	
57. カワバナ遺跡群	〃	土器・外来陶磁	〃	



第11図 石垣島のグスク及び相当期遺跡の分布

第2節 竹富島

1. 位置と環境

竹富島は石垣島の西方、6.5kmにあり、北緯24° 18' 58"、東経124° 6' 7" の位置にある。島の面積は6.32km²、海岸線の延長は9.15kmである。平成5年度の島の人口は269人（男性126人、女性143人）で、世帯数は134世帯である。島で最も高い場所は、小城盛の20.5mである。地質は先第三系古期岩類（チャートを主として砂岩・礫岩から構成）と、それを不整合におおう第四系の琉球石灰岩が重なり、その上に完新統の新时期砂丘砂層・現世サンゴ礁堆積物・ビーチロックなどが堆積する。石垣島からの交通手段は定期船や観光船に限られ、所要時間も15分前後を要する。石垣島から最も近い為、観光客が年間10万人以上（平成4年度）も訪れていて八重山観光のメッカとなっている。この島の集落の76.6haは国指定重要伝統的建造物群保存地区となっている。その他国指定無形民俗文化財の種子取が10日間に及んで祭事が行われる。県指定史跡としては、西塘御嶽や蔵元跡がある。町指定の文化財は5件（小城盛・国仲御嶽の福木・ミーナ井戸・仲筋ぬヌベマの水甕・新里村遺跡）が指定されている。

この島で最も古い遺跡は、1991年と1992年に発掘されたカイジ浜貝塚で、約1000年前の遺跡である。

2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要

①花城村跡遺跡（高城）

竹富郵便局のある字東屋敷から東側の海岸に抜ける途中にある御嶽を中心に展開する遺跡である。遺跡内には花城御嶽、波利若御嶽、久間原御嶽の三つの御嶽がある。この三つの御嶽は、花城村（他金殿）、波利若村（塩川殿）、久間原村（久間原発）の拜所である。各地から渡来してきた集団の首長である他金殿、塩川殿、久間原発の三首長を中心とする集団で構成されていることが伝承から推察される。また、この村を最初に村立てしたのは、新里村から移動してきた他金殿であり、小字花城原に高城という立派な城を築き、城主に収まったということが伝えられているようである。

本遺跡の中核となるのは花城御嶽である。この御嶽を中心に東西方向に延びる北側の崖沿いまで野面積みで石積みされた屋敷群が標高15～18mラインに展開している（遺跡の規模は東西約500m、南北約100mを有している）。

本遺跡の各屋敷の展開をみると屋敷内を結ぶ通用門のある西新里村遺跡とは異なり、道路網や各屋敷の配置もある程度整備された感じを受ける。石積みの中で特徴的な箇所として崖下にある井泉跡（打網洗井戸とみられる）に面した崖沿いの石積みには胸壁が確認されていて周辺の状況からもこの屋敷一帯に他金殿の築いた高城の城が展開されている可能性も考えられるところである。屋敷内からは青磁・土器などが採集できる。採集された遺物から14世紀中以降に集落が発生したものとして考えられ、新里村跡が14世紀前半で村が絶えていることから前述した口碑伝承を裏付けるかもしれない。

第2節 竹富島

1. 位置と環境

竹富島は石垣島の西方、6.5kmにあり、北緯24° 18' 58"、東経124° 6' 7" の位置にある。島の面積は6.32km²、海岸線の延長は9.15kmである。平成5年度の島の人口は269人（男性126人、女性143人）で、世帯数は134世帯である。島で最も高い場所は、小城盛の20.5mである。地質は先第三系古期岩類（チャートを主として砂岩・礫岩から構成）と、それを不整合におおう第四系の琉球石灰岩が重なり、その上に完新統の新期砂丘砂層・現世サンゴ礁堆積物・ビーチロックなどが堆積する。石垣島からの交通手段は定期船や観光船に限られ、所要時間も15分前後を要する。石垣島から最も近い為、観光客が年間10万人以上（平成4年度）も訪れていて八重山観光のメッカとなっている。この島の集落の76.6haは国指定重要伝統的建造物群保存地区となっている。その他国指定無形民俗文化財の種子取が10日間に及んで祭事が行われる。県指定史跡としては、西塘御嶽や蔵元跡がある。町指定の文化財は5件（小城盛・国仲御嶽の福木・ミーナ井戸・仲筋ぬヌベマの水甕・新里村遺跡）が指定されている。

この島で最も古い遺跡は、1991年と1992年に発掘されたカイジ浜貝塚で、約1000年前の遺跡である。

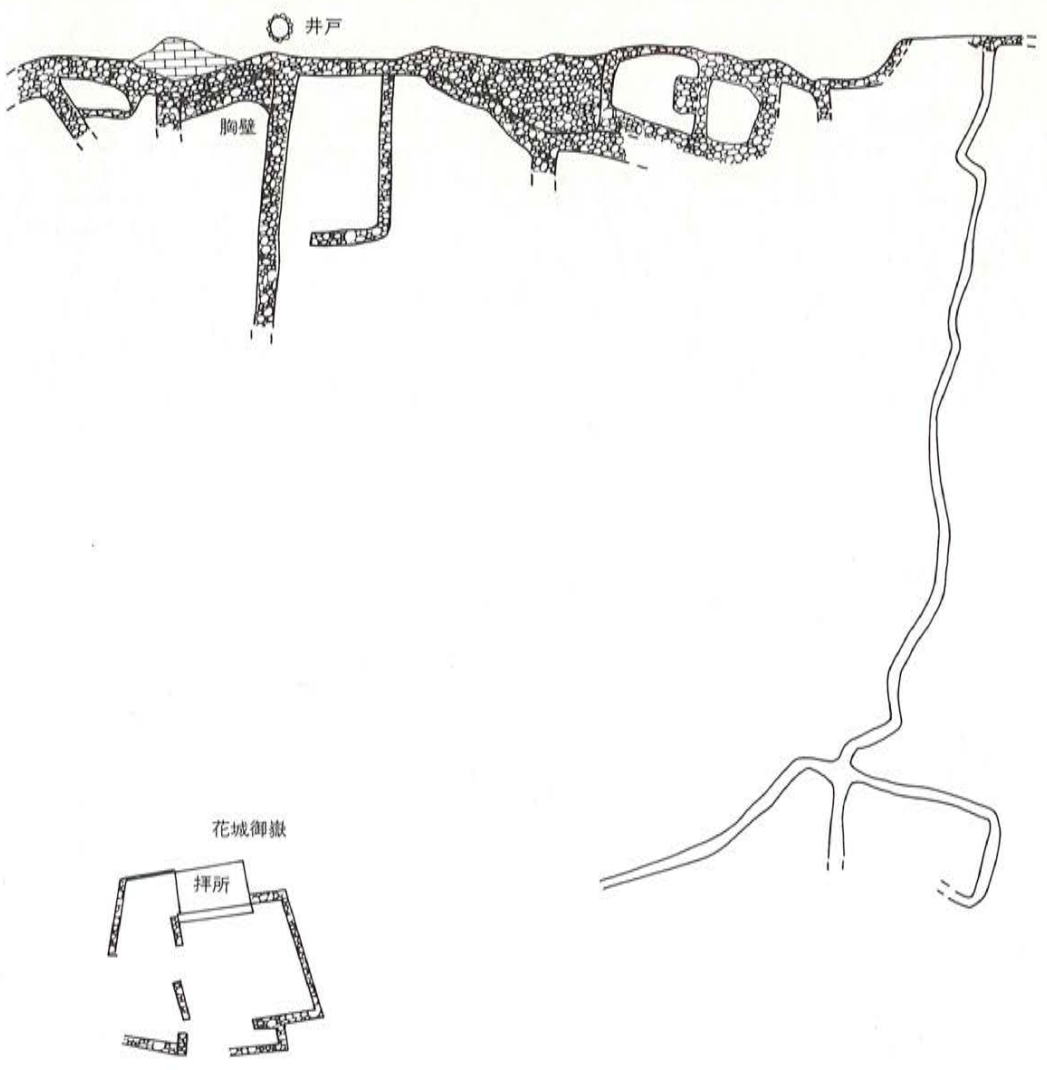
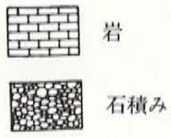
2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要

①花城村跡遺跡（高城）

竹富郵便局のある字東屋敷から東側の海岸に抜ける途中にある御嶽を中心に展開する遺跡である。遺跡内には花城御嶽、波利若御嶽、久間原御嶽の三つの御嶽がある。この三つの御嶽は、花城村（他金殿）、波利若村（塩川殿）、久間原村（久間原発）の拝所である。各地から渡来してきた集団の首長である他金殿、塩川殿、久間原発の三首長を中心とする集団で構成されていることが伝承から推察される。また、この村を最初に村立てしたのが、新里村から移動してきた他金殿であり、小字花城原に高城という立派な城を築き、城主に取まったということが伝えられているようである。

本遺跡の中核となるのは花城御嶽である。この御嶽を中心に東西方向に延びる北側の崖沿いまで野面積みで石積みされた屋敷群が標高15～18mラインに展開している（遺跡の規模は東西約500m、南北約100mを有している）。

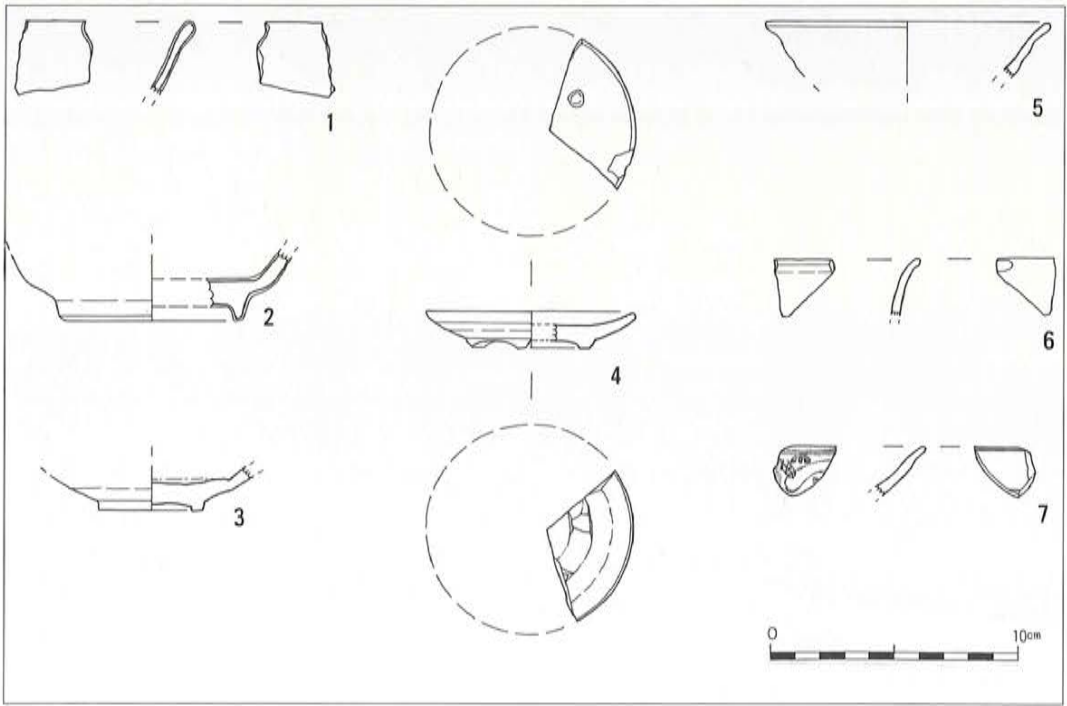
本遺跡の各屋敷の展開をみると屋敷内を結ぶ通用門のある西新里村遺跡とは異なり、道路網や各屋敷の配置もある程度整備された感じを受ける。石積みの中で特徴的な箇所として崖下にある井泉跡（打網洗井戸とみられる）に面した崖沿いの石積みには胸壁が確認されていて周辺の状況からもこの屋敷一帯に他金殿の築いた高城の城が展開されている可能性も考えられるところである。屋敷内からは青磁・土器などが採集できる。採集された遺物から14世紀中以降に集落が発生したものとして考えられ、新里村跡が14世紀前半で村が絶えていることから前述した口碑伝承を裏付けるかもしれない。



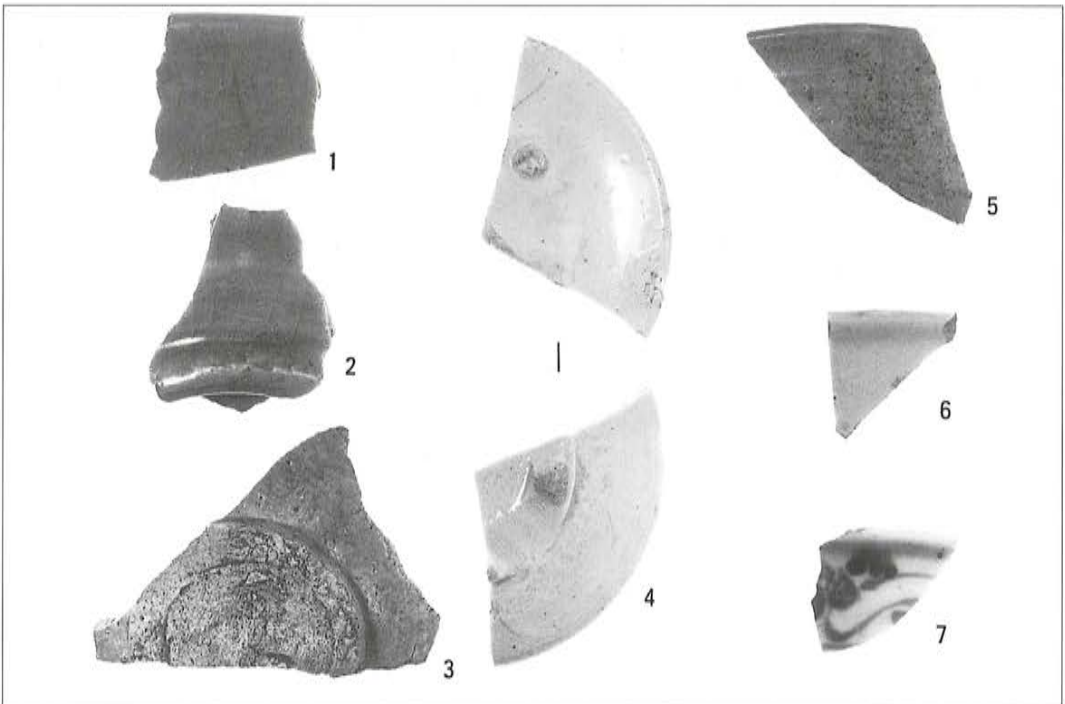
第12図 花城御嶽（ハナスク村跡）の概略



P L. 7 花城村跡遺跡 (上: 遠景、下: 内部の状況)



第13図 花城村跡遺跡採集遺物（1・4：幸本御嶽、2・3・5～7：花城御嶽）



P L . 8 花城村跡遺跡採集遺物

②新里村遺跡

竹富島の北東海岸近くにある集落遺跡で、標高は2～5mを測る。遺跡はハナクンガー（花城井戸）を境に東側を東新里村遺跡、西側を西新里村遺跡と二つに分けて仮称している。これは遺跡の性格や時期的な差が把握されたことによるものである。本遺跡の発見は、1984（昭和59）年6月1日に当時の竹富公民館長竹盛登氏によるものであった。現場の確認は同年6月4日に実施され、新発見の遺跡であることが判明した。本遺跡は竹富島一周道路建設工事に伴う緊急発掘調査が、第1次～第3次にわたって実施されている。第1次発掘調査は1986年8月6日～11月21日までの期間で行われ、第2次発掘調査が1987年8月17日～1988年2月19日までの期間で、第3次調査が1988年10月24日～10月28日までの期間で測量調査を実施している。

東新里村遺跡からは遺構として土留め石積み、掘立て柱の建物跡（平面プランは東西6.8m、南北4.8m）が一棟検出されている。主な出土遺物として、新里村式土器（滑石製石鍋模倣土器）、ピロースク式土器、白磁玉縁碗、白磁端反碗、白磁口禿小碗・白磁ピロースク碗、須恵器、褐釉陶器（壺・水注・鉢）などが出土していて、陶磁器や土器の組み合わせなどから12世紀後半～13世紀と把握されている。これらの状況から本遺跡は八重山の土器編年研究において欠くことのできない遺跡であることが判明した。

西新里村遺跡からは遺構としては屋敷囲いの石積みとそれを切るようにつくられた通用門や柱穴群及び土塋などが検出されている（屋敷は第1号屋敷から第17号屋敷までが確認され、その内の第1号～第4号屋敷が発掘調査の対象地区となっている）。各屋敷からの主な遺構は第1号屋敷からは住居址3基、高倉？1基、第2号屋敷から住居址3基、高倉？2基、第3号屋敷から便所1基、第4号屋敷から住居址2基が検出されている。主な出土遺物として白磁、青磁、褐釉陶器、白地鉄絵、須恵器、土器、鉄製品、貝製品などが得られ、これらの出土品から全国的に例のない14世紀前半と限られた時期に形成された集落であることが判明している。

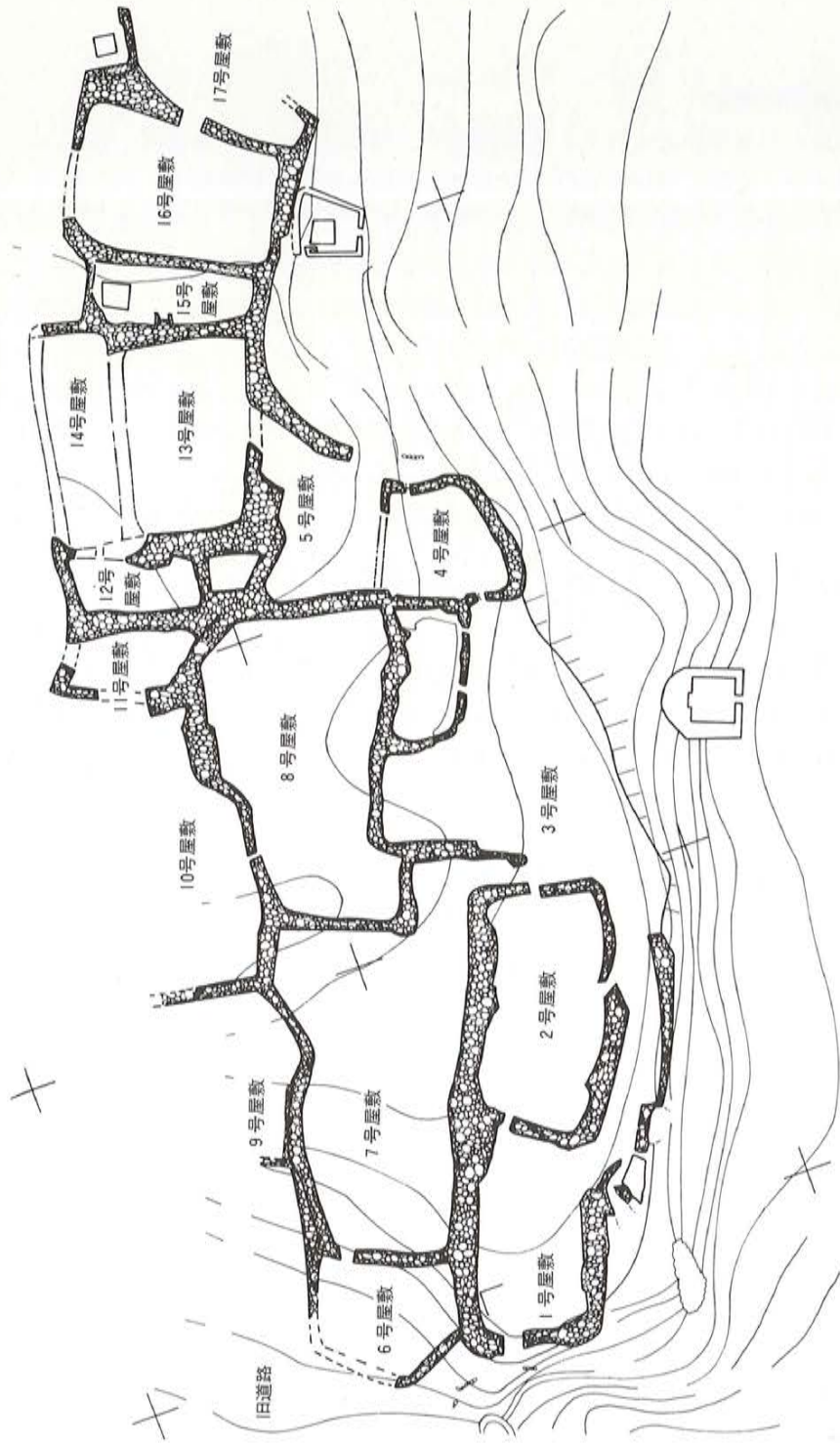
口碑伝承によると沖縄本島から竹富島に氏子集団で初めて渡来した首長他金殿シキトコンが北岬の東方磯の口（イシャーグチ）付近に新里組（村）を創建し、そこに「花城井戸」を掘り当て、生活の拠点とした。その後根原ネハラカミトノ（屋久島渡来）、新志花重アヲシハナカサナリ（沖縄本島渡来）、幸本節瓦コウトウフシカワラ（久米島渡来）、久間原クマハラハツ（沖縄本島渡来）、塩川殿シオカワトノ（徳之島渡来）の5名を首長とする集団が渡来し、竹富島に六ヶ所の村を創建したとある。この六ヶ村により土地と海を分配する論議が生じ、他金殿は島の東方の広域な海岸の配分を受け、自分の領域を守るため新里村を東海岸に近い花城原へ移転し、そこに花城の高城という立派な城を築き、城主に収まったとある。この他金殿の名前が由来して竹富島の名称となったとする古い伝承もある。

参考文献

- ・金武正紀「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」沖縄県立博物館紀要 第15号 沖縄県立博物館 1989年
- ・亀井秀一「竹富島の歴史と民族」角川書店 1990年



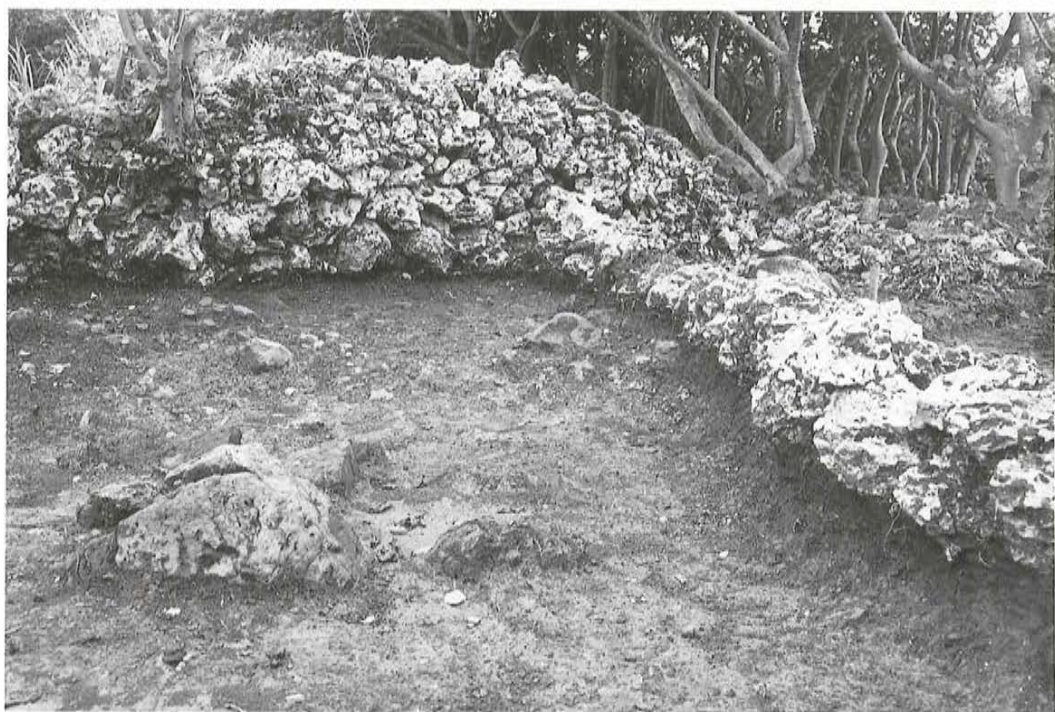
石積み



第14図 西新里村遺跡屋敷の配置



PL. 9 西新里村遺跡（上：1号屋敷、下：2号屋敷、いずれも西側より）



P L. 10 西新里村遺跡（上：2号屋敷北側入口、下：3号屋敷南側石積み）

③ンブフル遺跡（グサンツル遺跡）

島の中央にあるンブフル丘（標高約20m）を中心に形成された遺跡である。丘の頂高は宅地造成や耕作で一部破壊されているが、周辺には野面積みの石積みが残っている。1992年の5月に町教育委員会が民間のゲストハウスに伴う発掘調査を実施したところ、丘の南側裾に良好な遺物包含層（二枚貝を主体とする層）が確認されている。また、隣接する幸本御嶽の中間部分の試掘坑からは、柱穴が2・3本検出され、内1本の柱穴には根固め石が確認されている。この調査で出土した遺物は青磁・染付・土器（中森式土器）・タイの褐釉陶器などが出土している。出土品から本遺跡の時期は14世紀終末～15・16世紀が考えられるところである。

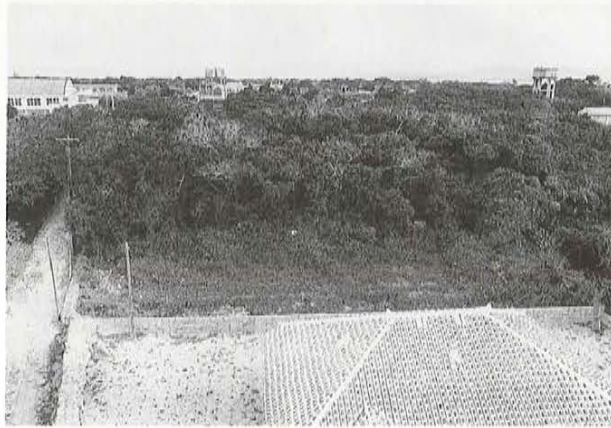
本遺跡に関する口碑伝承は、沖縄本島から渡来してきた新志花重という首長が飲料水に適した甘水を犬が発見した為、そこに井戸を掘り、掘り当てた。この井戸が伸筋井戸である。この井戸を掘り当てた新志花重は、引っ越してきて伸筋村を建て、自分の見張り台を築きたいと考え、場所の選定に日夜苦心していた。ある日部下の飼っている牛が夜中に小屋から飛び出し角で土や石を掘り上げて高い丘を夜明け頃までつくり上げて、丘の頂上で「ンブフル、ンブフル」と大きな声で鳴いたとある。この丘に新志花重は堅固な城を築き名前を「ンブフル」と名付けたようである。この伝承はグスク普請と関係するものとして考えられ、短期間でグスクが普請されたことを裏付けるのではないだろうか。

④カイジ村跡遺跡

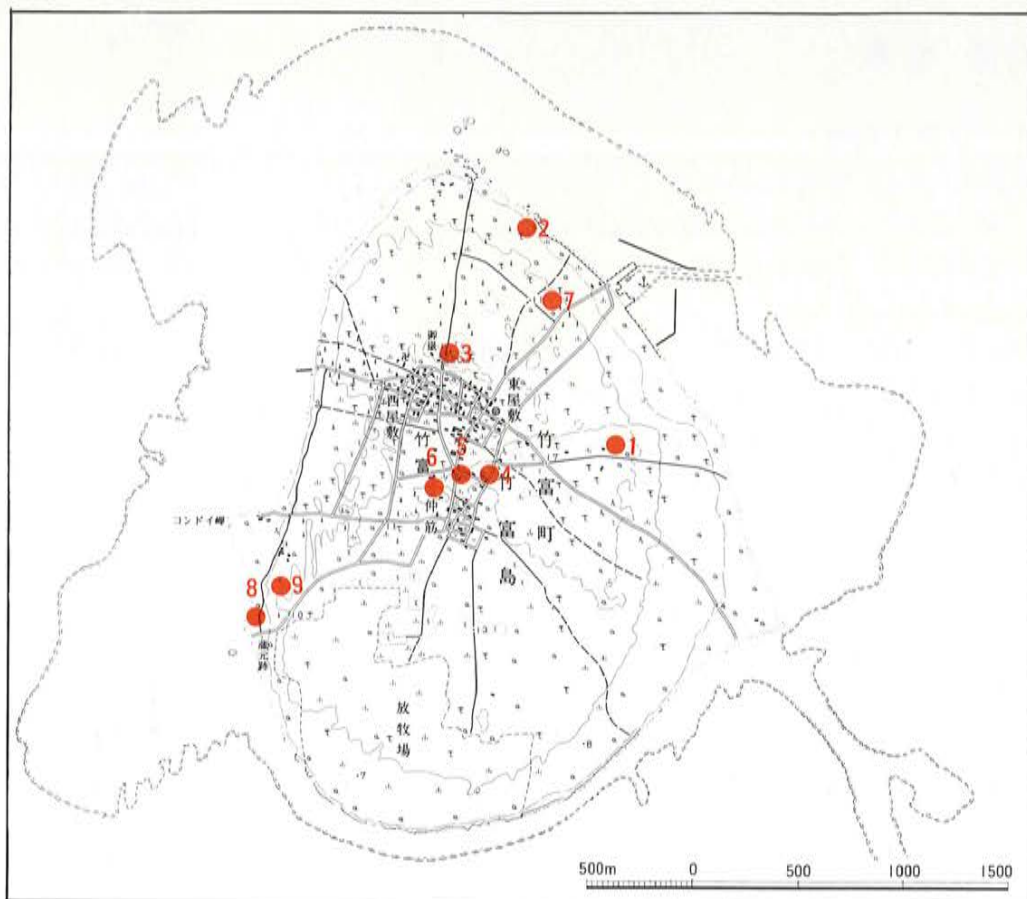
島の南西側に県指定史跡の蔵元跡がある。この蔵元跡を含めた地域がカイジ村跡である（標高5～10m）。遺跡の規模は南北約500m、東西約200mが範囲として考えられている。特に蔵元跡の北側約100mの範囲にある標高約10m前後の石灰岩丘陵緩斜面及び平坦面には野面積みの屋敷跡が確認され、石積みの保存も良い。

カイジ村跡は、1991年9月にカイジ浜貝塚の発掘調査で発見された遺跡であり無土器のカイジ浜貝塚と重複する。カイジ浜貝塚の発掘調査の結果、下層に新石器時代無土器の包含層が堆積し、上層にはカイジ村跡のものとみられる土器を伴う包含層が確認されている。土器は滑石製石鍋を模倣した新里村式土器とピロースク式土器などの各型式が出土している。カイジ村跡の発生時期は12世紀頃が考えられ、東新里村跡と平行する時期が予想出来る。さらに、このカイジ村跡は16・17世紀頃まで存続しているようである。

このカイジ村に直接関係する口碑伝承はないが、沖縄本島から渡来してきた久間原発を首長とする集団の土地であることが六ヶ村（波座間村、伸筋村、小波本村、久間原村、花城村、波里若村）の土地・海の分配から読みとれる。このカイジ村には蔵元跡の北側に隣接して鍛冶御嶽があり、鍛冶神を祀ってある。カイジ浜貝塚からも羽口や鉄製品が出土していたことからこの鍛冶御嶽と関係のある資料とみられる。竹富島では旧暦の11月7日にフイゴ祭りが行われているが、鍛冶職の真栄里憲一氏の後を継ぐ人がいなくなり途切れてしまっているようである。



PL.11 遺跡遠景（上：ンブフル遺跡、中：カイジ村跡遺跡、下：豊見親城遺跡）



第15図 竹富島のグスク及び相当期遺跡の分布

表3 竹富島のグスク及び相当期遺跡一覧

遺跡名	所在地	遺物	編年	備考
1. 花城村跡遺跡	宇竹富	土器・外来陶磁器	第三期	石積み遺構
2. 新里村遺跡	〃	土器・外来陶磁器	〃	〃
3. 小城盛遺跡	〃	土器・外来陶磁器	〃	町指定史跡
4. 豊見親城遺跡	〃	〃	〃	
5. ンブフル遺跡	〃	〃	〃	石積み遺構
6. フージャスクミ遺跡	〃	〃	〃	〃
7. 竹富貝塚	〃	〃	〃	
8. カイジ浜貝塚	〃	〃	第二・三期	
9. カイジ村跡遺跡	〃		第三期?	石積み遺構

第3節 黒島

1. 位置と環境

黒島は石垣島の南西約19kmの洋上に浮かぶ小島である。島の面積は約13.7km²、周囲は約12.7kmであるが、それでも八重山諸島中5番目に大きい島である。地形は島全体が琉球石灰岩を基盤とし、最高所でも12.6mというほぼ円形に近い低平な島で、周りの海にはリーフが良く発達している。

昭和初期には1,000人余もいたといわれる人口は年々減少し、現在では200人余となっている。ただ、最近のリゾートブームと石垣島から30分と手頃なことから、ダイビングを中心とした海洋レジャーが盛んで、夏場にはかなりの観光客が出入りしている。

島の産業は復帰前までサトウキビ作が中心であったが、その後草地改良事業が進み、島の約70%が牧場化され、今日では畜産業が主産業となっている。ちなみに、島の人口は約200名であるが、牛は2,000頭いるといわれている。

この島の名称は方言でフィシマと呼称されている。その由来は一説によると、薩南諸島からの移住者が自己にゆかりの地名を付けたといわれている。また、別の説ではサクシマ（珊瑚礁の島の意）からサフシマに転化し、それからフィシマに再転化して、それに黒島の文字が当てられてクロシマと呼ばれるようになったといわれている。

黒島には大正年間まで保里・伊古・東筋・仲本・宮里・保慶の6つの集落があった。保慶村が大正年間に廃村になり、宮里村は復帰後、本土資本に村ごと買い占められ、現在は海中公園センター八重山研究所と観光宿泊施設が建ち、廃村同様になっている。伊古村は明治初年頃まで糸満漁夫が定住する大きな集落であったが、台風時の高潮等の災害で村を離れる家族が多く、現在では3～4戸を残すのみとなっている。従って、黒島では保里・東筋・仲本の3村が村の祭祀行事も行っている状態である。中でも東筋は人口が集中し、郵便局等の公共施設もあって、黒島の中心的な村になっている。

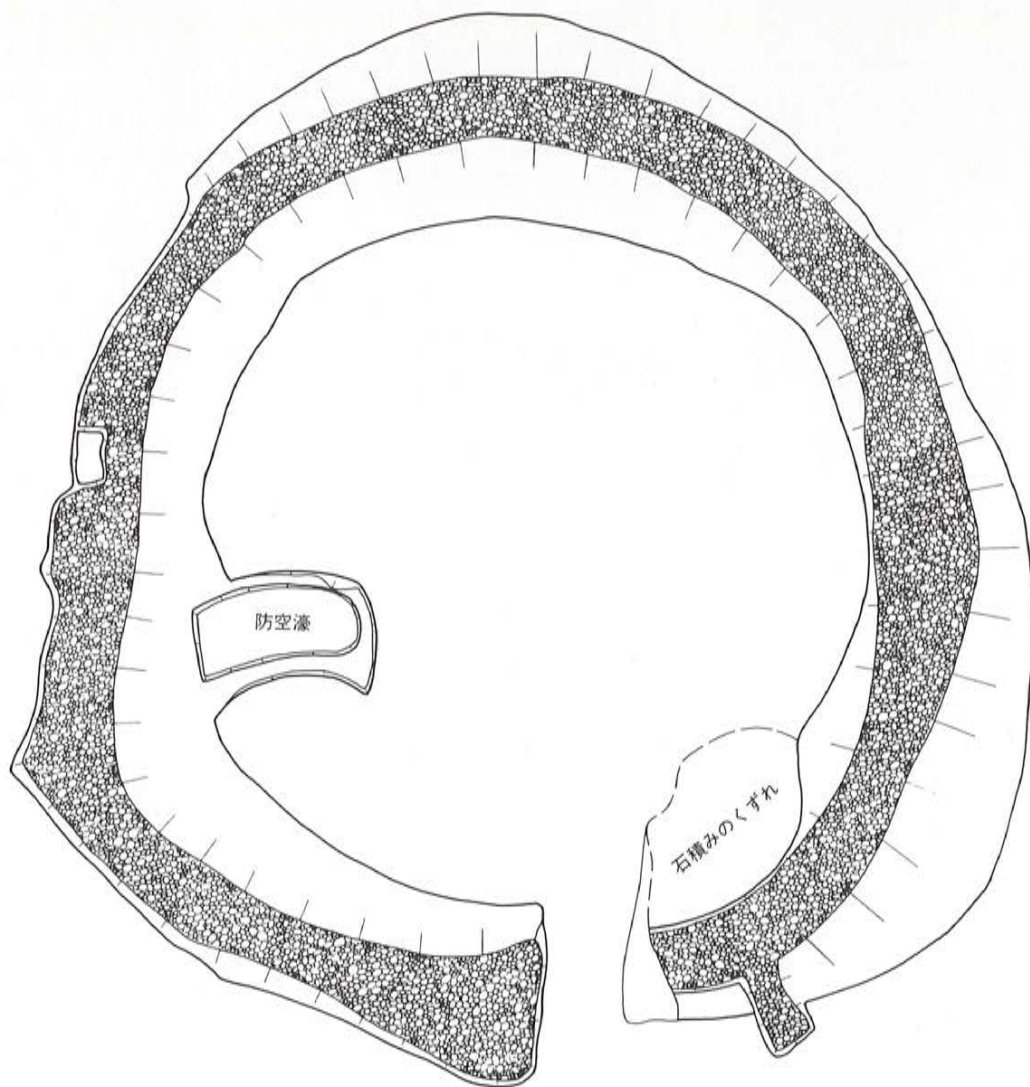
2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要

①ウブスク遺跡

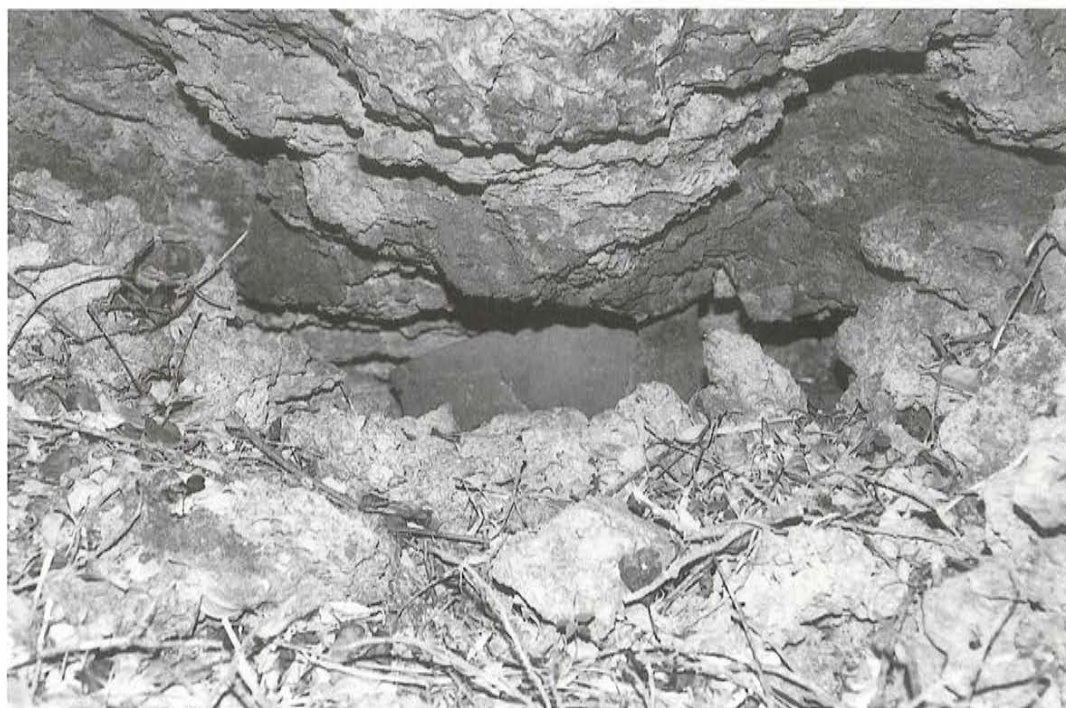
黒島では北の方に位置する遺跡で、港に近い保里集落の南側約700mの地点にある。一帯は牧場地になっており、変化に乏しい地形のため、遺跡の確認が困難である。遺跡は標高3～4mの比較的低い琉球石灰岩の独立丘に立地し、石灰岩の端に沿って幅約2m、高さ約3mの野面積みの石垣をめぐらしている。石垣の平面観は楕円形をなし、規模は長軸（南北）で約30m、短軸（東西）で約20mを測り、それほど大きくはない。

遺構内からは八重山式土器や青磁、褐釉陶器などが採取できる。また、石垣の外側の岩陰は墓として利用されており、パナリ焼の壺に骨が納められている。遺跡の性格は、島の豪族の居館跡とも伝えられているが、隣接してザンドウ・イヌムル・フキスク等の同様な遺跡が所在していることから、八重山地域特有の石垣遺構を有する集落跡と考えられる。

石積み



第16図 ウブスク遺跡の概略



P L. 12 ウブスク遺跡内部の状況

②ザンドウ遺跡

ウブスク遺跡の北側に隣接した琉球石灰岩の独立小丘に立地している。ウブスク遺跡と同様に石灰岩の端に沿って野面積みの石垣をめぐらしている。石垣の平面観はほぼ円形をなし、規模はウブスクのそれより小さく、径約20mを測る。遺構内からは若干の八重山式土器や外来陶磁器などが採取でき、時期的にはウブスク遺跡とほぼ同時期のものであることがうかがえる。

③フカスク遺跡

黒島の西部にある仲本集落の南側約800mの所に位置する。一帯は牧場地になっており、その中でも一段高くなった標高約5mの独立小丘に立地している。そこに高さ2～3mの野面積みの石垣をめぐらしている。石垣の積み方に特徴があり、外側は高く、内側は若干低くなっている。石垣の平面観はほぼ円形をなし、規模は外径約30m、内径約22mである遺構内からは僅かに八重山式土器や貝殻などが採取できる。



PL.13 フカスク遺跡近景

④ヴウスク遺跡

フカスク遺跡の南南東約500mの位置に所在する。フカスク遺跡との間は牧場の整地工事により、草原になっている。他の遺跡とは立地が異なり、平地に石垣をめぐらしている。石垣の平面観はフカスク遺跡と同様にほぼ円形をなし、規模は若干大きく、石垣の内径は約30mを測る。また、石垣も比較的良く残っており、積み方もしっかりしている。石垣の高さは2～3mである。遺構内からは八重山式土器や青磁、陶器などが採取できる。

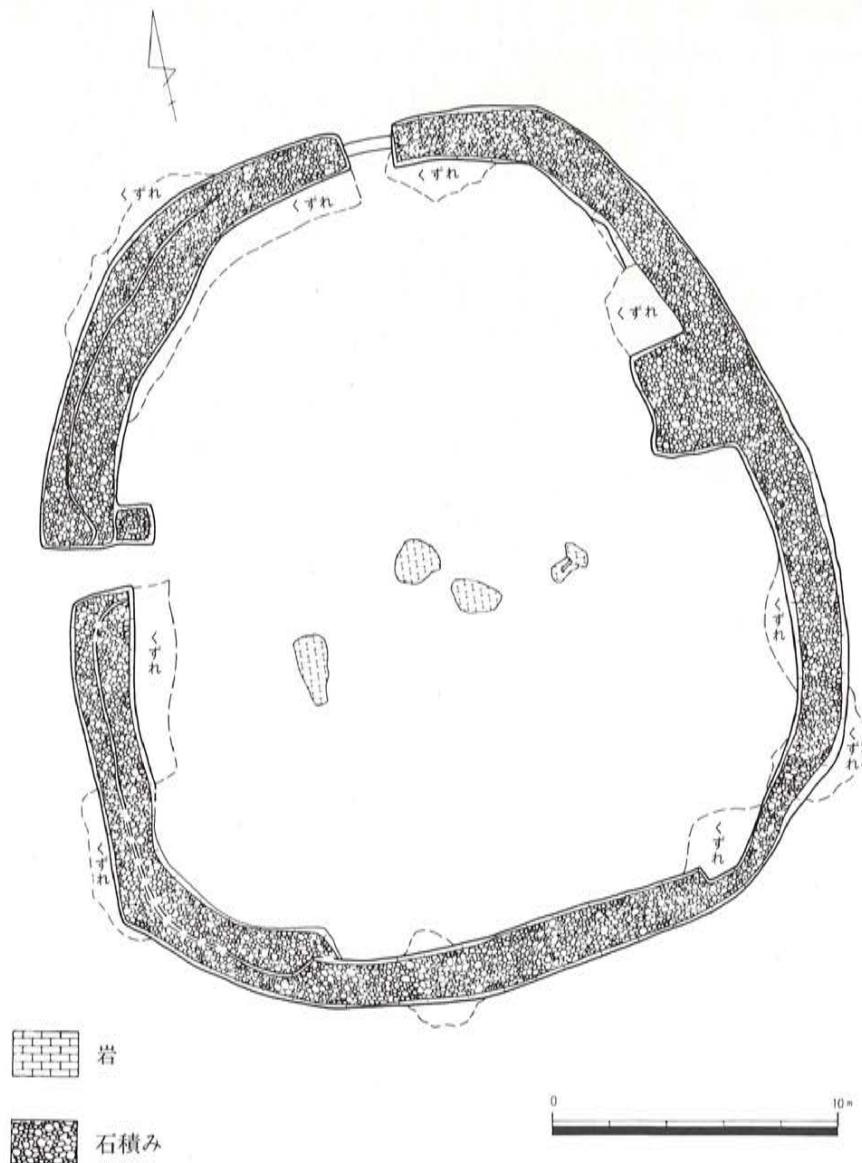
⑤アラスク遺跡

東筋集落の南側約600mの位置に所在する。ヴウスク遺跡と同様に平地に石垣をめぐらしている。石積みの残りは他の遺跡に比べて良好で、出入り口も確認できるほどである。

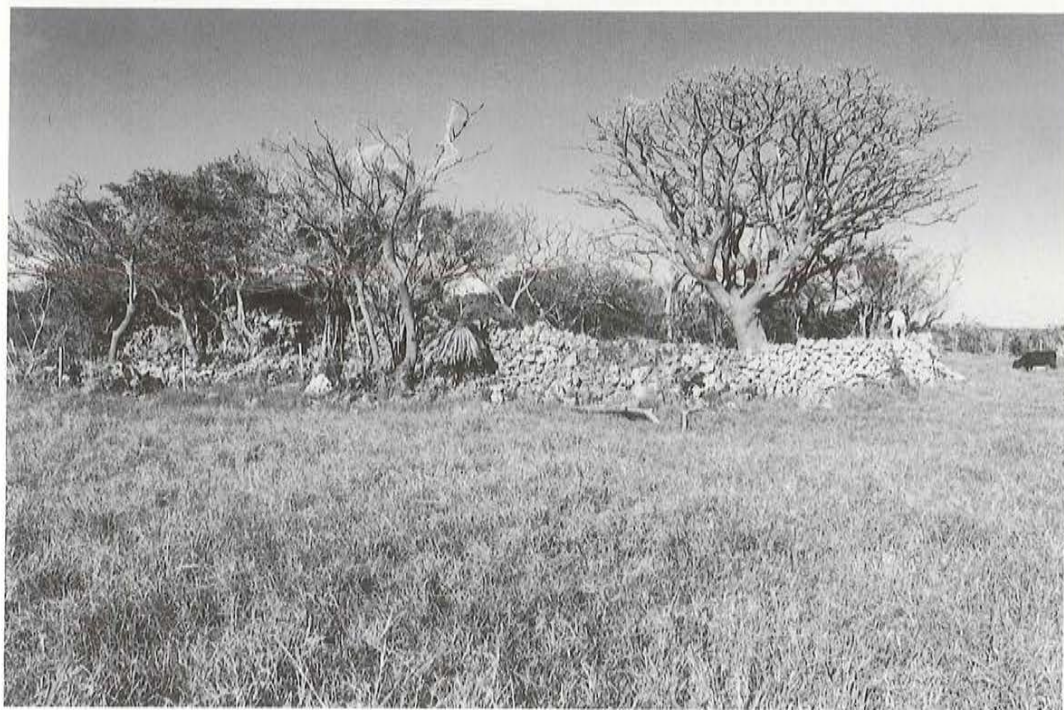
石垣の平面観は隅丸方形をなし、規模は一辺約30mで比較的大きい。遺物はわりと多く、八重山式土器や陶磁器、貝殻、石材などが見受けられる。

⑥仲本村跡遺跡

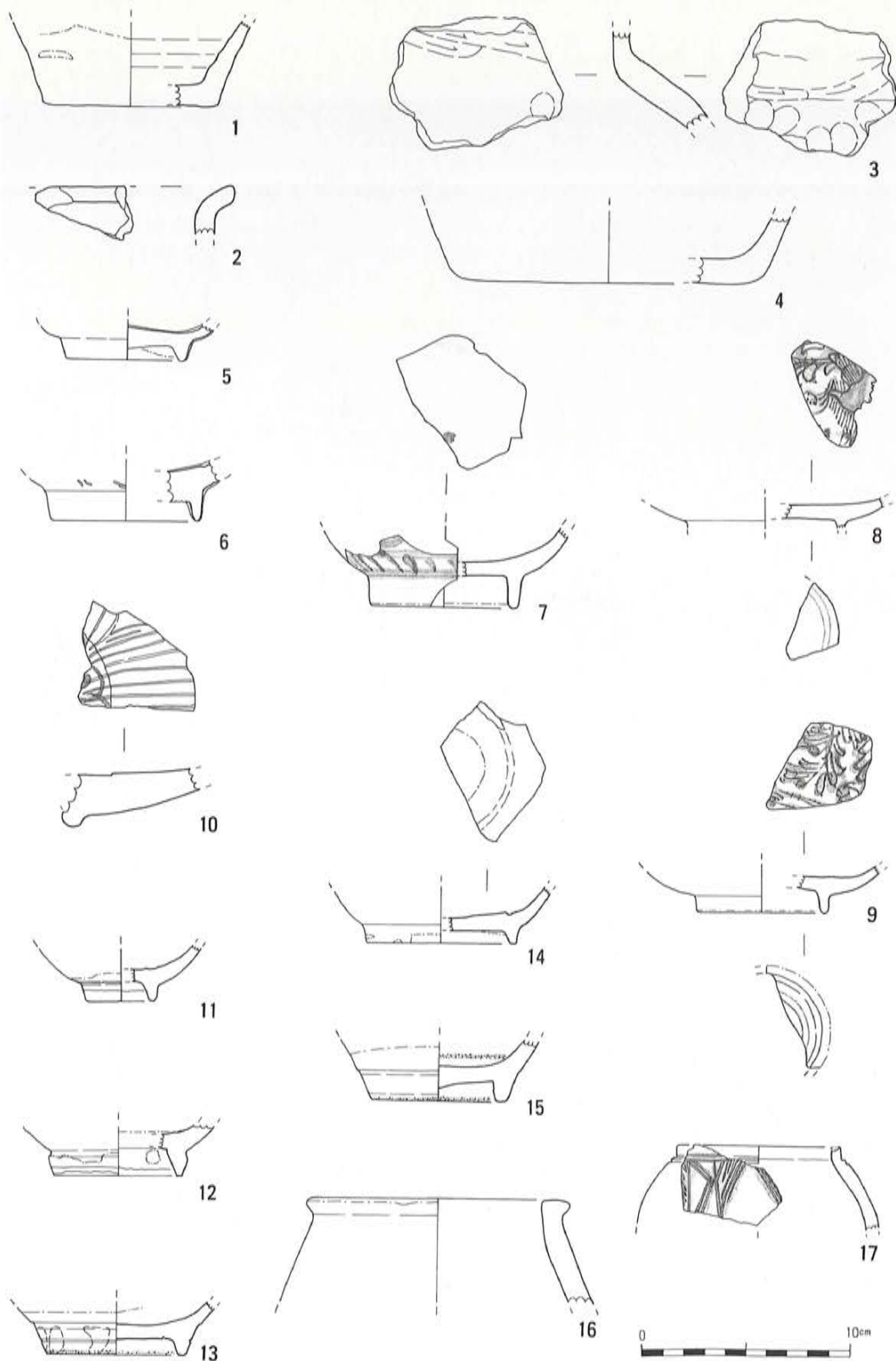
仲本部落及びその南側の草地一帯に広がる遺跡である。同部落南側の造成工事の際に遺物の散布が確認された。遺物は土器・陶磁器等である。陶磁器は青磁から近世磁器、沖縄産陶器等が採集されている。



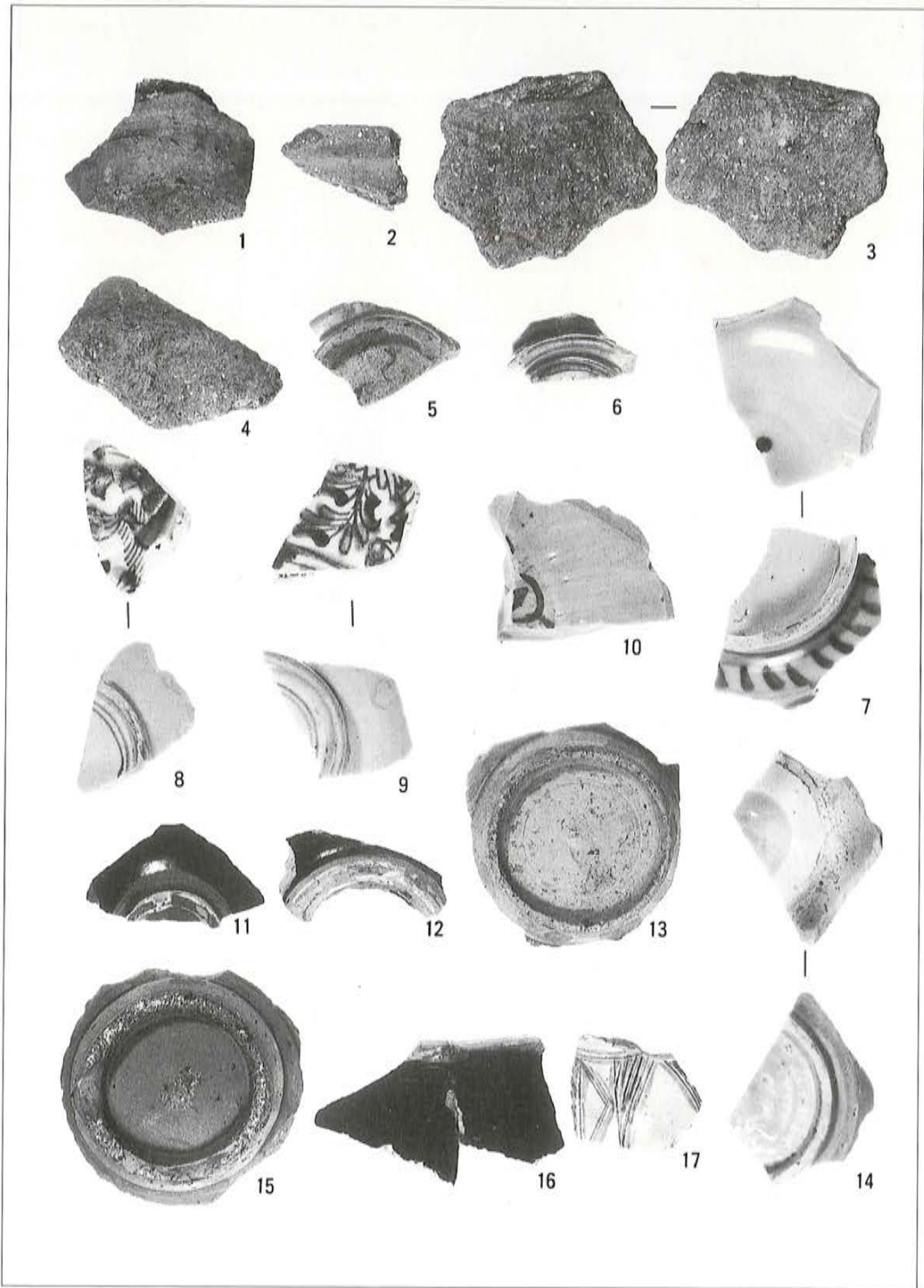
第17図 アラスク遺跡の概略



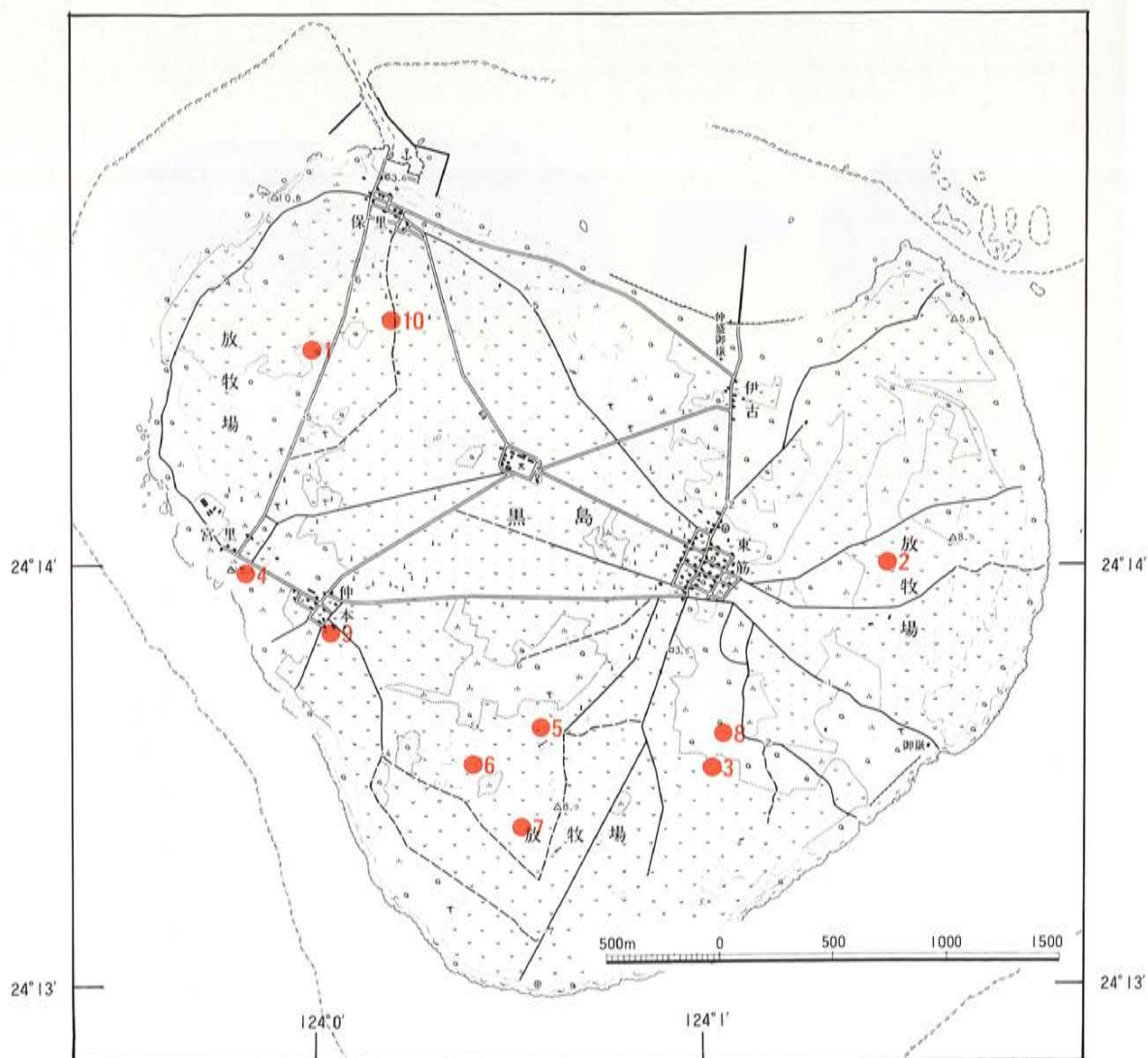
PL.14 遺跡近景（上：アラスク遺跡、下：仲本村跡遺跡）



第18図 黒島採集遺物（1：アラスク遺跡、2～17：仲本村跡遺跡）



P L. 15 黒島採集遺物



第19図 黒島のグスク及び相当期遺跡の分布

表4 黒島のグスク及び相当期遺跡一覧

遺跡名	所在地	遺物	編年	備考
1. 宮里部落北方遺跡群	宇黒島	土器・外来陶磁器	第三期	4地点からなる
2. ナンザト遺跡	〃	〃	〃	
3. サキバル遺跡	〃	〃	〃	
4. フズマリ (タカムイ) 遺跡	〃	〃	〃	町指定史跡
5. ヴゥスク遺跡	〃	〃	第三・四期	石積み遺構
6. フカスク遺跡	〃	〃	〃	〃
7. クスリチ遺跡	〃	〃	〃	〃
8. アラスク遺跡	〃	〃	第三期	〃
9. 仲本村跡遺跡	〃	〃	〃	
10. ウブスク遺跡	〃	〃	〃	石積み遺構

第4節 小浜島・嘉弥真島

1. 位置と環境

小浜島は石垣島の南西12km、西表島の東方に位置する。島のほぼ中央北寄りには標高99.4mの大岳が聳え、周辺は緩やかな段丘状の地形を呈する。島の北側は石灰岩の断崖が海岸まで迫るが、東のトゥマール浜、南のウータ浜及び細崎一帯では海浜砂丘地が発達している。ウータ浜には魚垣が良好な状態で残っている。集落は大岳の南に小浜、細崎の先端に細崎の2集落がある。遺跡は旧集落跡が大岳と現集落のほぼ中間に立地するほかは海岸近くに形成されている。

2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要

①ユウンドウレスク遺跡（第20図）

島の北西海岸に接して、標高8～9mの琉球石灰岩の岩盤が露出する低地に立地する。

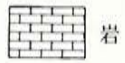
遺跡のプランは40m×40mの方形を呈し、内部は二つの郭から成る。郭の間は通用口によって結ばれている。石積みは琉球石灰岩の野面積みであり、遺跡内の北側は琉球石灰岩の岩盤が露出しているため、岩盤の間を結ぶか、或いは岩盤を利用してその上に積み上げるといった方法をとっている。この部分の石積みの高さは80cm内外と低い。

南側には岩盤の露出がなく、70mにわたって石積みが巡り、郭を構成している。この部分の南西側では石積みの高さは2mを越える。他の部分でも平均1.8mを測る。南東側の石積みが屈曲する辺りに入口が設けられている。遺物は遺跡内部では採集できなかったが、昭和54年に実施された分布調査では、バナリ焼、貝殻片が確認されている。

本遺跡一帯は島の聖地とされており、小浜島の祖先が最初に住んだ場所とも言われる。「ユウンドウレー」の名称については、聞き取り調査によれば、航海の際の休息所の意ではないかと言われている。



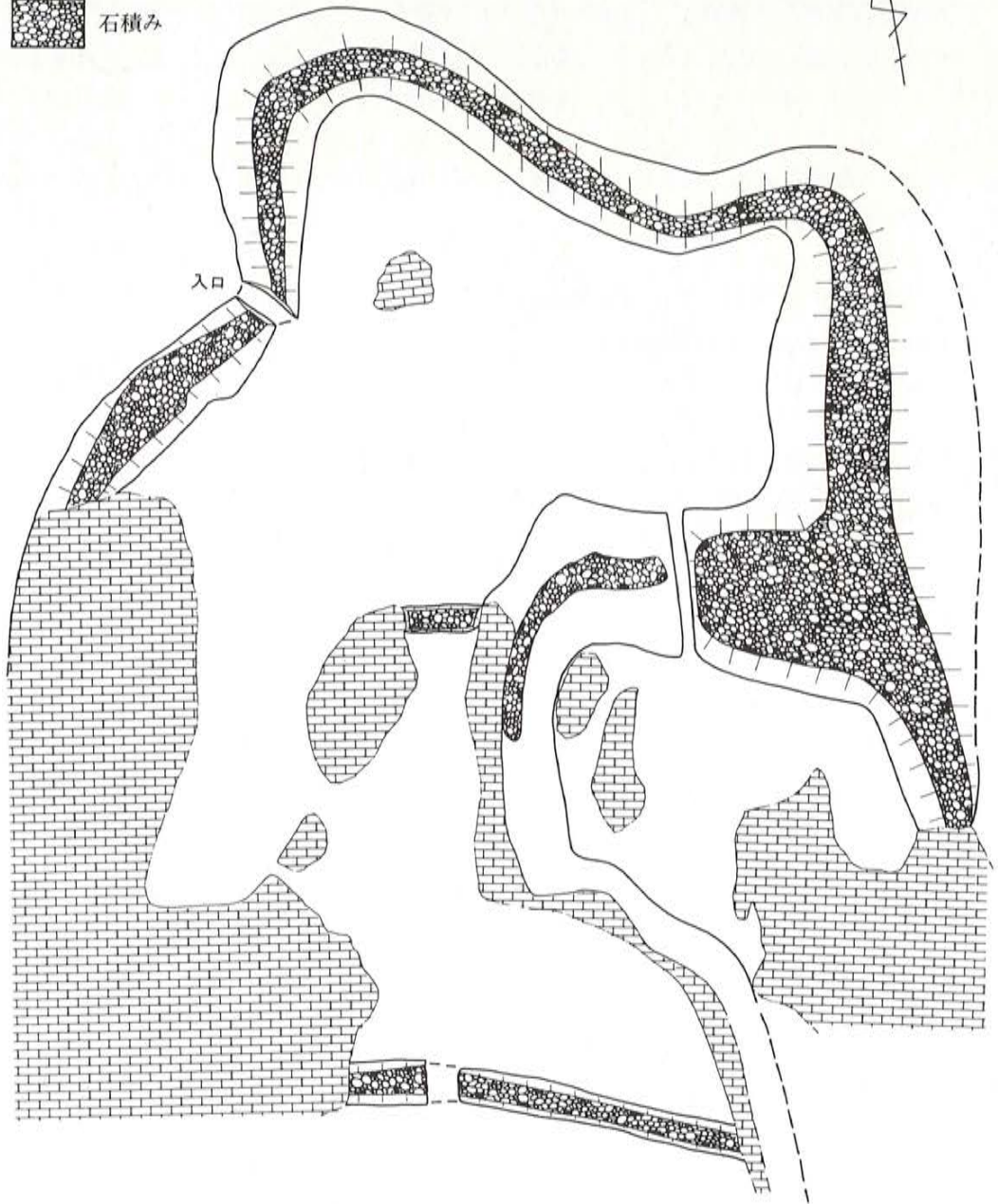
P L. 16 ユウンドウレスク内部の状況



岩



石積み



第20図 ユウンドウレスク遺跡の概略



P L.17 ユンドゥレースク内部の状況

②ウティスク山遺跡（第21図）

大岳の北東約300m、ユンドゥレースク遺跡の東南約500mに位置する標高約33mの小丘上に遺跡は形成されている。

遺跡の東側から南西にかけては崖状の地形を呈し、南西側崖下には沢があるが、トラバーチンの採掘で崖がえぐられている。丘の頂部は平坦になっており、平坦部を取り巻くように石積みが見られる。石積みは琉球石灰岩の野面積みである。遺跡内のプランは2つの郭からなる連郭式であるが、全体的に石積みの崩れがひどい。特に南側の石積みの崩れはひどく、根石部分がかろうじて確認できる。

遺物は土器・貝殻片が見られる。土器は外耳土器（第22図3）が採集されている。現在遺跡地の周辺はリゾート施設内に取り込まれており、景観の変貌が著しい。



PL.18 ウティスク山遺跡（上：遠景、下：内部の状況）



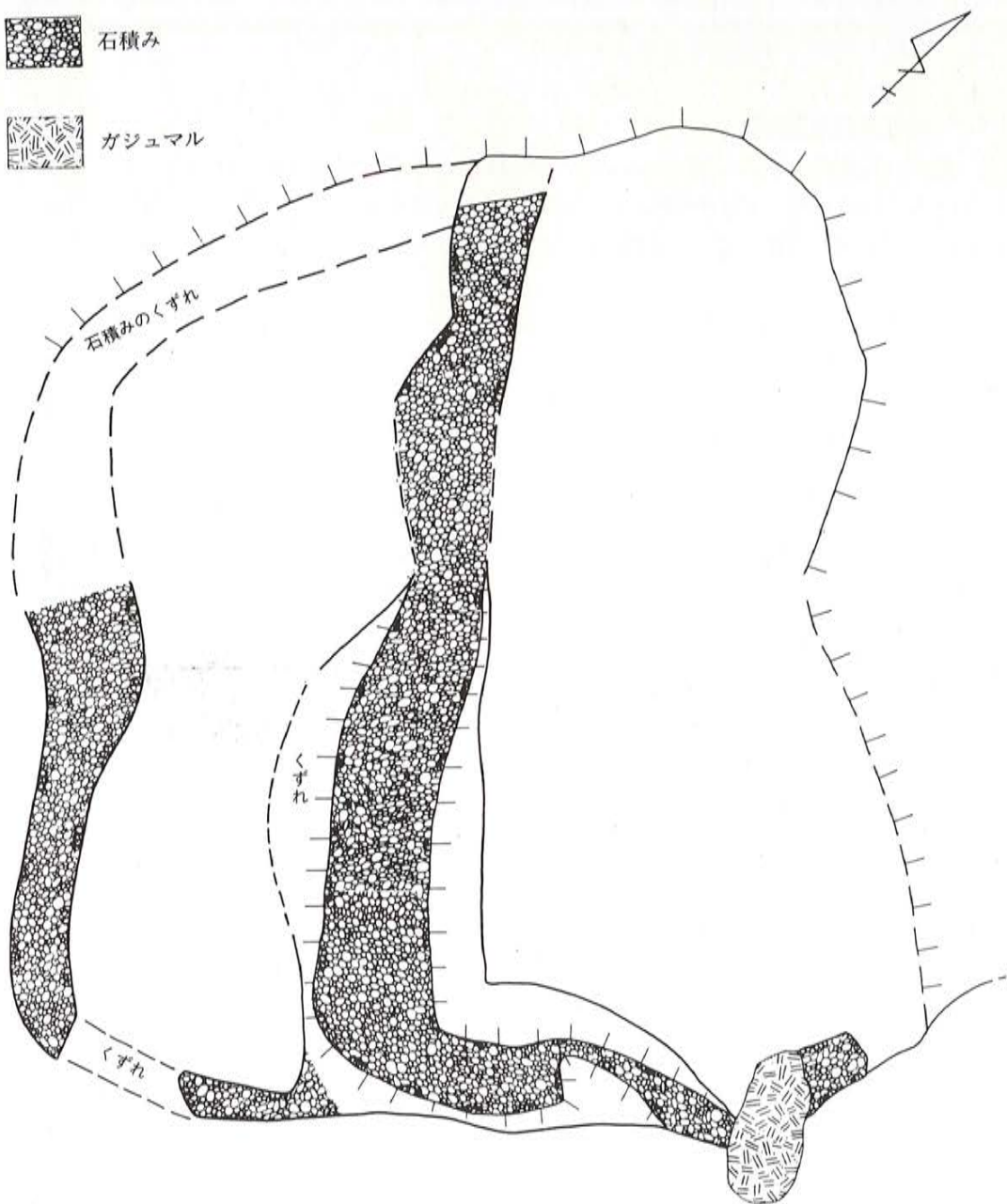
岩



石積み



ガジュマル



第21図 ウティスク山遺跡の概略

③小浜島フルロウ山遺跡

多和田真淳氏発見の遺跡で、「小浜島の東海岸西平田原の奥にある岡で、岡の上が住居跡で珊瑚礁崖下から外耳土器、青磁片が得られる。」とあるが、一帯は竹・雑木等が繁茂し、今回の調査では確認できなかった。

④小浜旧部落遺跡

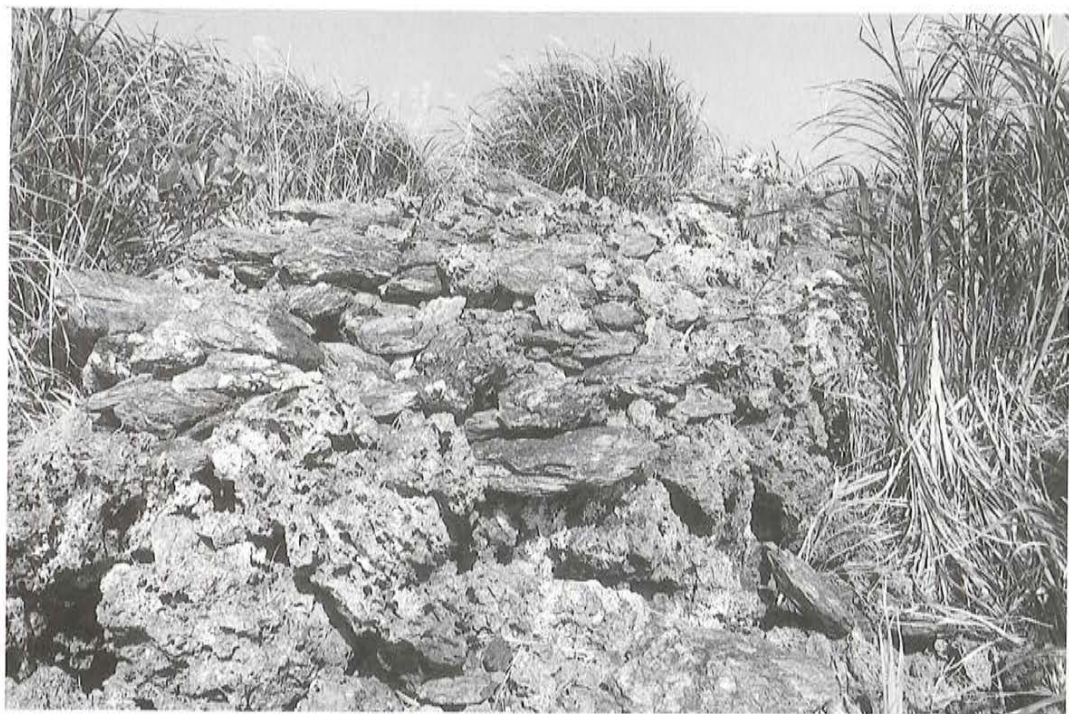
現小浜集落の北西に立地する。現況は畑地等である。現集落の古島があったと伝えられる所で、仲山御嶽・佐久伊御嶽・嘉保根御嶽などがある。このうち、嘉保根御嶽後方の畑地より、中国産青磁・染付・沖縄産陶器が採集されている（第22図1・4～15）。

⑤嘉弥真遺跡

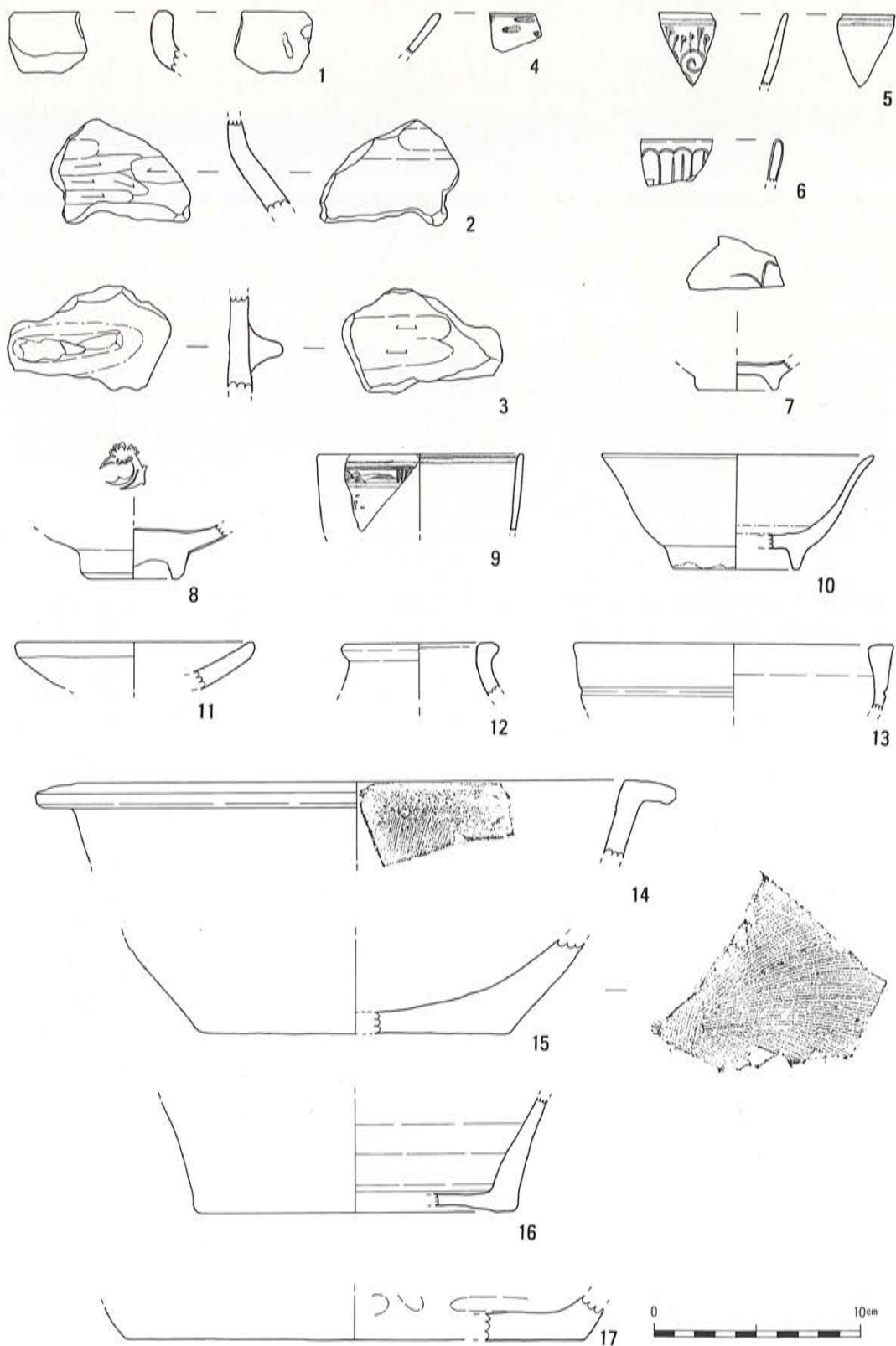
小浜島の北約2kmの海上にある低平な島である。現在は無人の島である。南海岸の夏季にのみ使用される海水浴施設がある砂浜一帯から島の中央部にかけて、遺物の散布がみられる。遺物は沖縄産陶器・褐釉陶器（第22図16）がある。また、島の東側には小丘があり、その丘の頂部を取り巻く石積みを確認した。石積みは琉球石灰岩の野面積みである。内部はアダンが繁茂し確認できなかった。石積み内より土器片が採集される（第22図17）。この遺構の性格は不明であるが、立地及び遺構の規模からみて遠見台的な施設ではないかと思われる。



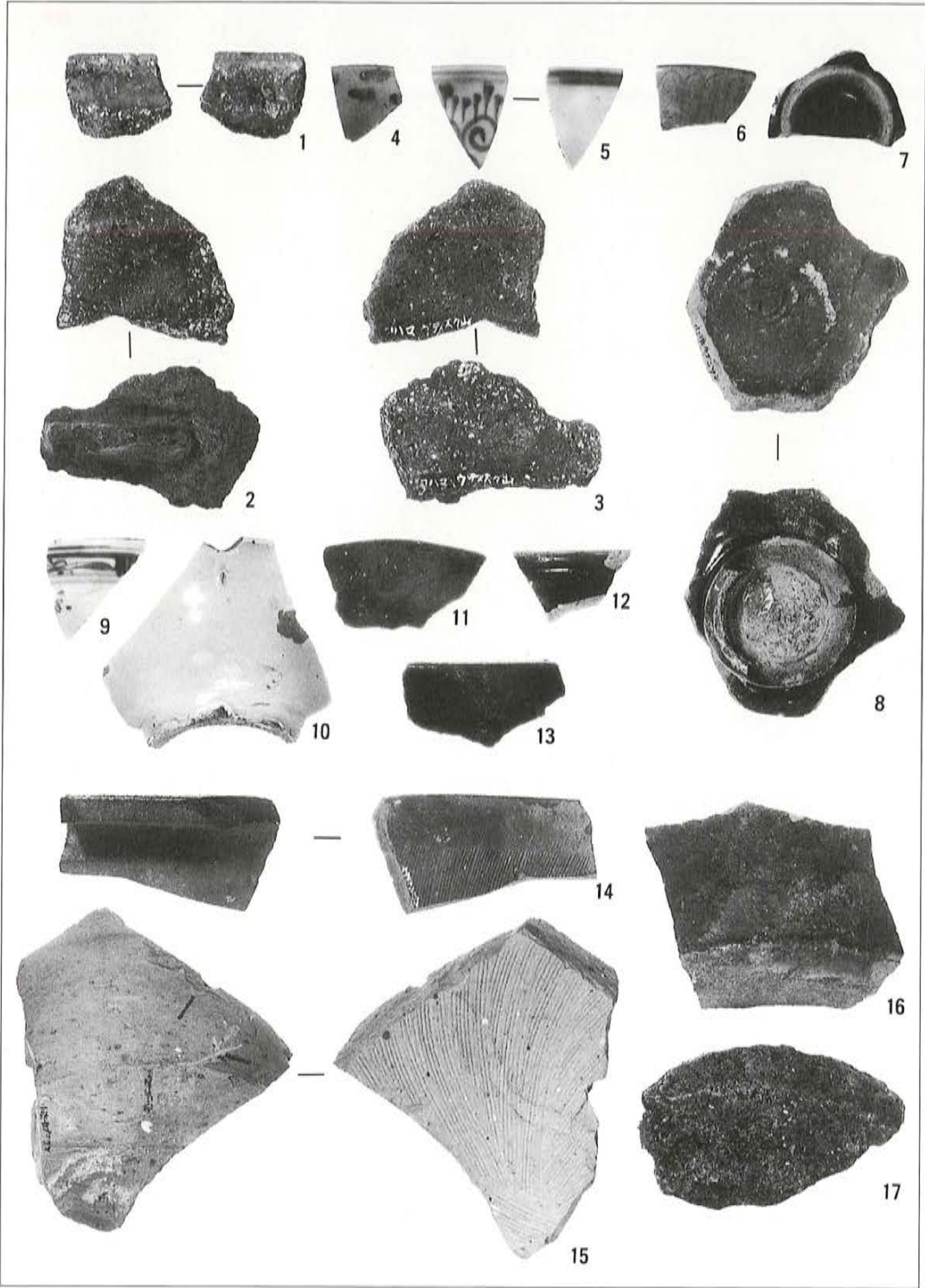
P L. 19 小浜旧部落遺跡近景



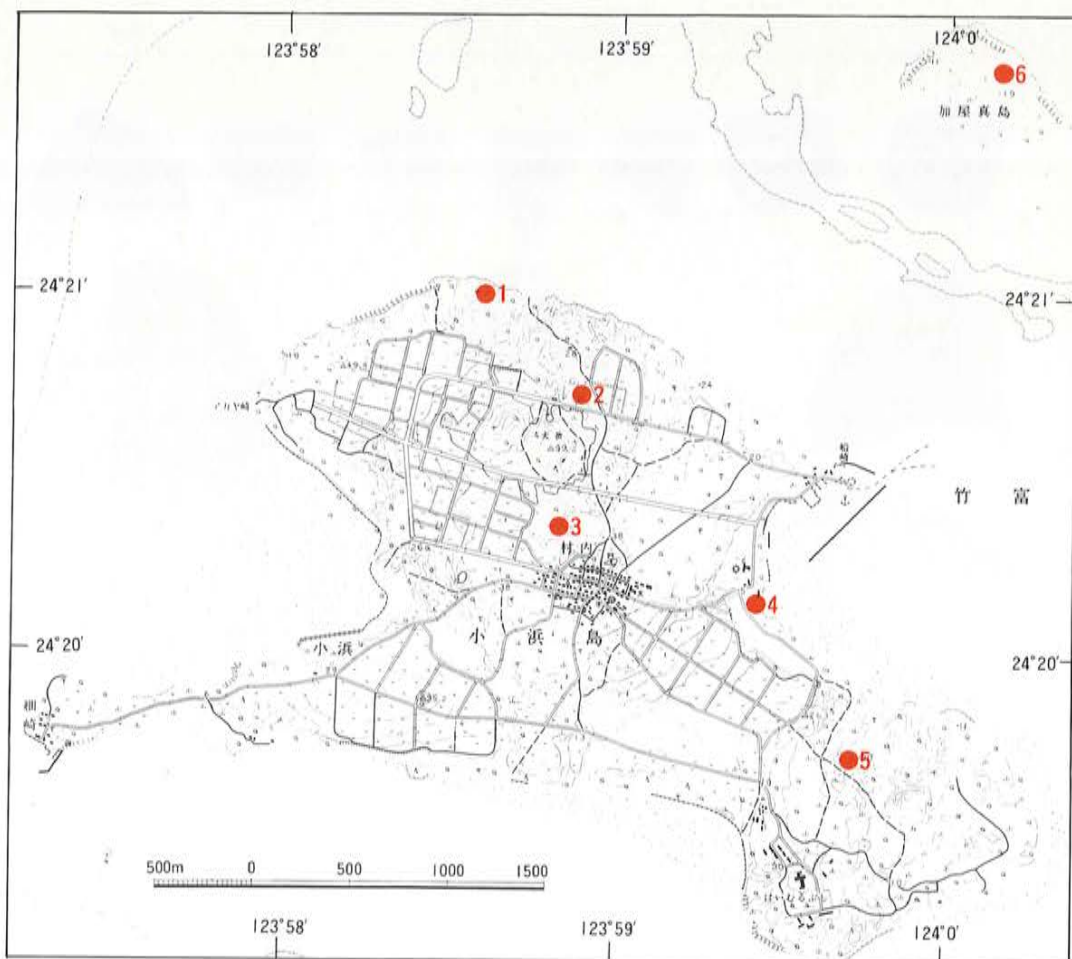
P L. 20 嘉弥真遺跡（上：遠景、下：石積み）



第22図 小浜島採集遺物 (1・4~15：小浜旧部落遺跡、2・3：ウティスク山、16・17：嘉弥真遺跡)



P L. 21 小浜島採集遺物



第23図 小浜島・嘉弥真島のグスク及び相当期遺跡の分布

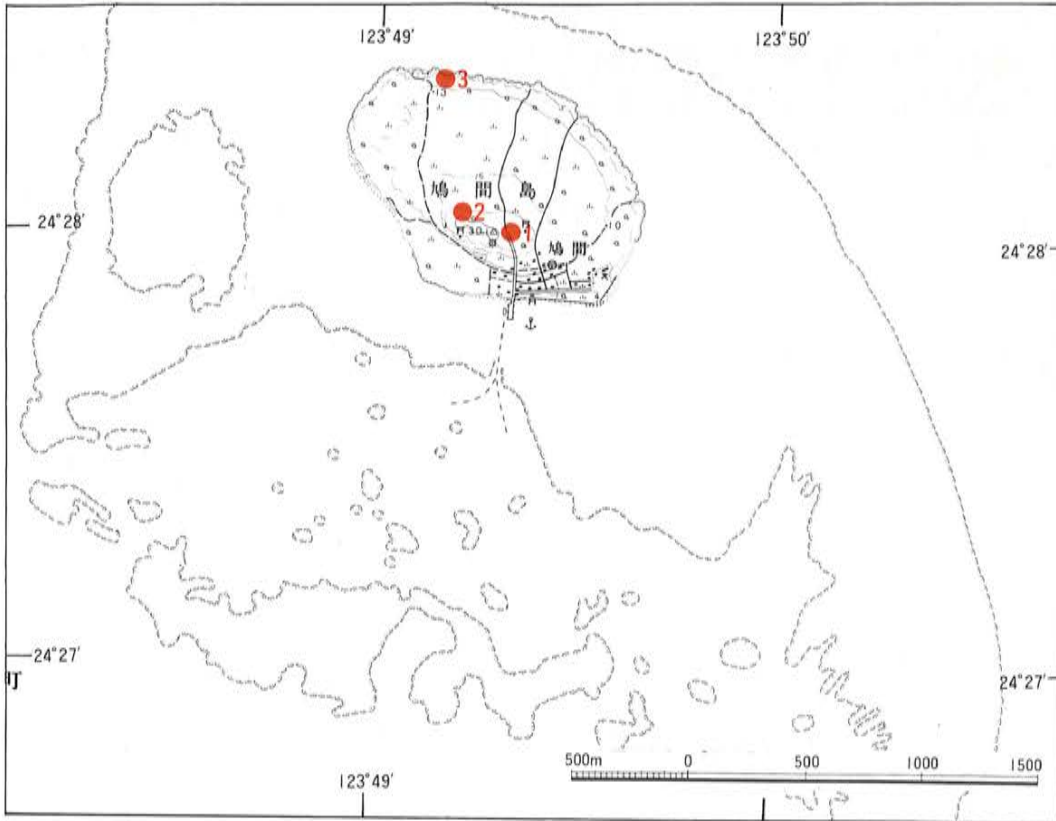
表5 小浜島・嘉弥真島のグスク及び相当期遺跡一覧

遺跡名	所在地	遺物	編年	備考
1. ユンドゥレスク遺跡	字小浜	土器 (パナリ焼)	第四期	
2. ウテイスク山遺跡	々	土器・外来陶磁器	第三期	近世の集落跡
3. 小浜旧部落遺跡	々	土器・外来陶磁器・近世陶磁器	第四期	
4. ニシダ原遺跡	々	土器・(パナリ焼)	第四期	
5. 小浜島フルロウ山遺跡	々	土器・外来陶磁器	第三期	
6. 嘉弥真遺跡	字小浜嘉弥真島	土器・外来陶磁器・近世陶磁器	第三・四期	

第5節 鳩間島

1. 位置と環境

鳩間島は西表島宇上原の北方約5kmに位置する。島の中央部には標高33.8mの中森とこれに連なる2つの丘が東西に走り、周辺は低平な地形を呈する。島の南海岸には海浜砂丘地が発達しているが、北海岸は琉球石灰岩の崖となっている。集落は南海岸の海浜砂丘地に形成されている。



第24図 鳩間島のグスク及び相当期遺跡の分布

表6 鳩間島のグスク及び相当期遺跡一覧

遺跡名	所在地	遺物	編年	備考
1. 鳩間島中森貝塚	字鳩間	土器・外来陶磁器	第三期	
2. ナーマヤーヤシキ (ナーマ屋敷跡)	〃	土器・外来陶磁器	第三期	
3. ブシヤー(武士家)	〃	土器	第三期?	

2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要

①鳩間島中森貝塚

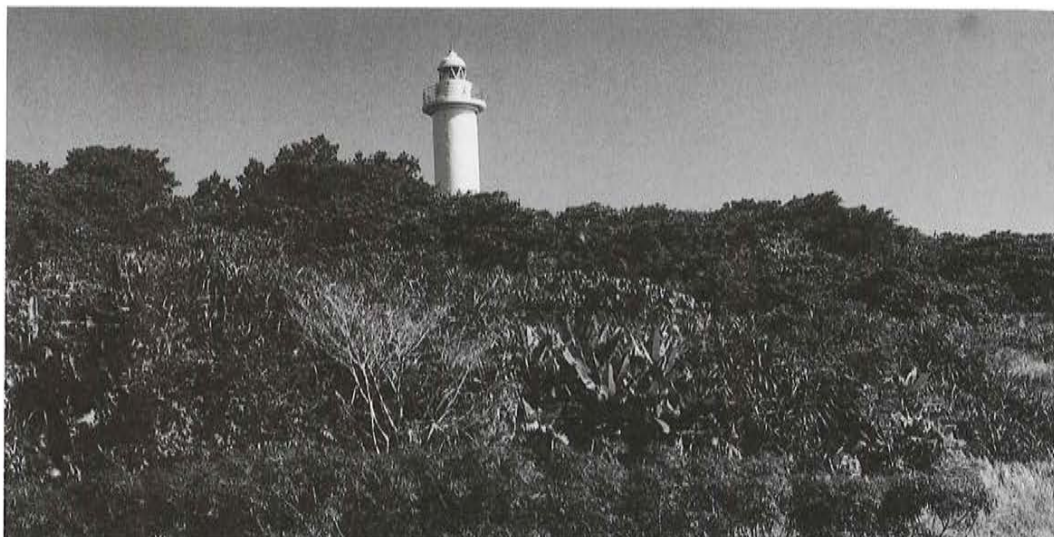
島の中央に位置する中森からその南裾に所在する友利御嶽にかけて広がる遺跡で、遺物包含層も確認できる。遺物には土器・中国産陶磁器等が確認されている（第25図7～15）。本貝塚は、高宮廣衛、C. W. ミーヤン両氏によって発掘調査が行われている。また、中森の灯台近くの斜面には古墓も確認され、肥前磁器瓶が採集されている（第25図17）。

②ナーマヤーヤシキ（ナーマ屋敷跡）

中森貝塚の西隣の丘の上に形成された遺跡である。名称の由来・伝承については不明であるが、昔、武士が住んでいたとも言われている。遺跡の内部では斜面を取り囲むように石積みが見られるのが確認された。また、平場も数箇所みられる。石積みは琉球石灰岩による野面積みである。土器・青磁・白磁・褐釉陶器等が採集される（第25図1～6）。

③ブシヤ（武士家）

島の北海岸、立原浜近くの海岸に突出した琉球石灰岩上に形成された遺跡である。かつては長方形プランの石積みが巡り、狭間様の小窓を有していたと言われるが、戦後港の棧橋建設の際に石材として運びだされ、現在はかろうじてプランの跡が確認できるのみである。表面にはわずかに土器片が散布しており、外耳土器が採集されている（第25図16）。伝承等については、昔、武士が住んでいたという以外は不詳である。



P L. 22 鳩間島中森貝塚近景



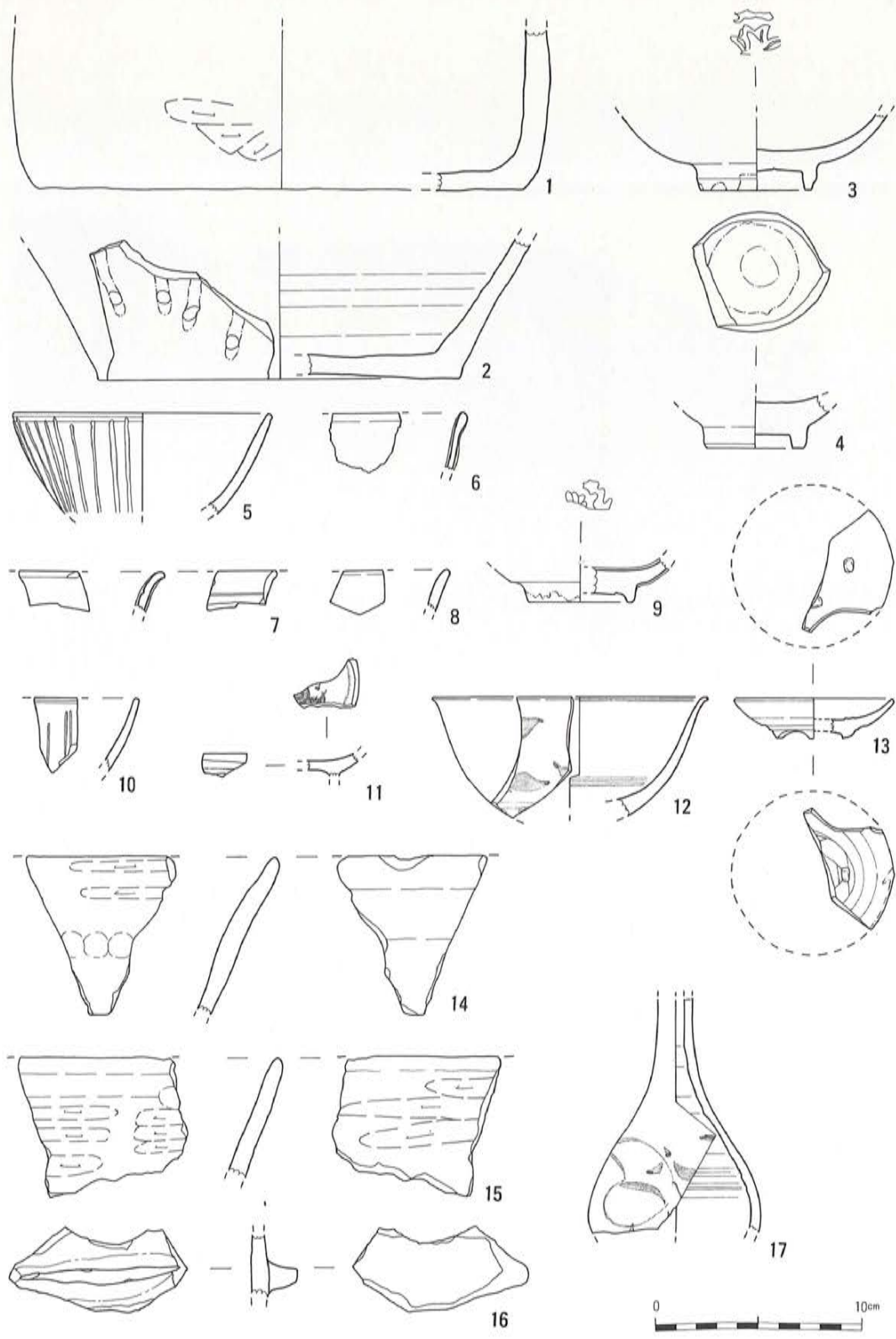
P L. 23 鳩間島中森貝塚内部の状況



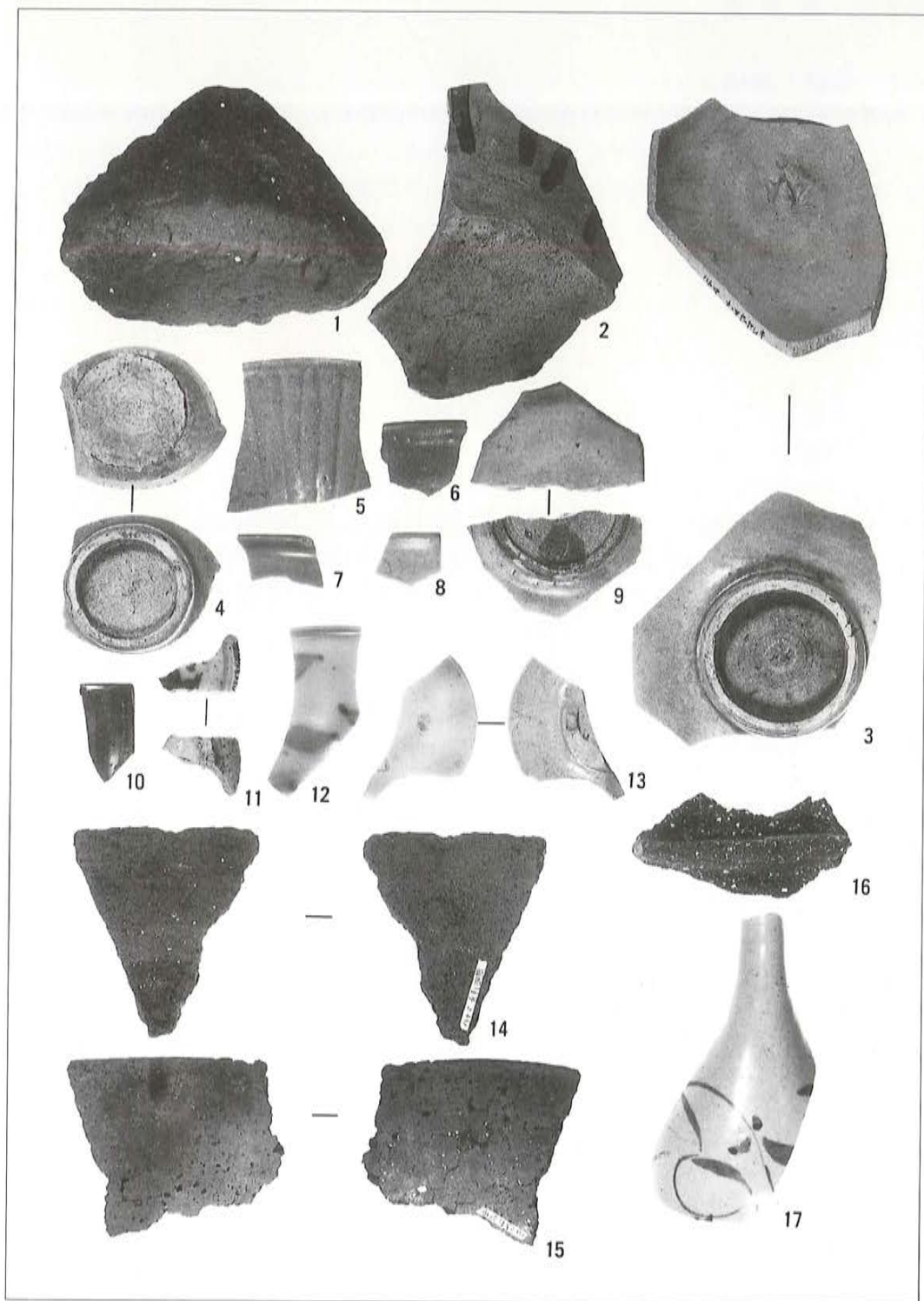
PL.24 ナーマヤーヤシキ (上：遠景、中・下：内部の状況)



P L. 25 ブシジャー (上：遠景、下：遺物の散布状況)



第25図 鳩間島採集遺物 (1~6: ナーマヤーヤシキ、7~15・17: 中森貝塚、16: プシヤー)



P L. 26 鳩間島採集遺物

第6節 西表島

1. 位置と環境

西表島は北緯24度50分、東経123度40分～55分に位置する。八重山諸島の中でも最大の島で、全体的に山がちな地形である。島のほぼ中央にテドウ山と波照間森、東に古見岳、西に祖納岳、南に御座岳等が連なり、これらの山々の間を浦内川、仲間川などの河川が走り、深い峡谷を形成している。平地は海岸線に近接する微高地や河口近くに低湿地が広がるほかは、その発達は乏しい。段丘は海岸段丘が東部では大富、大原、豊原、一帯に、西部では上原から中野に至る一帯に見られる。遺跡の多くは、これらの平地や段丘上に形成されている。

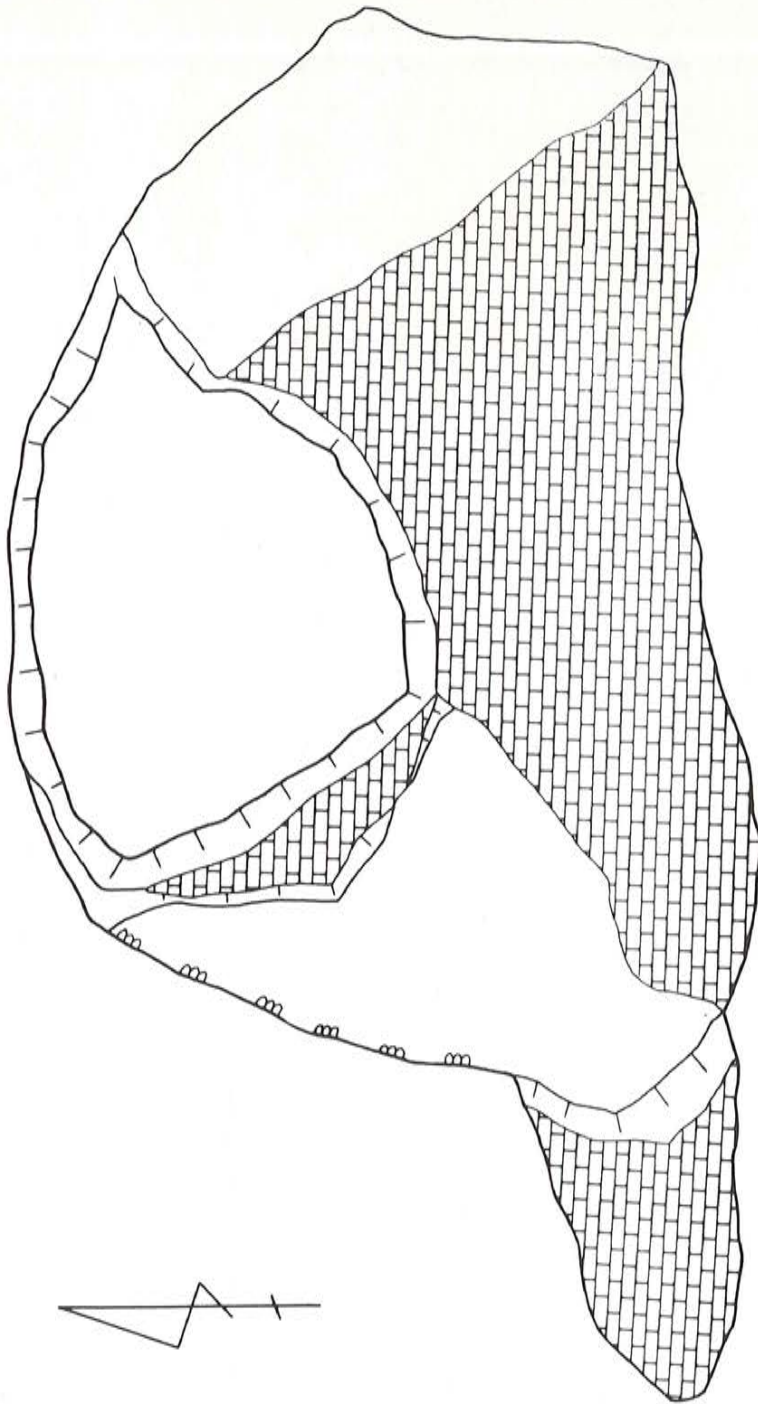
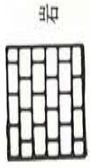
2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要

①船浦遺跡

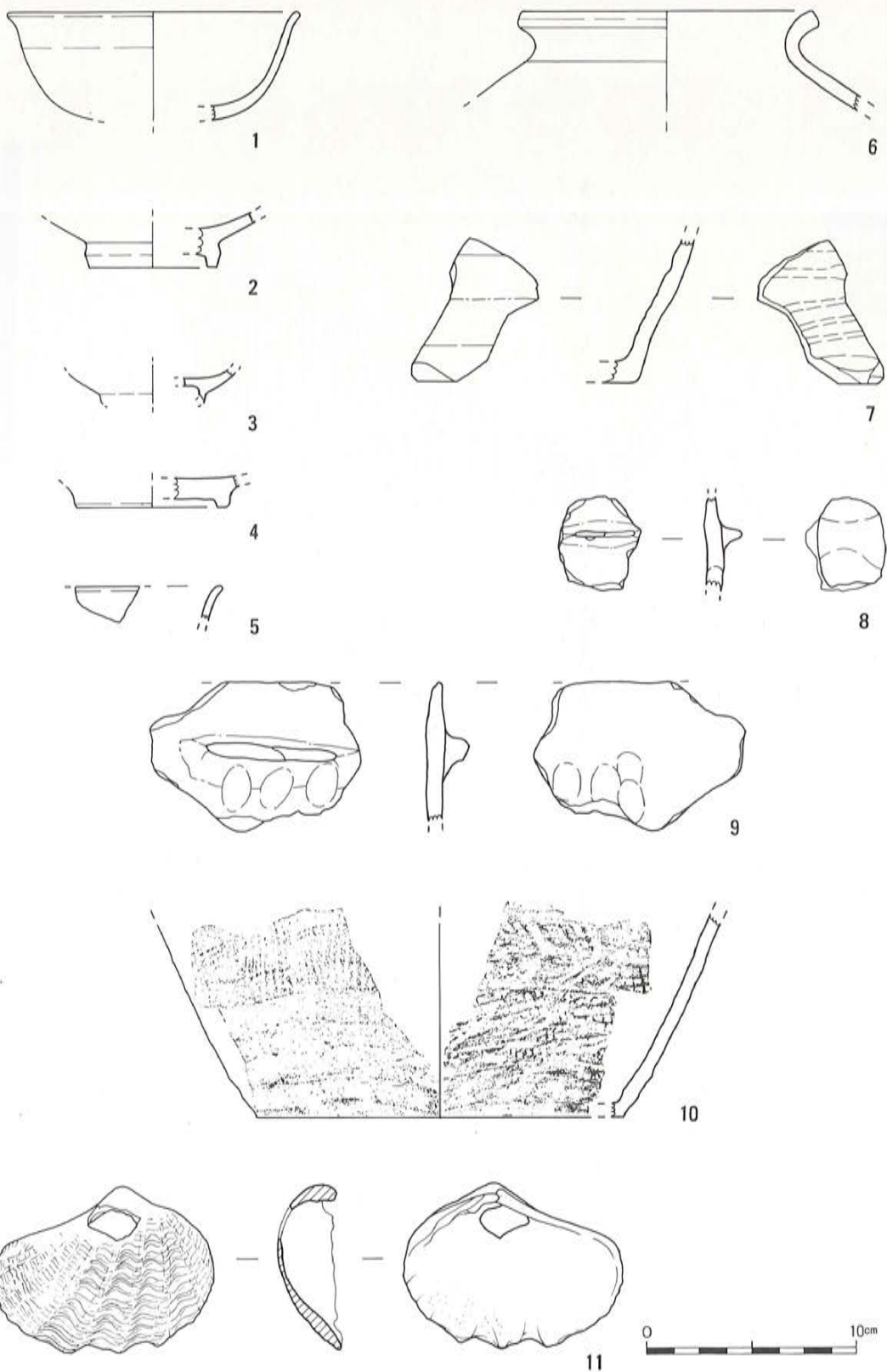
船浦港から南へ500 m程行った所、マングローブが群生する低湿地にある標高約10 mの琉球石灰岩からなる独立小丘上に形成された遺跡である。丘の周囲は崖になっており、頂部は石灰岩の露頭が各所にみられるが、ほぼ平坦で、平坦面が2段程見られる。このうち1段目北西の崖際に石積みが若干残っている。本来は石灰岩による野面積みとみられるが石積みの崩れがひどく、根石部分が残るのみである。遺物は崖面に多く散布しており、頂部ではほとんど見られない。採集遺物は第27図1・2が青磁、3～5が白磁、6・7が褐釉陶器、10が須恵器である。土器は外耳土器が2点採集されている(8・9)。ほかにシャコガイ製貝錘がある(11)。



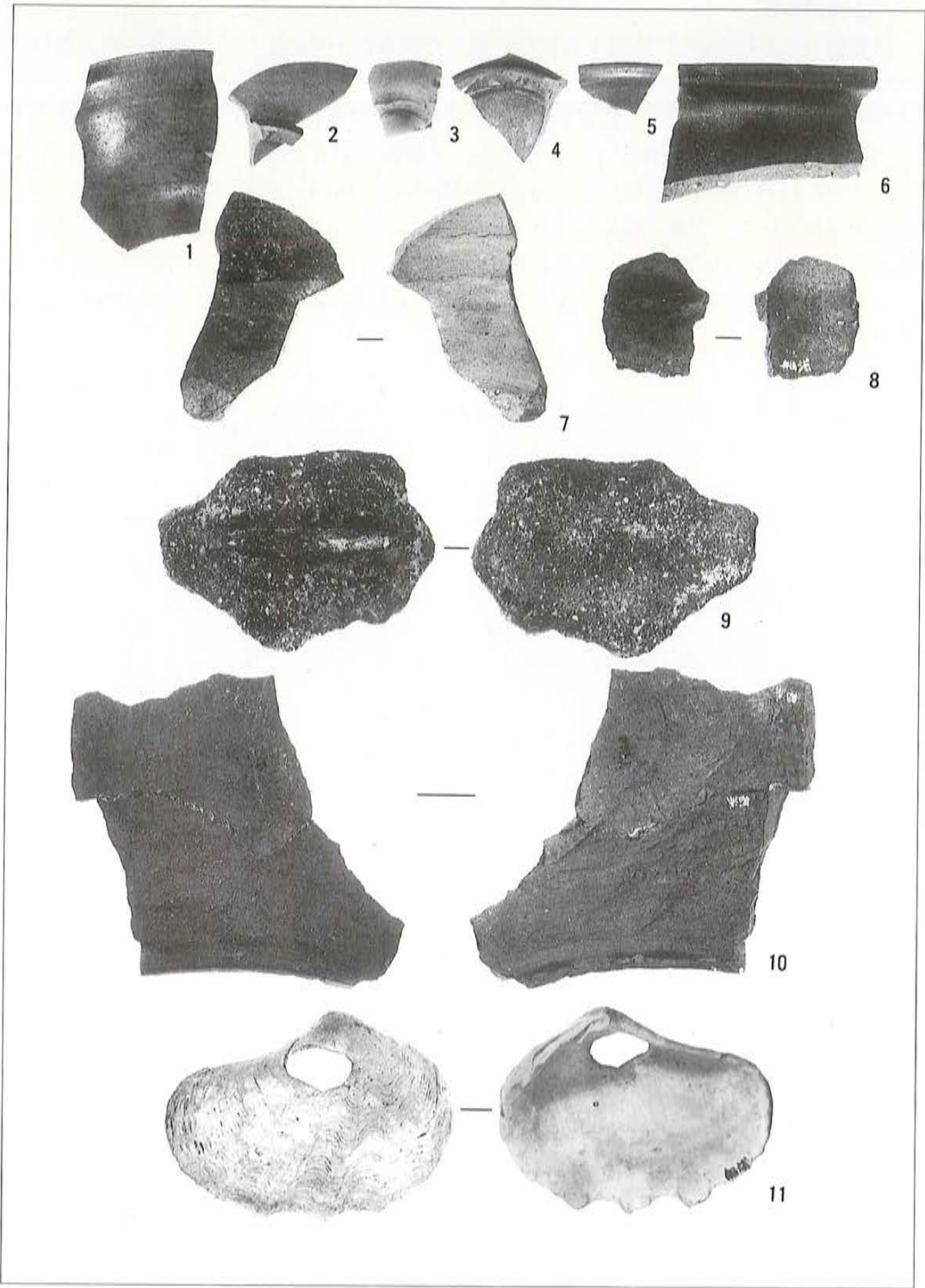
P L. 27 船浦遺跡遠景



第26図 船浦遺跡の概略



第27図 船浦遺跡採集遺物 (1~5:磁器、6・7:褐釉陶器、8・9:土器、10:須恵器、11:貝製品)



P L. 28 船浦遺跡採集遺物

②高那城跡

高那橋の南東約300mに位置する海岸に面した標高約30mの小丘上に形成された遺跡である。丘の周囲は急峻な崖であるが、頂部から南側にかけては比較的なだらかで、3段の平坦面が見られる。平坦面2段目から頂部にかけての斜面には砂岩を使用した石段があり、その両側から石灰岩の石積みがのびている。石積みは崩れがひどく、僅かに根石部分が残っているのみである。遺物は土器および貝類が斜面に散布している。土器は、外耳土器が採集されている。遺跡の性格は残存する遺構の状況からすると遠見台的なものが考えられる。この遺跡の西約1kmには高那村跡遺跡がある。同村跡は18世紀に村建ての記録がある。遺跡内には屋敷囲いの石積みが残っており、中国産陶磁器・沖縄産陶器が散布している(第29図)。



P.L.29 上：高那城跡遠景（西側より）、下：高那村跡遺跡の石積み

③古見赤石崎遺跡

古見部落の東、海岸より突出した標高約11mの小丘及びその周辺に形成された遺跡である。丘の頂部は平坦であるが、現在畑地になっており、石積み等の施設の有無は確認できない。中国産青磁・白磁・染付、本土産染付、土器・沖縄産陶器が遺跡地の斜面、海岸まで広範囲に散布している。また、古見のスラ所が置かれた地でもあり、海中には石列遺構が残っている。本遺跡の北東には県指定史跡平西貝塚がある。同貝塚は、1958年に早稲田大学によって発掘調査が実施されており、土器・中国産陶磁器等が出土している。

④浦内フチュクル遺跡

字中野から字浦内を通る県道215号は、途中で住吉の星砂の浜へ抜ける道路と浦内集落の手前で交差する。この交差する道路を西へ100m程度進むと左側の小高い丘陵が道路に迫ってくる。この丘に入る小道を50～80m程度登って行った場所が遺跡で、標高は30m前後である。遺跡の北側には県道215号を挟んで牧草地が広がっていて、宇奈利崎方面を望むことができる。

本遺跡は1988年に県の文化財保護指導員の石垣金星氏によって発見された遺跡である。遺跡は発見された時点で既に遺物包含層の大半が失われ、その土砂は向いの牧草地に敷きならされてしまったようである。現在、遺物は僅かに残った包含層から青磁片や土器片などの小破片が採集できるが、その範囲は小規模である。

石垣氏が過去に採集した資料の中には13世紀末～14世紀中に位置付けられる白磁ビロースクタイプの碗（註）が含まれていることが、金武正紀氏によって確認されているようである。本遺跡に関する口碑伝承もない状況から古い時期の遺跡と考えられる。

註 金武正紀「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」沖縄県立博物館紀要 第15号 1989年

⑤上村遺跡

祖納部落の西の海上に突出した海拔平均30mの祖納半島のほぼ全域に形成された集落跡である。現況は畑地・原野となっているが、遺跡内には屋敷跡が残っており、テーブルサングを使用した石積みが確認できる。これらの屋敷群のうち、口碑伝承に登場する大竹祖納堂儀佐屋敷跡、慶来慶田城用緒屋敷跡が竹富町指定史跡になっている。

遺物は広い範囲にわたって散布しており、中国産陶磁器・沖縄産陶器・貝殻・鉄滓などが見られる。1988年より3次にわたって発掘調査が実施されており、サング集積遺構・炉跡等の遺構が検出されている。遺物は中国産陶磁器・本土産陶磁器・沖縄産陶器等のほか、羽口・鉄滓など鉄器生産に関連する遺物も出土している。

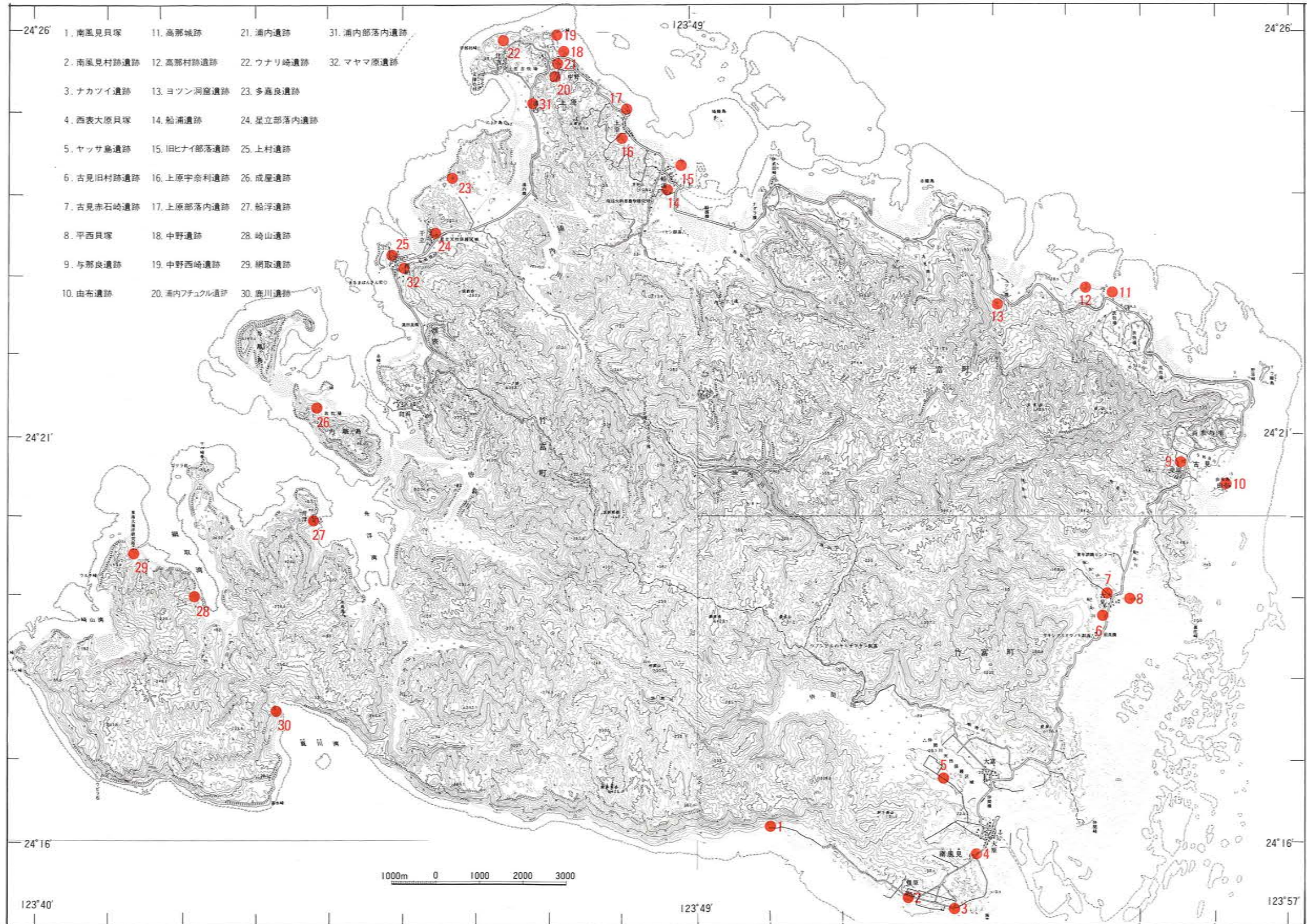
⑥成屋遺跡

内離島の東海岸の後背砂丘地に形成された集落跡である。現況は牧場になっており、屋敷囲いのフクギがわずかに残っている。1980年に青山学院大学によって発掘調査が行われ、

15～16世紀の集落跡と位置付けられている。内離島の南西、西表島側の元成屋の踏査を行い、海岸に面した洞穴内より土器片・貝殻が採集されている。洞穴内は拝所となっており、きれいに整地されている。洞穴内中央を試掘したが、遺物包含層は確認されなかった。土器片は洞穴内左手奥の盛り砂の中より採集され、整地の際に包含層は削平されたようである。洞穴の西の丘陵斜面の林中に板石墓が数基確認された。



P L.30 上：古見赤石崎遺跡遠景、下：浦内フチュクル遺跡近景



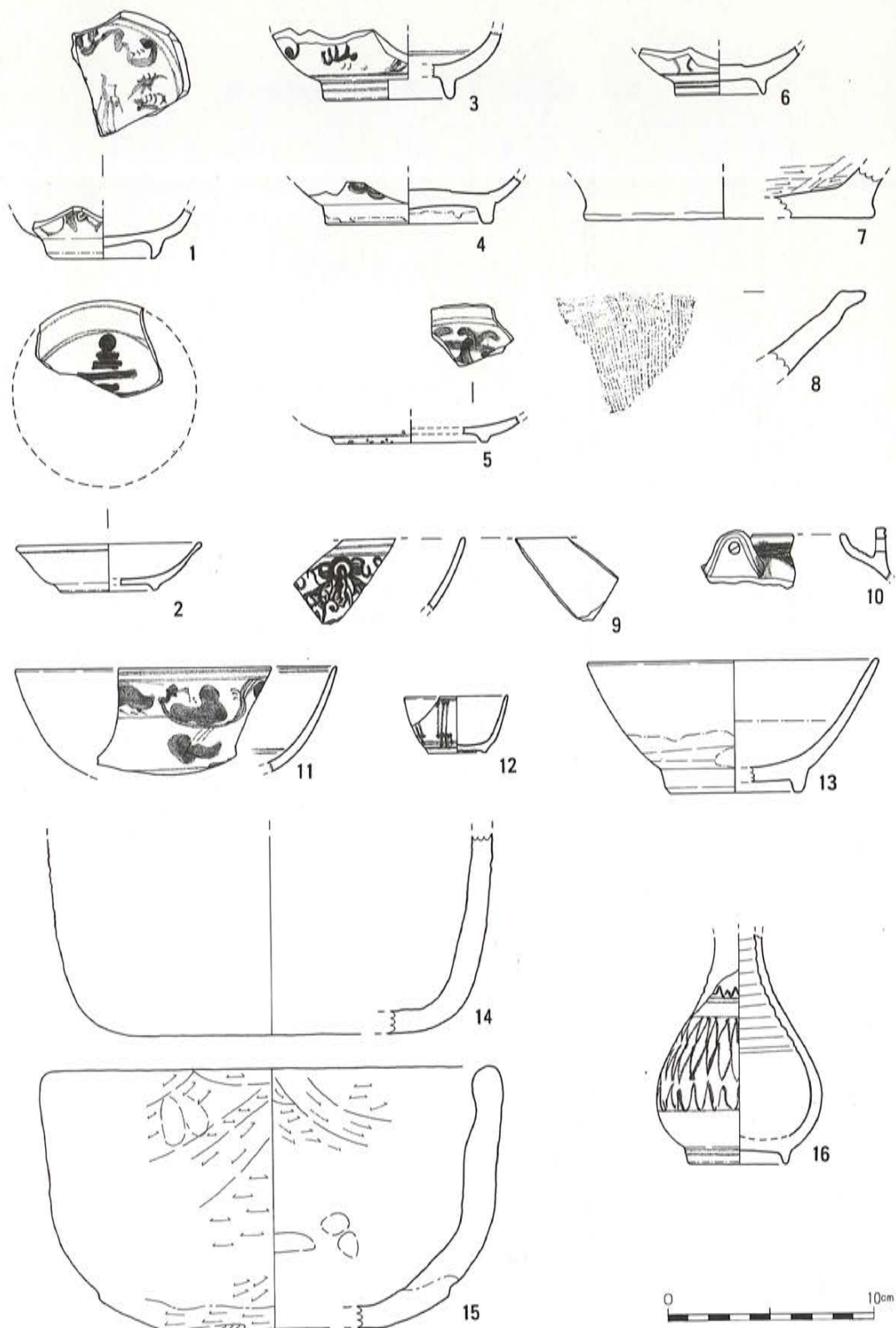
第28図 西表島のグスク及び相当期遺跡の分布

表7 西表島のグスク及び相当期遺跡一覧

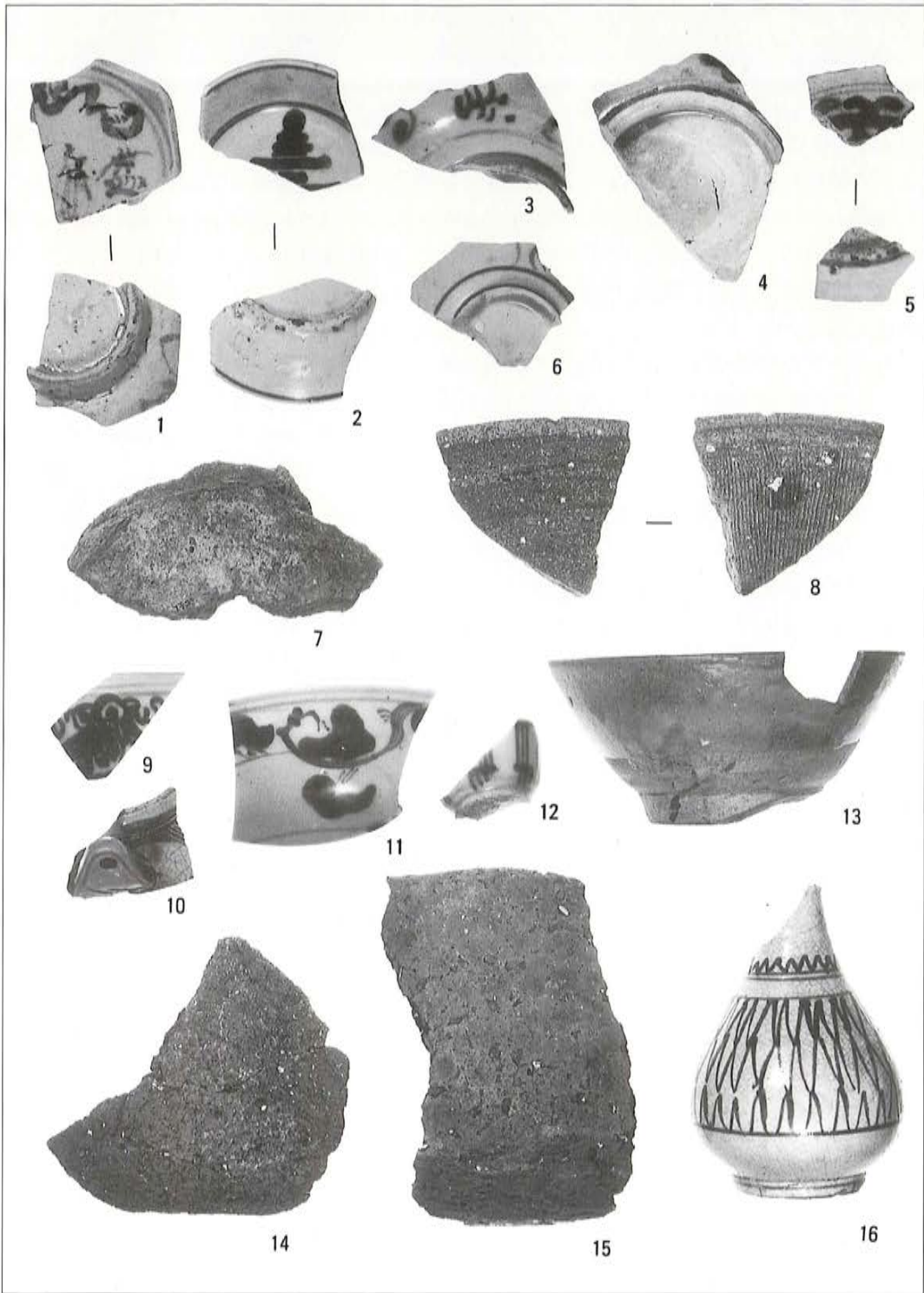
遺跡名	所在地	遺物	編年	備考
1. 南風見貝塚	字西表 (東部)	石器・土器	第一・三期	複合遺跡
2. 南風見村跡遺跡	〃	土器・近世陶磁器	第四期	
3. ナカツイ遺跡	〃	土器・外来陶磁器	第三期	
4. 西表大原貝塚	〃	〃	〃	
5. ヤッサ島遺跡	〃	〃	〃	
6. 古見旧村跡遺跡	〃	土器・近世陶磁器	第四期	
7. 古見赤石崎遺跡	〃	土器・外来陶磁器	第三期	
8. 平西貝塚	〃	〃	〃	
9. 与那良遺跡	〃	〃	〃	
10. 由布遺跡	〃	土器	第四期	
11. 高那城跡	〃	土器・外来陶磁器	第三期	
12. 高那村跡遺跡	〃	土器・近世陶磁器	第四期	
13. ヨツン洞窟遺跡	〃	土器	第三期	
14. 船浦遺跡	字西表 (西部)	土器・外来陶磁器	〃	
15. 旧ヒナイ部落遺跡	〃	土器・外来陶磁器	〃	
16. 上原宇奈利遺跡	〃	土器・外来陶磁器・近世陶磁器	第四期	
17. 上原部落内遺跡	〃	土器・近世陶磁器	〃	
18. 中野遺跡	〃	〃	〃	
19. 中野西崎遺跡	〃	〃	〃	
20. 浦内フチュクル遺跡	〃	輸入陶磁器	第三期	
21. 浦内遺跡	〃	土器・外来陶磁器	〃	
22. ウナリ崎遺跡	〃	土器	第四期	
23. 多嘉良遺跡	〃	土器・近世陶磁器	〃	
24. 星立部落内遺跡	〃	〃	〃	
25. 上村遺跡	〃	土器・外来陶磁器	第三期	
26. 成屋遺跡	〃内離島	土器・外来陶磁器	〃	
27. 船浮遺跡	字西表 (西部)	土器・近世陶磁器	第四期	
28. 崎山遺跡	〃	〃	〃	
29. 網取遺跡	〃	〃	〃	
30. 鹿川遺跡	〃	〃	〃	
31. 浦内部落内遺跡	〃	〃	第四期	
32. マヤマ原遺跡	〃	土器・外来陶磁器	第三期	

表7 西表島のグスク及び相当期遺跡一覧

遺跡名	所在地	遺物	編年	備考
1. 南風見貝塚	字西表 (東部)	石器・土器	第一・三期	複合遺跡
2. 南風見村跡遺跡	〃	土器・近世陶磁器	第四期	
3. ナカツイ遺跡	〃	土器・外来陶磁器	第三期	
4. 西表大原貝塚	〃	〃	〃	
5. ヤッサ島遺跡	〃	〃	〃	
6. 古見旧村跡遺跡	〃	土器・近世陶磁器	第四期	
7. 古見赤石崎遺跡	〃	土器・外来陶磁器	第三期	
8. 平西貝塚	〃	〃	〃	
9. 与那良遺跡	〃	〃	〃	
10. 由布遺跡	〃	土器	第四期	
11. 高那城跡	〃	土器・外来陶磁器	第三期	
12. 高那村跡遺跡	〃	土器・近世陶磁器	第四期	
13. ヨソン洞窟遺跡	〃	土器	第三期	
14. 船浦遺跡	字西表 (西部)	土器・外来陶磁器	〃	
15. 旧ヒナイ部落遺跡	〃	土器・外来陶磁器	〃	
16. 上原宇奈利遺跡	〃	土器・外来陶磁器・近世陶磁器	第四期	
17. 上原部落内遺跡	〃	土器・近世陶磁器	〃	
18. 中野遺跡	〃	〃	〃	
19. 中野西崎遺跡	〃	〃	〃	
20. 浦内フチュクル遺跡	〃	輸入陶磁器	第三期	
21. 浦内遺跡	〃	土器・外来陶磁器	〃	
22. ウナリ崎遺跡	〃	土器	第四期	
23. 多嘉良遺跡	〃	土器・近世陶磁器	〃	
24. 星立部落内遺跡	〃	〃	〃	
25. 上村遺跡	〃	土器・外来陶磁器	第三期	
26. 成屋遺跡	〃内離島	土器・外来陶磁器	〃	
27. 船浮遺跡	字西表 (西部)	土器・近世陶磁器	第四期	
28. 崎山遺跡	〃	〃	〃	
29. 網取遺跡	〃	〃	〃	
30. 鹿川遺跡	〃	〃	〃	
31. 浦内部落内遺跡	〃	〃	第四期	
32. マヤマ原遺跡	〃	土器・外来陶磁器	第三期	



第29図 西表島・新城島採集遺物 (1~8: 上村遺跡、9~13: 高那村跡、14~16: 横目家の墓)



P L. 31 西表島・新城島採集遺物

第7節 新城島

1. 位置と環境

新城島は石垣島の南西約23kmの洋上、西表島と黒島の上に浮かんでいる。新城は地元ではパナリと呼称されているが、それは上地島と下地島の二つの離れ島からなりたっていることから呼ばれていると伝えられている。北に位置するのが上地島で、南が下地島である。上地島はわりと細長く、最高所でも約13.4mと低平な島で、面積は約1.8km²、周囲は約6.22kmである。下地島はほぼ円形の低平な島で、面積は約1.6km²、周囲は約4.83kmといずれも小さな島である。両島の間隔は420mほどで、干潮時にはリーフ伝いに歩いて渡れる距離である。

島はいたる所に琉球石灰岩が露出し、農耕地としては適していない。しかし、島の人々は石灰岩が少なく耕地に適した僅かな場所を選び、サツマイモや粟・麦・稗などの雑穀類を栽培して生活をしてきた。幕藩時代には首里王府から課せられた人頭税のために、女性は布を織り、男性はザン（ジュゴン）を漁り、米にいたっては島で生産することができず遠く離れた西表島に渡って耕作をしなければならないという筆舌に尽くしがたい生活苦が強い歴史がある。また、島の歴史は水とのたたかいでもあった。隆起珊瑚石灰岩からなる島は保水力が弱く、井戸を掘ってもだめで、もっぱら雨水にたよっていた。今でも屋敷跡や畑地に大きなシャコガイが多く見受けられるのは、雨水を溜めるものに利用されていたものの名残である。そのため、干ばつの時には遠く西表島から水を運んでいた。

現在は両島とも水は西表島から海底送水され、往時の不便さは解消されている。ただ、かつては450名余の人々が生活を営んでいたが、今では上地島に僅か4人、下地島にいたっては全員西表島に移住し、牧場として再開された現在では管理人だけが住んでいる。八重山は島の祭祀行事を大事に受け継いでいる地域であり、新城島でもその例にもれず、上地島での最大の祭祀行事である「アカムタ祭り（豊年祭）」の期間中は島外に出ていた人々も島に戻り、かつての活況を呈している。

今回の調査では日程の都合で下地島の調査はできなかった。

2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要

①ニシヌブシヌヤ

島の北西海岸に突き出た琉球石灰岩の上に立地する。約30m四方に2～3mの高さで野面積みの石垣をめぐらしているが、平面観は地形に合わせてやや不定形になっている。遺構内の地表面は枯れ葉などによって覆われており、調査が困難であったために、任意に2カ所（50×50cm）を試掘した。その結果、いずれも地表下10～15cmで基盤の石灰岩に達し覆土はそれほど厚くない。出土遺物には土器、青磁、褐釉陶器、貝殻、獣骨などがあり、試掘範囲のわりには量が多い。

遺構の性格は判然としないが、規模がわりに小さいことから「物見台」のようなもので

あったことが考えられる。また、遺跡名のニシヌブシヌヤーとは「北の武士館」の意味であり、武士の館があったとも伝えられている。

②ボンヤマー遺跡

ニシヌブシヌヤー遺跡の南方約200mの地点にあり、同様に琉球石灰岩の崖上に野面積みの石積み遺構が認められる。東側の石積みはかなり崩されているが、地元の方の話によると、ヤシガニを採るために壊されたとのことである。遺構の規模は前者に比べて大きい。それでもグスク（城）的な機能は考えられず、「物見台」であった公算が大きい。

当該遺跡はニシヌブシヌヤーに対してパイヌブシヌヤー（南の武士の館）と呼ばれている。南東側には広い範囲にわたって土器や貝殻などが散見でき、集落跡であったことがうかがえる。また、石積み墓も数基認められ、現集落の元島であることが考えられる。

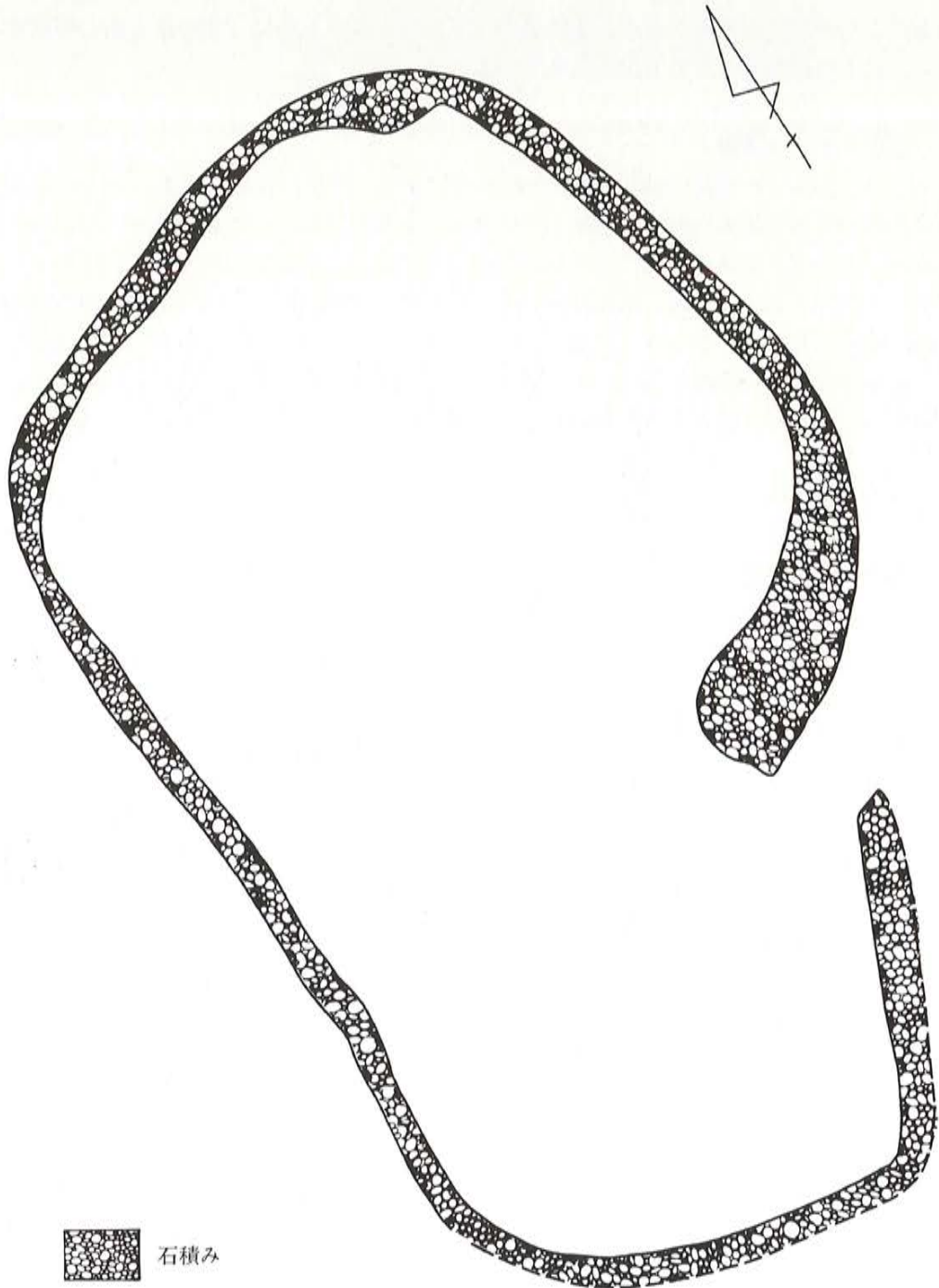
③イールウガン

島のほぼ中央の西側にある港の南側に位置する琉球石灰岩上に立地している。崖沿いに野面積みの石垣を巡らしている。最先端部は卵形に石積みめぐらし、「物見台」の機能を有していたことがうかがえる。そこから、陸側に向かって高さ1m程の石積みが延び、浜の手前まで続いている。一帯から土器や貝殻などが採取できる。

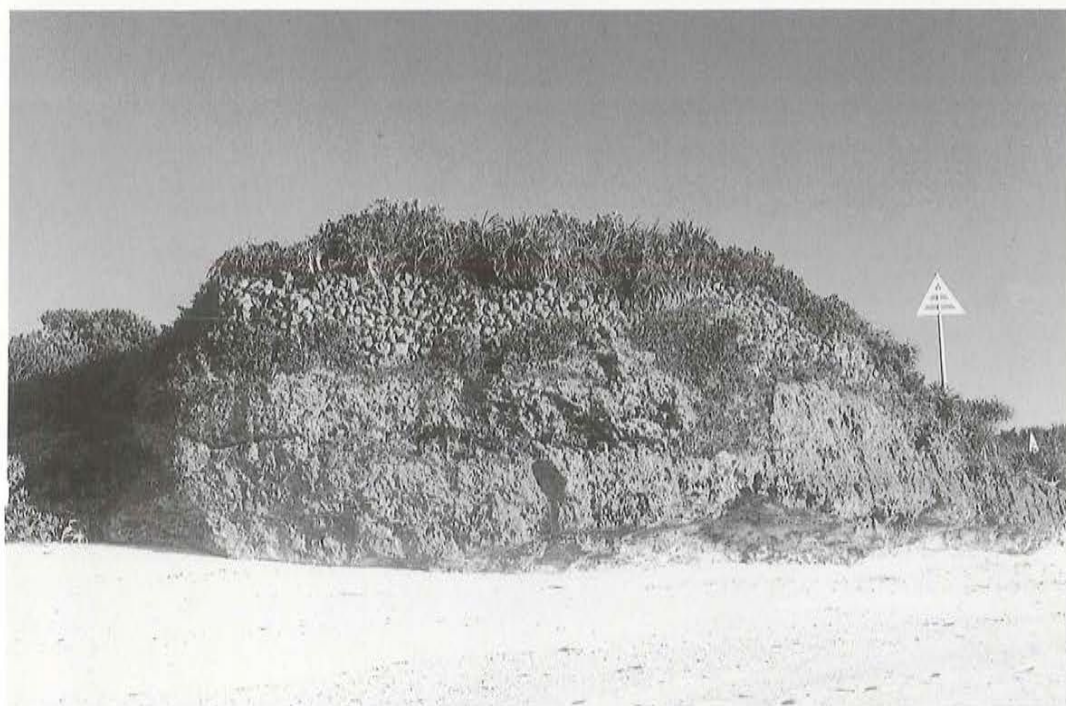
そこは俗に「クイヌパナ」と呼ばれている所で、民謡「クイヌパナ節」にも謡われ、景勝の地にもなっており、1972年に竹富町の史跡として文化財指定されている。

④ウプトゥムル遺跡

島の南側の比較的内陸部に位置している。一帯は標高約12mと島内でもわりと高所となっている。周辺は灌木が生い茂り、調査に困難をきたしたが、一部で石積み遺構を確認することができた。ただ、遺構全体の規模やプランなどが明確ではなく、性格は判然としない。遺物もほとんど採取できないが、一帯にはウブドゥ村があったと伝えられており、ボンヤマー遺跡と同様な遺跡と考えられる。現に、石積みの古い墓も数基確認できた。



第30図 ニシヌブシヌヤーの概略



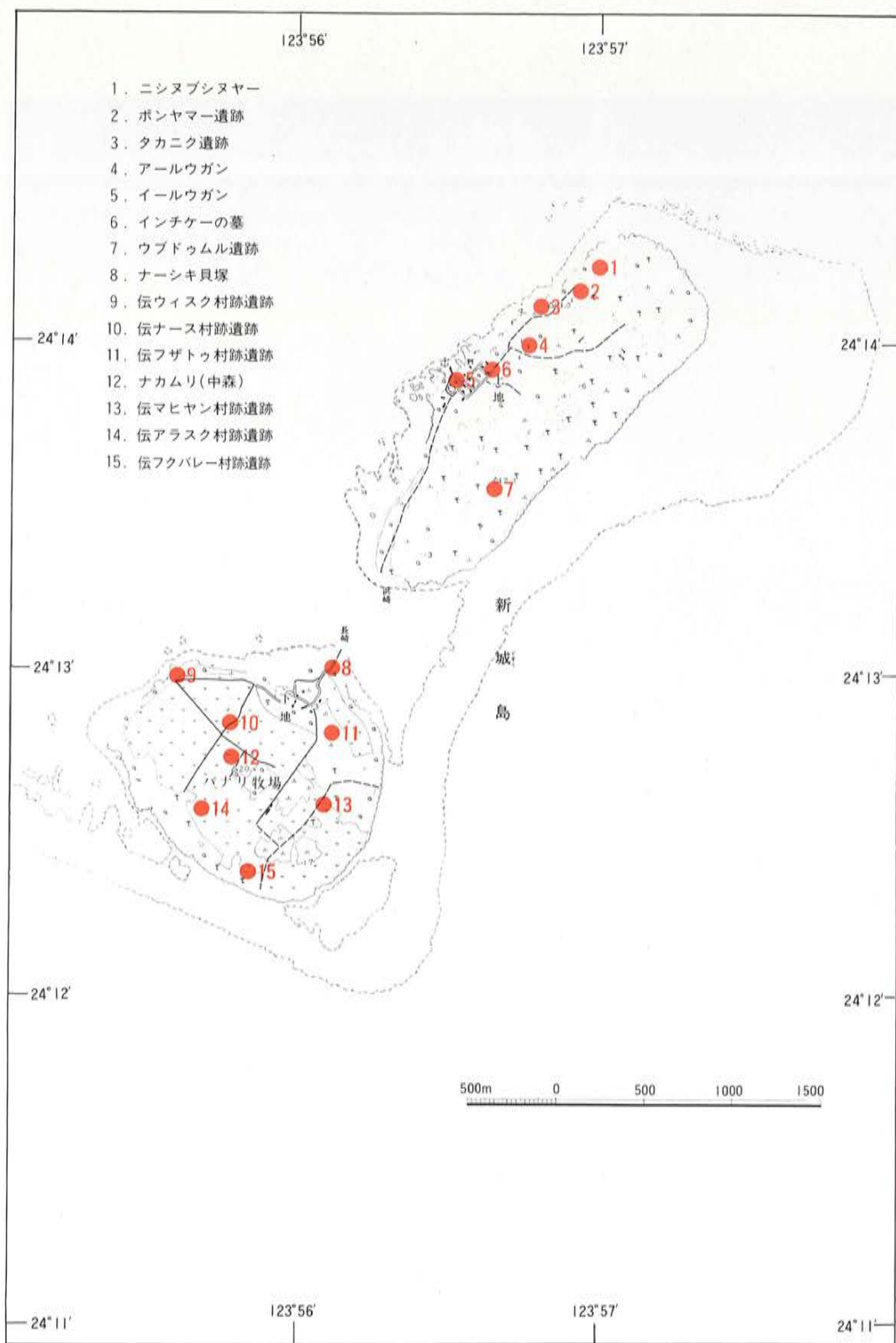
P L. 32 ニシヌブシヌヤー（上：遠景、下：内部の状況）



P L.33 上：ポンヤマー遺跡、下：イールウガン



P L.34 上：横目家の墓、下：ウブドゥムル遺跡内部の状況



第31図 新城島のグスク及び相当期遺跡の分布

表8 新城島のグスク及び相当期遺跡一覧

遺跡名	所在地	遺物	編年	備考
1. ニシヌブシヌヤ	上地	土器・外来陶磁器	第三期	石積み遺構
2. ボンヤマー遺跡	〃	〃	〃	〃
3. タカニク遺跡	〃	〃	〃	遠見台
4. アールウガン	〃	土器（バナリ焼）	第四期	石積み遺構
5. イールウガン	〃	〃	〃	
6. インチケーの墓	〃	〃	〃	
7. ウブドゥムル遺跡	〃	土器・外来陶磁器	第三期	石積み遺構
8. ナーシキ貝塚	下地	土器（バナリ焼）	第四期	
9. 伝ウイスク村跡遺跡	〃	〃	〃	
10. 伝ナース村跡遺跡	〃	〃	〃	
11. 伝フザトゥ村跡遺跡	〃	〃	〃	
12. ナカムリ（中森）	〃	？	？	火番岡跡
13. 伝マヒヤン村跡遺跡	〃	土器（バナリ焼）	第四期	石積み遺構
14. 伝アラスク村跡遺跡	〃	外来陶磁器・土器 （バナリ焼）	第三・四期	
15. 伝フクバレー村跡遺跡	〃	〃	〃	

第8節 波照間島

1. 位置と環境

波照間島は、北緯24度1分、東経123度47分に位置する日本最南端の島である。西表島より南へ約25kmを測る。島の形状は楕円形を呈し、島の中央部が標高40m～45mを測り、周辺へ緩やかに傾斜する地形を呈する。北から西海岸にかけては海浜砂丘地が発達している箇所が随所にみられるが、他は琉球石灰岩の断崖が海岸まで迫り、南東の高那崎一帯では特に顕著である。現在の集落は名石・前・北・南の4集落が島の中央部に、富嘉部落が中央西寄りにある。遺跡はこれら集落内及びその周辺から北～西海岸側に形成されている。

2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要

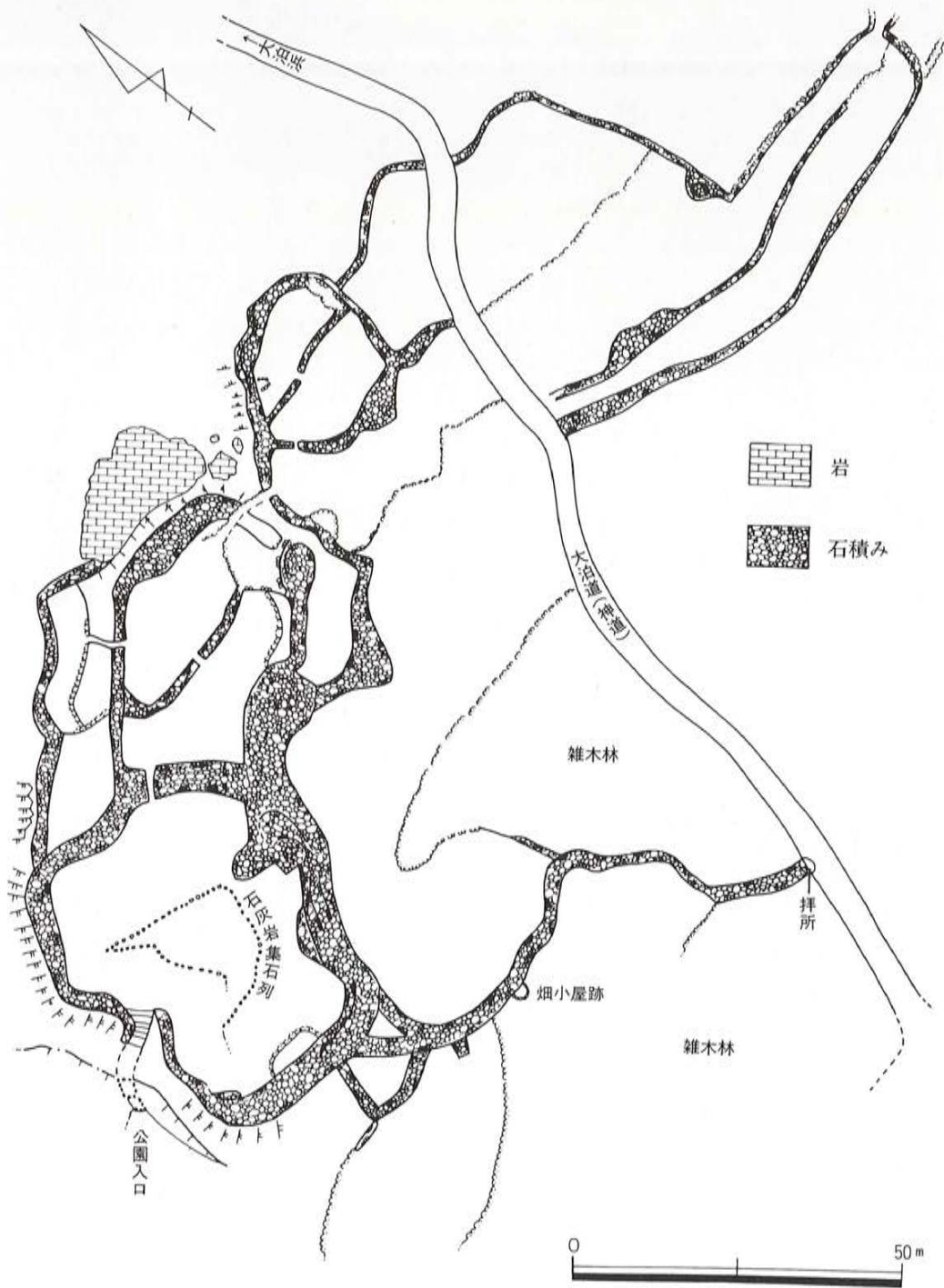
①下田原城跡（第32図）

遺跡は島の北海岸大泊浜の南約200mの位置にある北東方向に走る断崖上に形成されている。

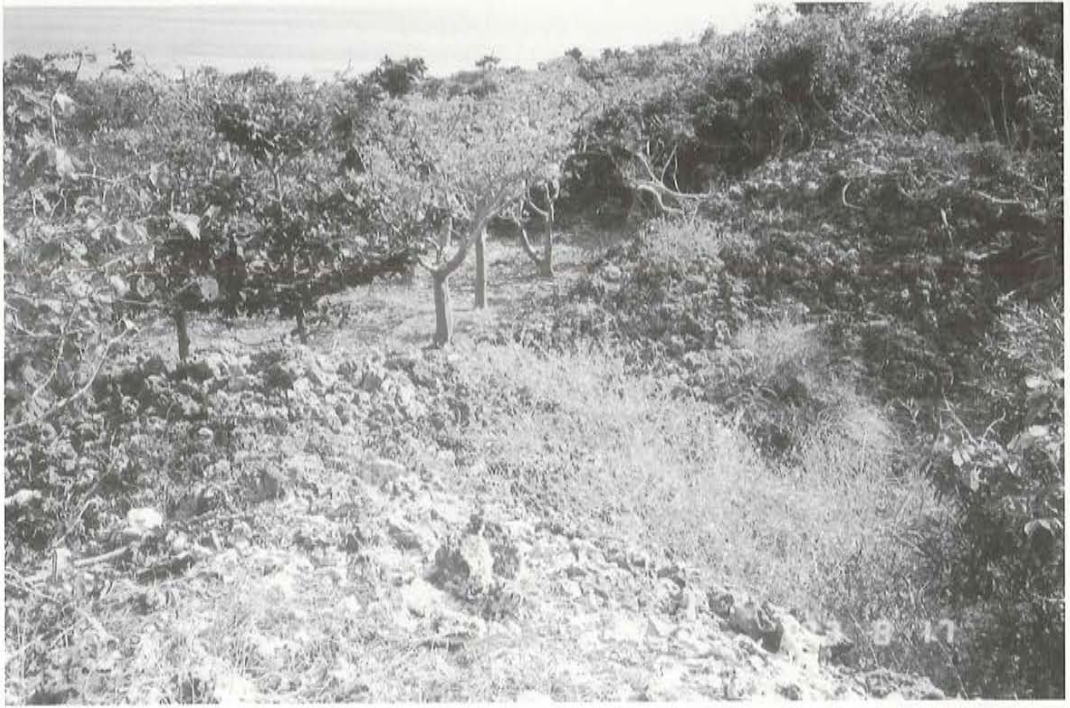
遺構のプランは崖線に沿って複数の郭を連結させ、北東方向に細長く延びる連郭式の形状をとっている。石積みは琉球石灰岩の野面積みである。遺跡内は石積みによって数多く仕切られ、大小様々な郭がある。また、一つの郭の内部にも低い石積みによって仕切られる等、複雑な構成となっている。各々の郭は通用口によって結ばれている。また、南側の郭の東側石積みの上には物見台が設けられている。



P L. 35 下田原城跡遠景（北側より）



第32図 下田原城跡の概略



P L . 36 下田原城跡石積み

②伝マシユク村跡遺跡（第33図）

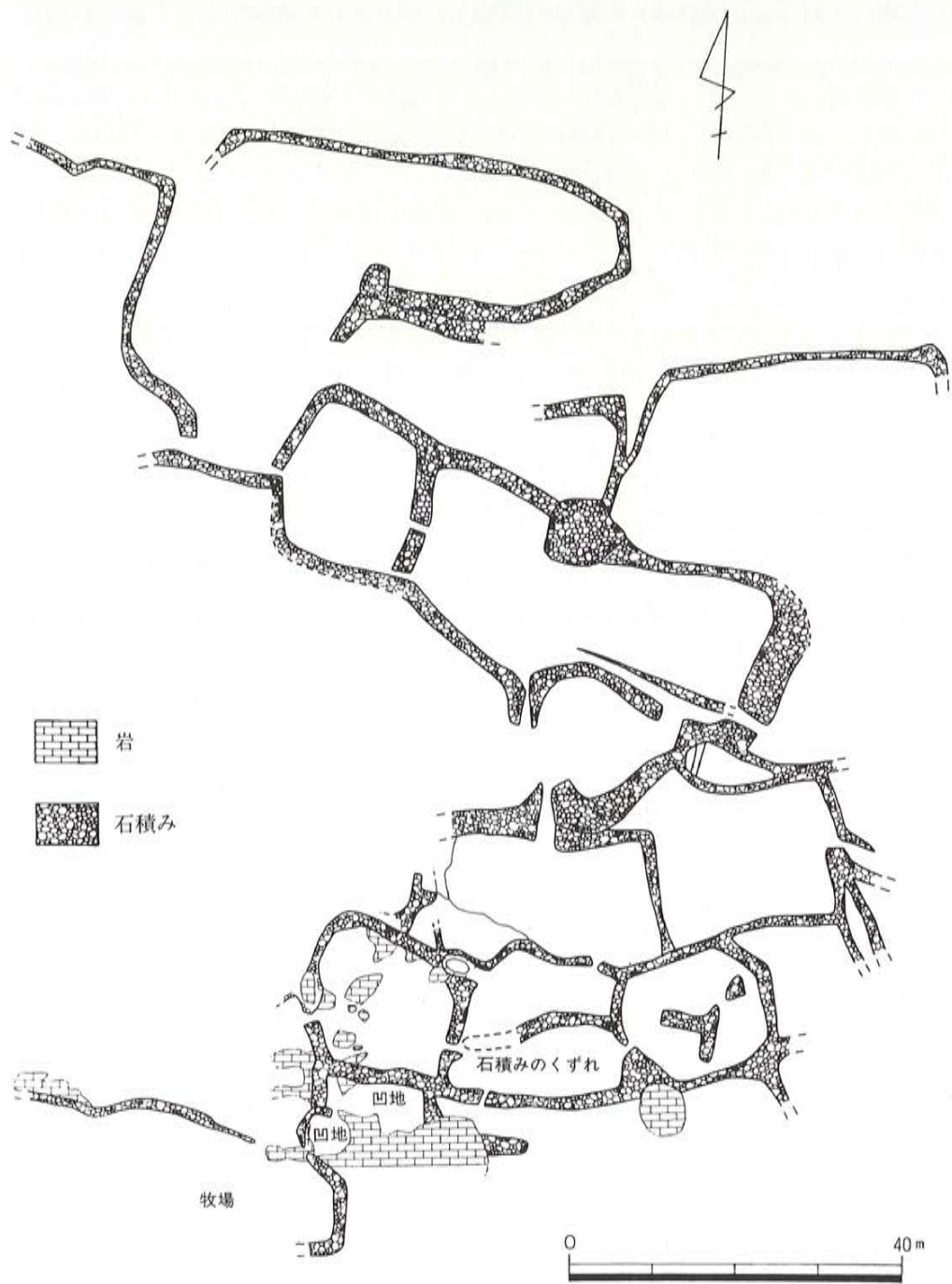
北部落の北約1km、海に面した琉球石灰岩上に形成された遺跡である。東方約150mにはシムス村跡、西方約250mには下田原城跡がある。海側は崖になっており、崖線から約5~20m陸側にタカフク（方言で高い石垣という意味）と呼ばれる石積みが東西方向に約120mにわたって確認でき、この内側に遺跡が広がる。遺跡の規模は東西約300m、南北約150mの範囲に広がるものとみられる。

今回の調査では、この全てを調査するには日程的に困難なため、タカフクの内側部分から遺跡の南側の縁辺部を確認するに止まった。この部分では遺跡は南北120mの範囲まで広がっている。

遺構のプランは方形区画と数は少ないが長方形区画の2種あり、方形区画の場合平均12m×15mで、長方形区画の場合12m×40mを測るものがある。概して、南側の方は区画が小さく、北側へ行くほど区画の規模が大きくなるような印象を受ける。これらの区画が複数連結して東西方向に延びて一つの列を構成し、更にこの列が南北方向に数列組み合わせられるという構成になっており、調査範囲内では南北方向に5列程度確認されている。各区画は幅1m弱の通用口によって結ばれている。

各区画は幅2m前後、高さ1.8m前後の琉球石灰岩の野面積みの石積みによって仕切られており、高い所では2mを越える。区画内は一般にほぼ平坦であるが、南側では石灰岩の岩盤が露出している箇所もある。また、一部の区画では内部を更に50cm程度の低い石積みで仕切られているものもある。この類例は前述した下田原城跡にも見られる。海側に近い区画には高さ3mを越える石積みがある。石積みはかなり崩れているが、外面が一部残存している箇所があり、これから判断すると階段状に3段にわたって積まれており、物見台状の遺構ではないかとみられる。これに類似する遺構が北西側にもあり、計2基確認されている。

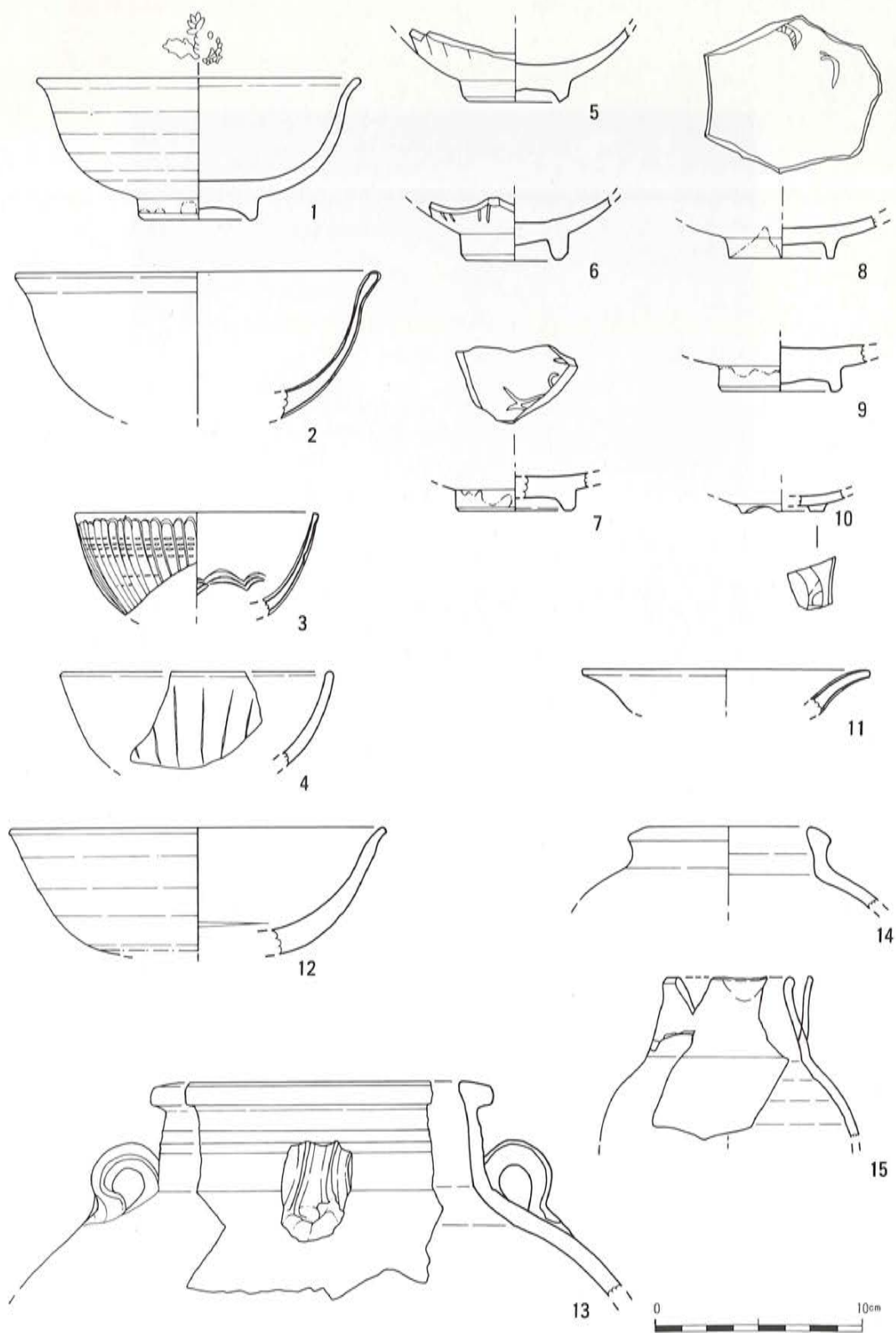
遺物は、タカフクの石積み周辺と南側縁辺部近くの区画内より採集されている。特に南側縁辺部付近には石灰岩のドリネ状に陥没した穴を部分的に低い石積みで囲った箇所があり、その周辺には大型の遺物が集中的に散布している。採集される遺物は青磁・白磁・褐釉陶器・土器が主体であり（第34図~第36図）、染付はほとんど見られない。土器は外耳土器（第36図）と外耳を持たない鍋形になるとみられるもの（第35図7）と浅鉢形のもの（第35図5）及び壺形（第35図6）が採集されている。沖縄産陶器は南側縁辺部の牧場に隣接した石積みの上より碗形が1点採集されている。



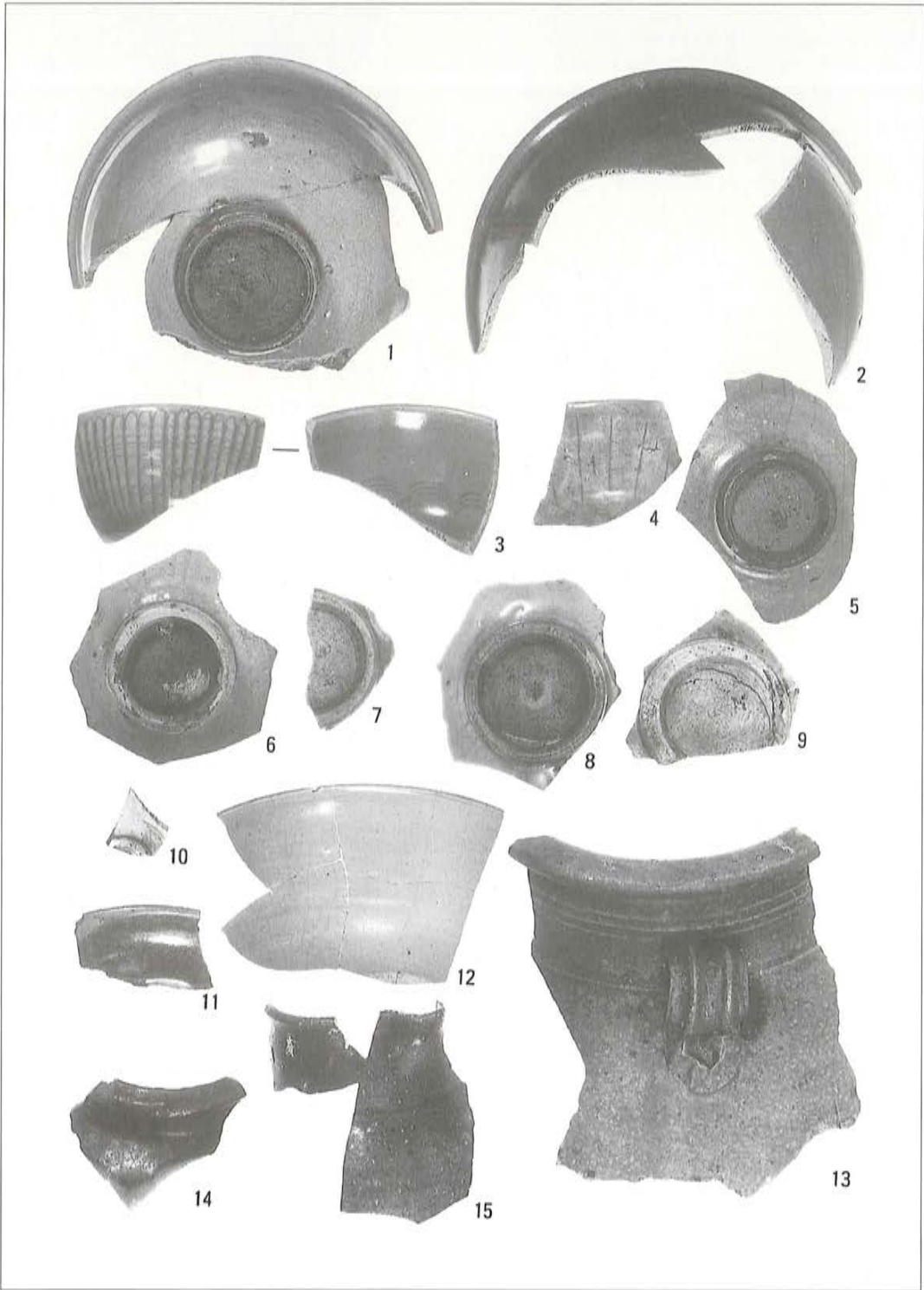
第33図 伝マシュク村跡遺跡の概略



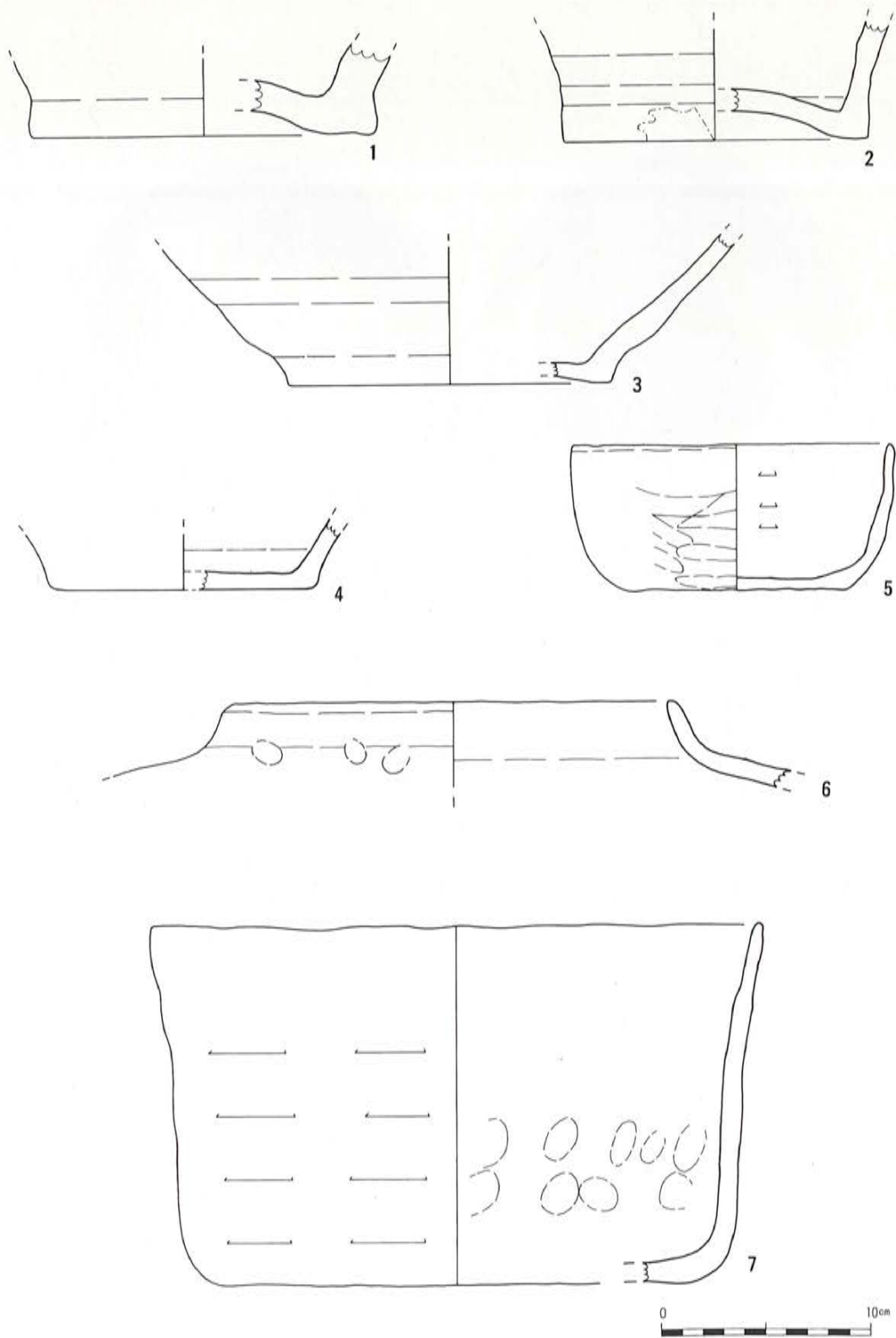
P L. 37 伝マシュク村跡遺跡石積みの状況



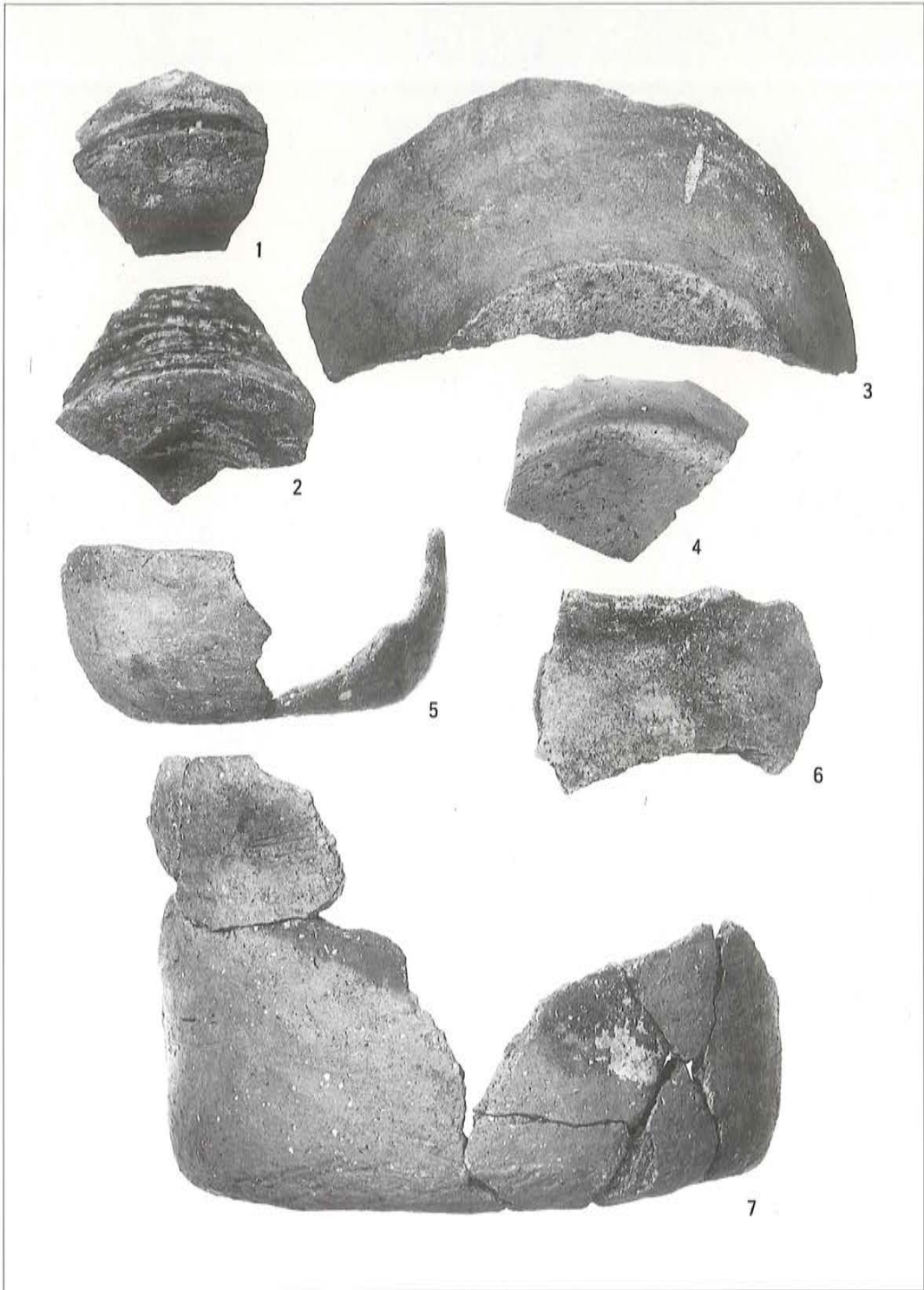
第34図 伝マシュク村跡遺跡採集遺物（1～12：磁器、13～15：褐釉陶器）



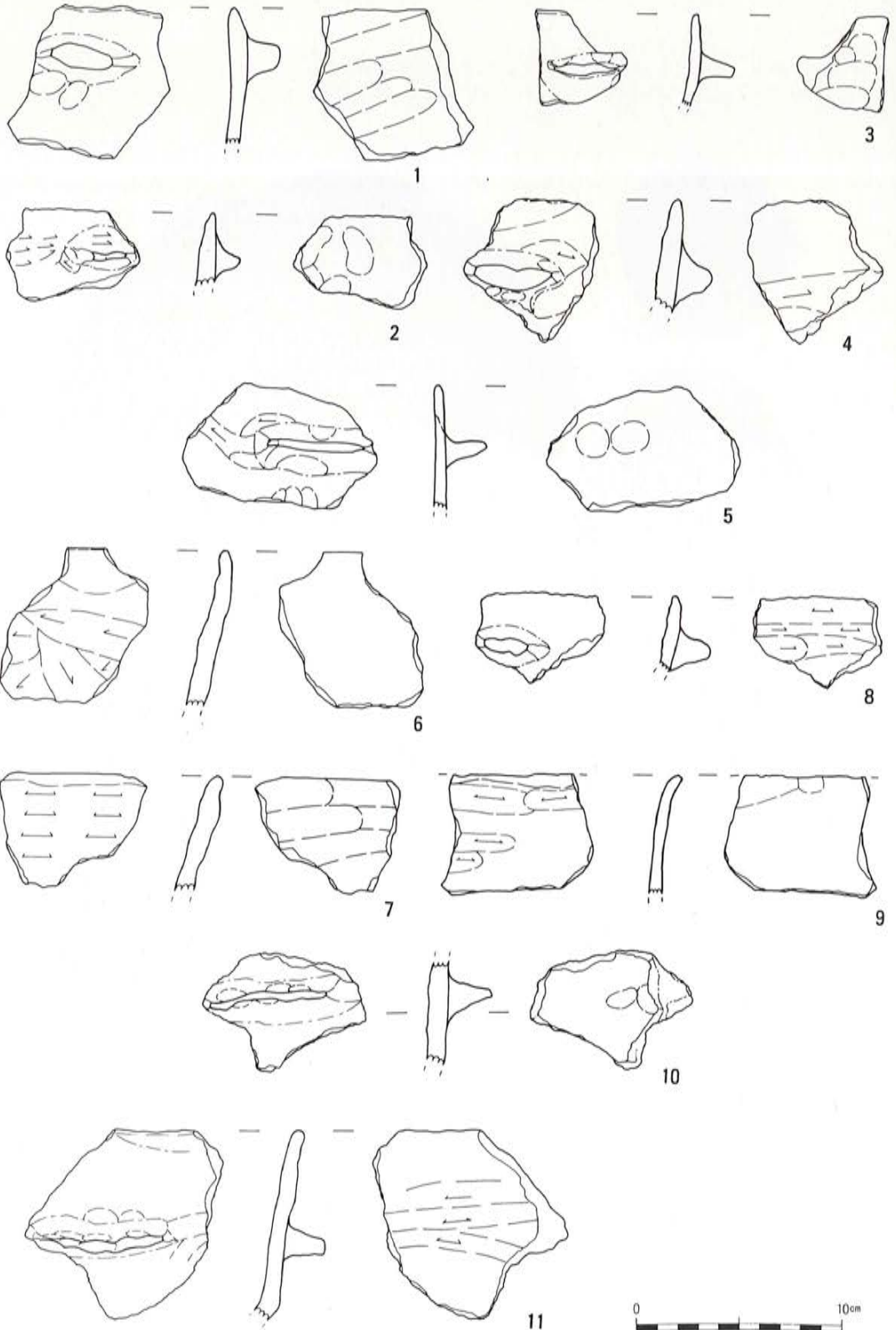
P L. 38 伝マシュク村跡遺跡採集遺物



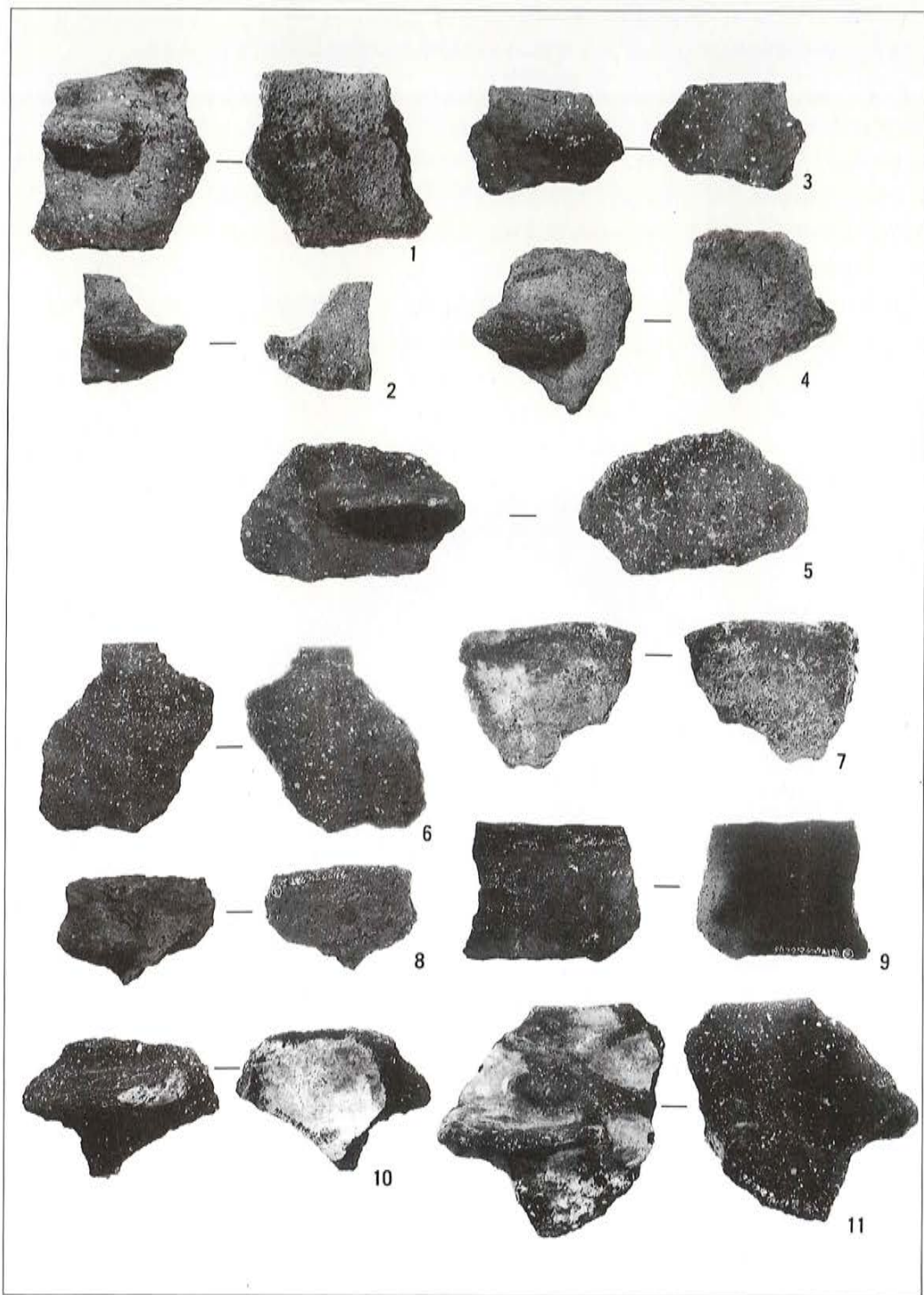
第35図 伝マシュク村跡遺跡採集遺物 (1・2・4：褐釉陶器、3：陶器、5～7：土器)



P.L.39 伝マシュク村跡遺跡採集遺物



第36図 伝マシュク村跡遺跡採集遺物（土器）



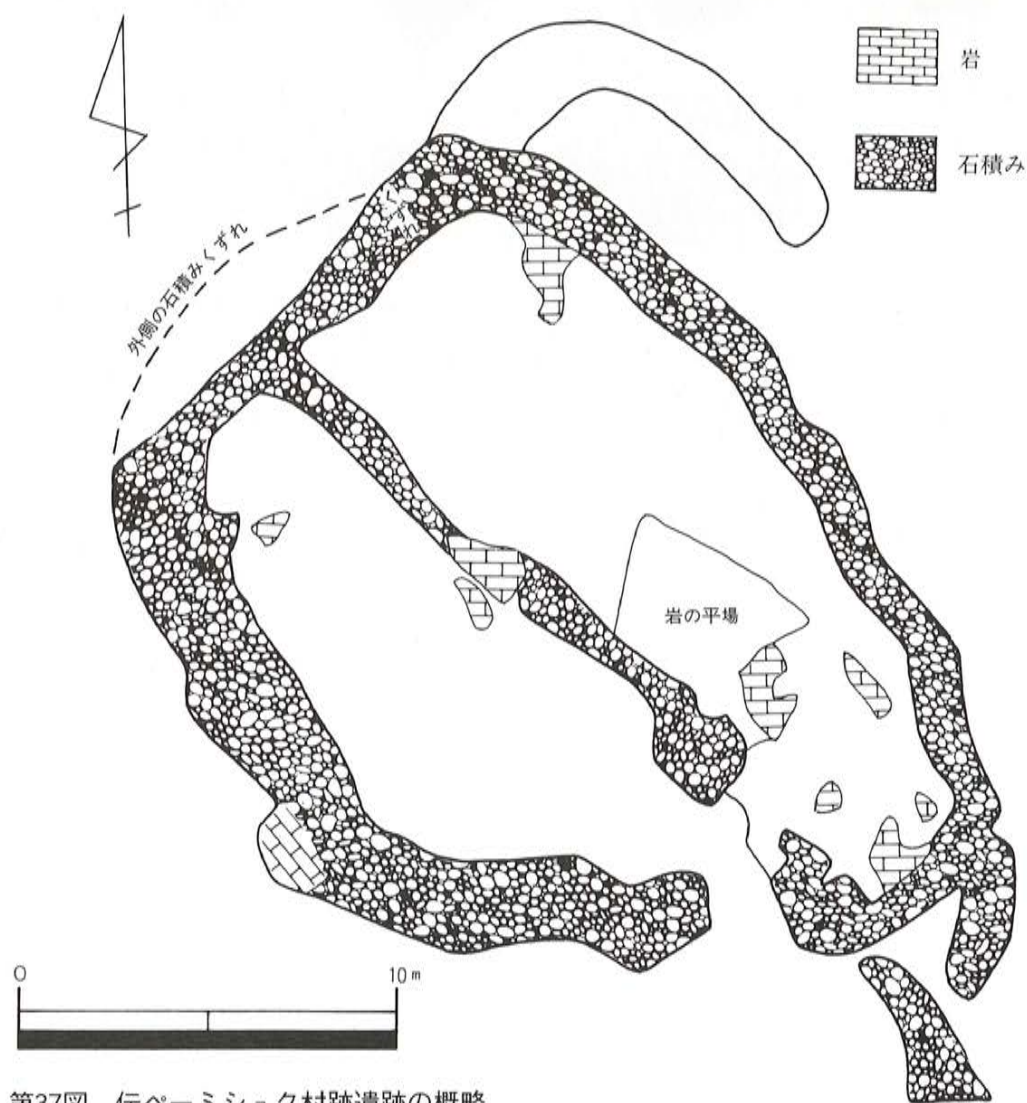
P L. 40 伝マシュク村跡遺跡採集遺物

③伝ペーミシュク村跡遺跡 (第37図)

富嘉部落の南約300mに位置する標高30mの丘陵上に遺跡は形成されている。

遺構のプランは楕円形に近い長方形状を呈する。石積みは琉球石灰岩の野面積みである。遺跡の規模は小さく、南西方向で約30m、北東方向で約20mを測る。通用口は南側に開口している。プランの外側には、北側から南東方向にL字状に石積みが延びている。南東側にも短い石積みが延び、開口部を仕切る形で更に北東方向に短い石積みが走っている。内部はほぼ平坦で、中央を石積みが南東方向に走り、区画を仕切っており、この南東隅に通用口がある。

遺物の散布は少なく、わずかに白磁片 (第38図8) 及び褐釉陶器口縁部 (第38図9)、土器片 (第38図3・6・7・10~12) などが採集された。



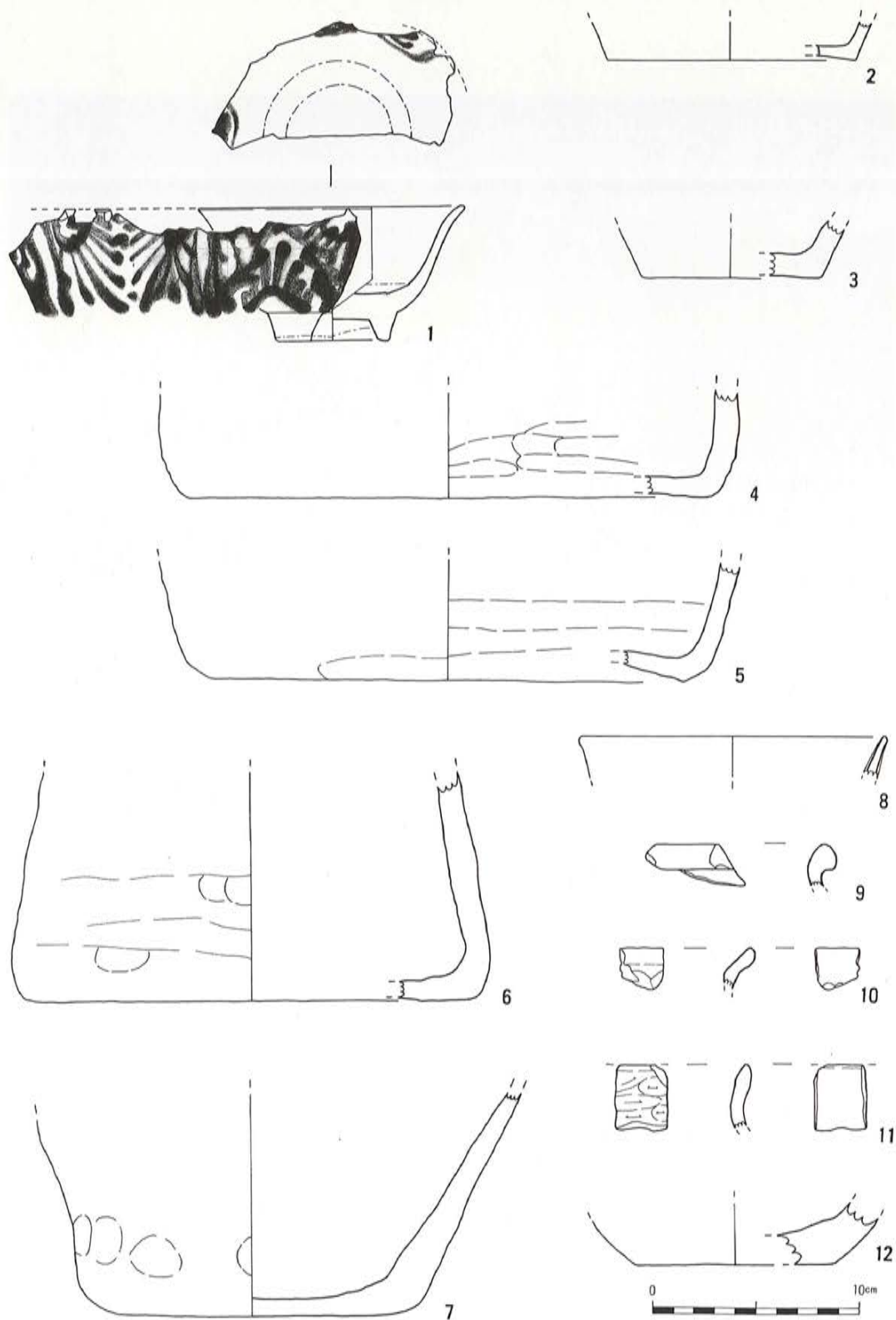
第37図 伝ペーミシュク村跡遺跡の概略



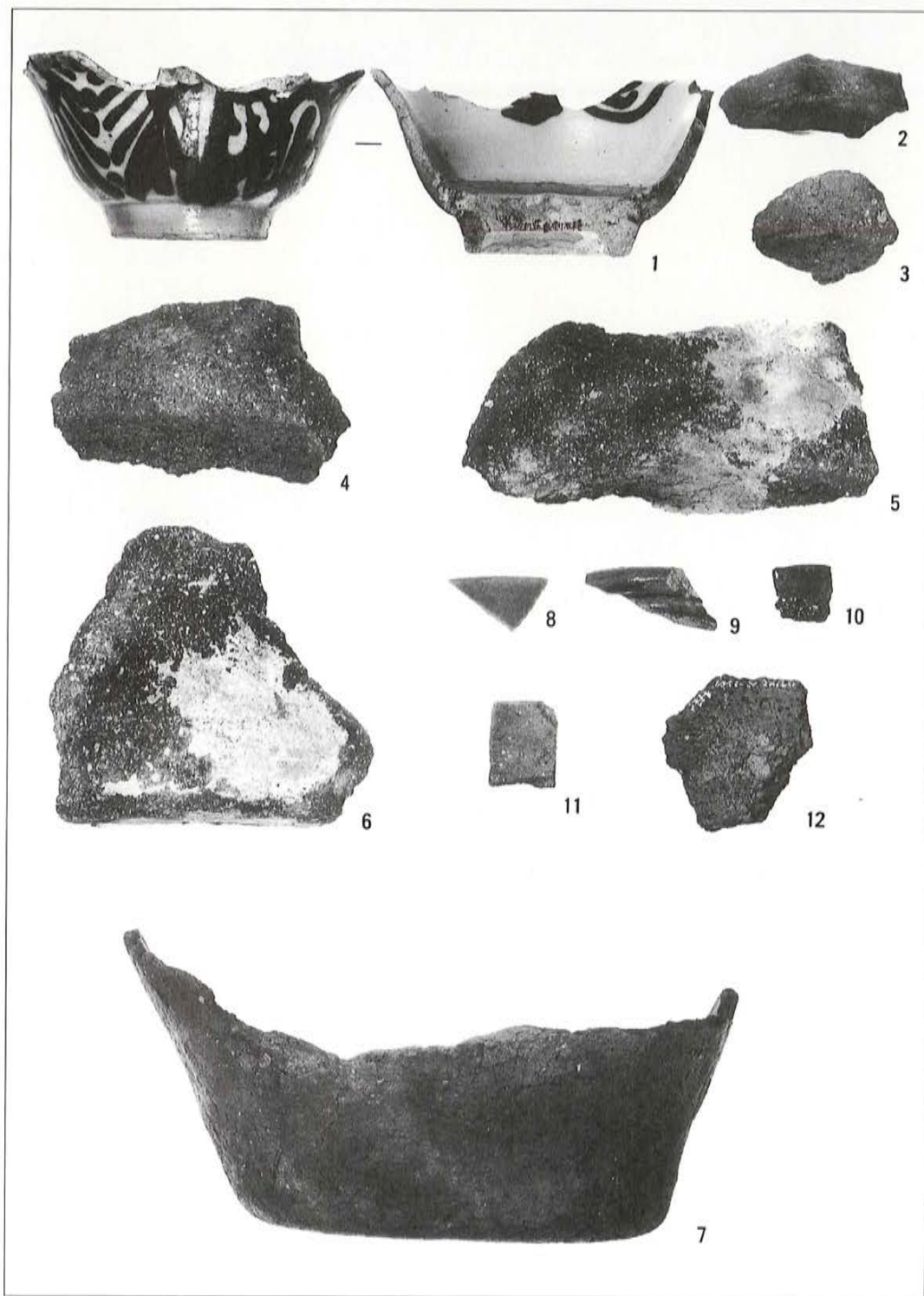
P L. 41 伝ペーミシュク村跡遺跡内部の状況

表9 波照間島のグスク及び相当期遺跡一覧

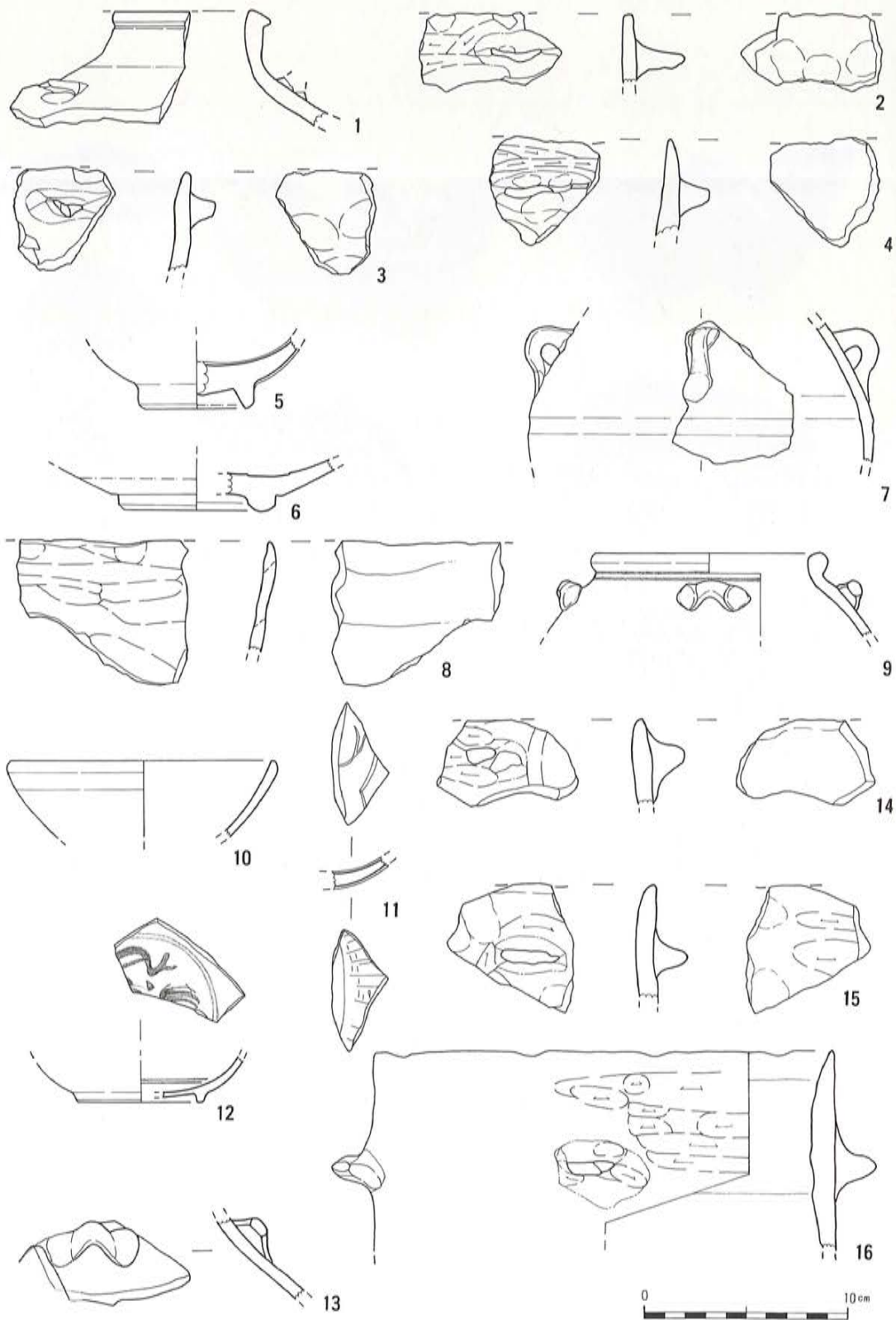
遺跡名	所在地	遺物	編年	備考
1. 伝マシュク村跡遺跡	字波照間	土器・外来陶磁器	第三期	石塁遺構
2. 伝シムス村跡遺跡	〃	〃	〃	
3. 下田原城跡	〃	〃	〃	石塁遺構
4. 美底御嶽周辺遺跡	〃	〃	〃	
5. 北部落内遺物散布地	〃	〃	〃	
6. 大底御嶽周辺遺跡	〃	〃	〃	
7. 新本御嶽周辺遺跡	〃	〃	〃	
8. 伝オヤケアカハチ生誕の地	〃	〃	〃	
9. 伝ウツォウ村跡遺跡	〃	〃	〃	
10. 名石御嶽周辺遺跡	〃	〃	〃	
11. イナサイ遺跡	〃	〃	〃	
12. 保多盛御嶽周辺遺跡	〃	〃	〃	
13. 伝ヤグ村跡遺跡	〃	〃	〃	
14. 伝ペーミシュク村跡遺跡	〃	〃	〃	石塁遺構
15. 伝ミシュク村跡遺跡	〃	〃	〃	〃



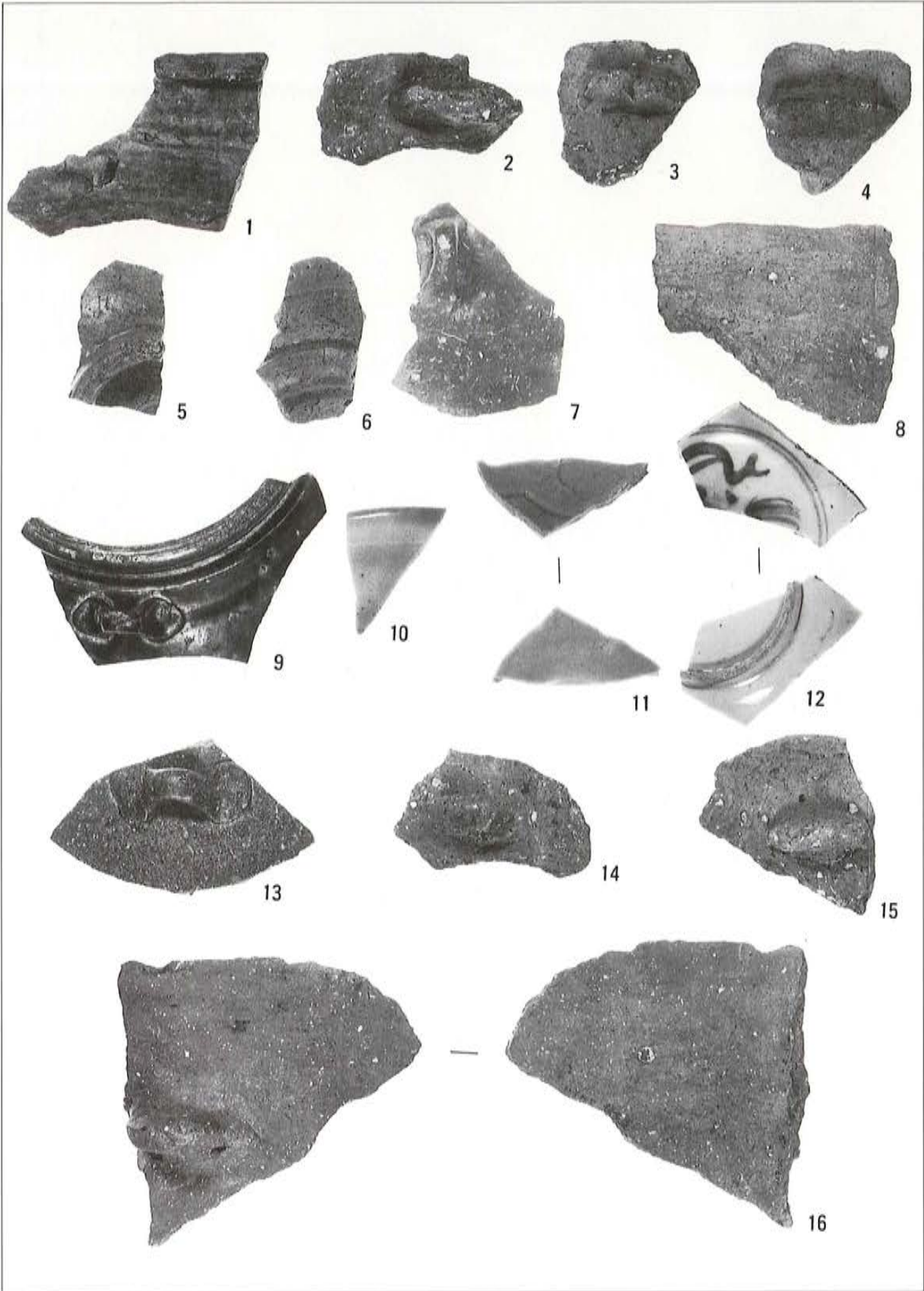
第38図 伝ベーミシュク村遺跡採集遺物(1:陶器、2・9:褐釉陶器、3~6・7・10~12:土器、8:磁器)



P L. 42 伝ペーミシュク村跡遺跡採集遺物



第39図 採集遺物 (1~4: 伝ヤグ村跡遺跡、5~8: 伝ミシュク村跡遺跡、9~16: 保多盛御嶽周辺遺跡)



P L . 43 採集遺物

第9節 与那国島

1. 位置と環境

与那国島は北緯24度28分～25度8分、東経122度56分～123度2分に位置する日本最西端の島である。石垣島より西へ125kmを測り、台湾より東へ127kmの地点にあり、晴れた日には遠く台湾の山々が望めるといふ。島は起伏に富んだ地形をなしている。島の中央を南北に流れる田原川を境に東にインビ岳（標高163m）と宇良部岳（標高231.1m）が、西に与那国岳（標高132m）と久部良岳（標高191.1m）が聳える。

平地は島の北側にみられ、特に田原川流域で扇状地状に広がる。島の南側は比川周辺を除き平地の発達は乏しく、段丘状の地形を呈する。島の海岸線は東崎の西の大泊浜と比川周辺で海浜砂丘地が発達しているほかは、崖や急斜面となっており、珊瑚礁の発達も劣っている。遺跡は島の各所に点在しており、海浜砂丘地、平地、段丘上に遺跡が形成されている。

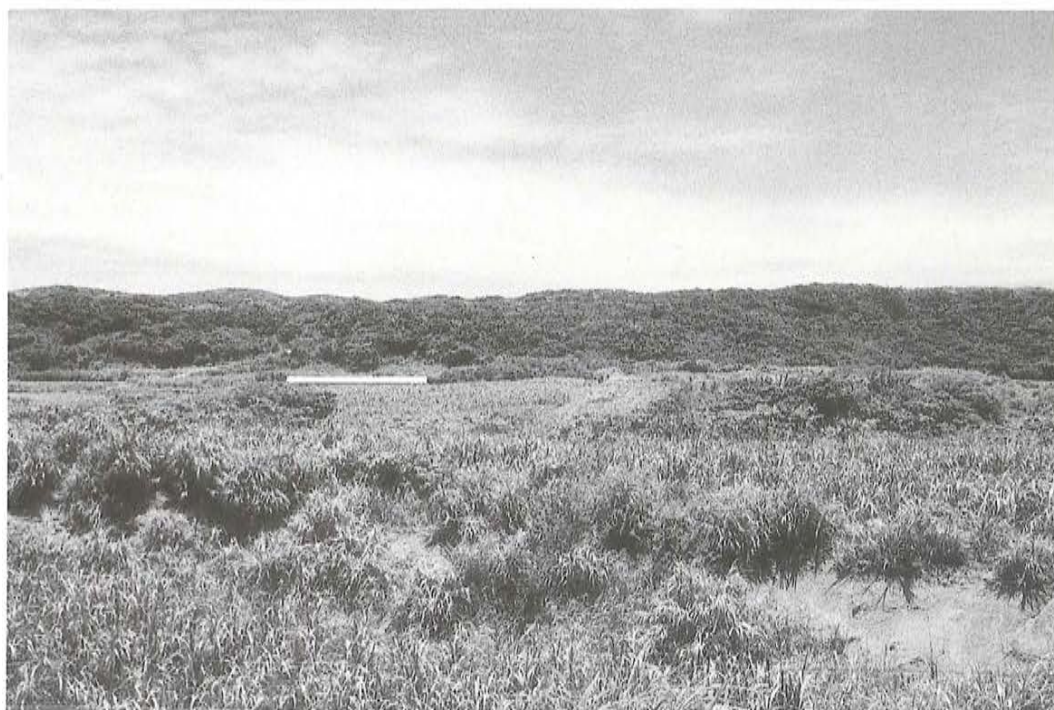
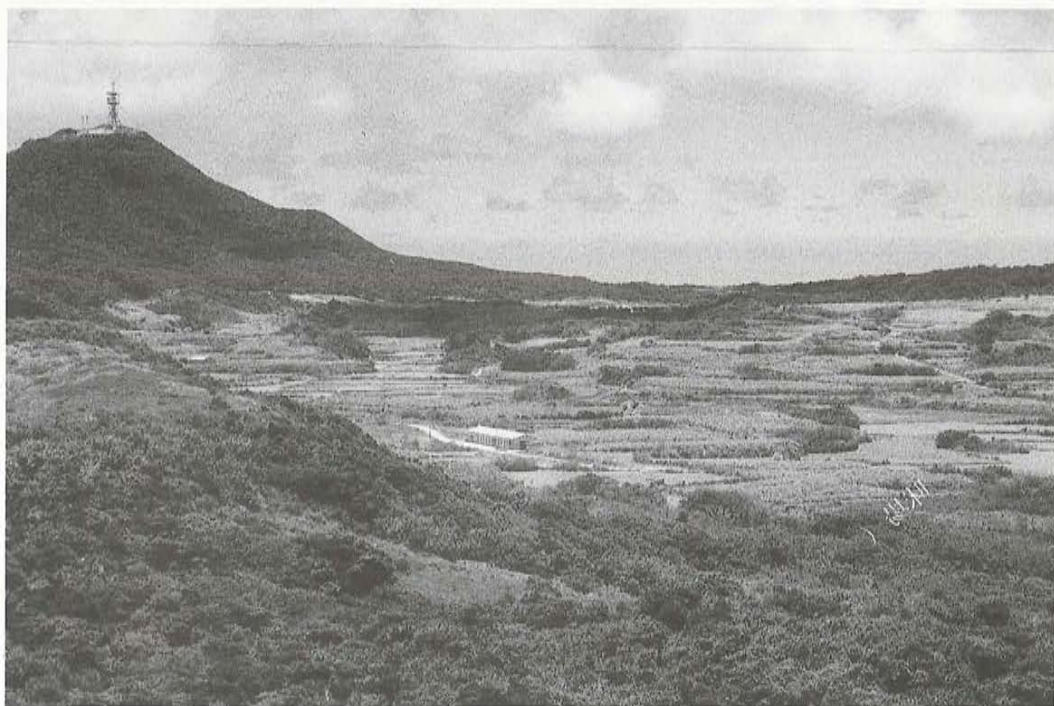
2. 主要なグスク及び相当期遺跡の概要

①ンダン遺跡

字祖納からサンニヌ台へ延びる農道がある。この農道は途中で二本に分岐し、一本は東側のサンニヌ台へ延び、もう一本は南側に延びている。一本の農道を南下する途中で再び道路が二本に分岐し、これを右側（西側）に入って300m程度進んだ道路脇に帆安^{シゲ}押所（神名ヌコイタムイ・ヌチ）とンダンヌヤーがある。この押所の北側はタトヌクチと称されている。押所を含めたタトヌクチ一帯がンダン遺跡である。この遺跡は1986年7月に町教育委員会が実施した与那原^{ドナンバウ}遺跡の発掘調査期間中に発見された遺跡であり、遺跡は与那原遺跡の北側に位置し、両遺跡間の距離も300mと近い。遺物は押所及びタトヌクチと称される小丘陵一帯に散布し、青磁・土器・須恵器などが採集される。

②ナガト遺跡

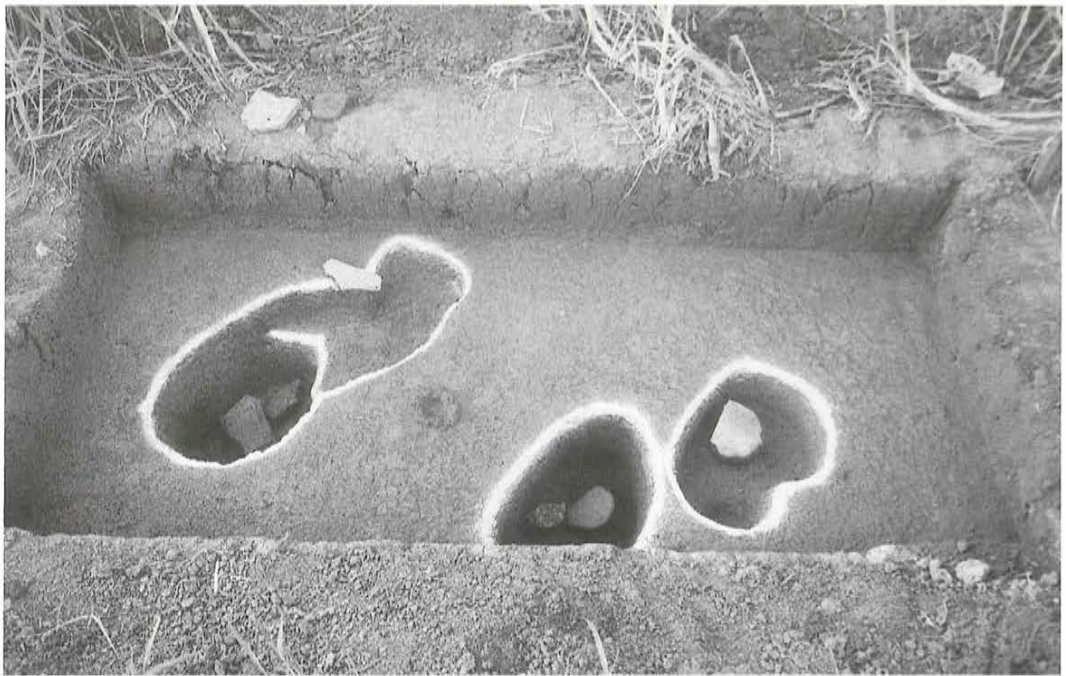
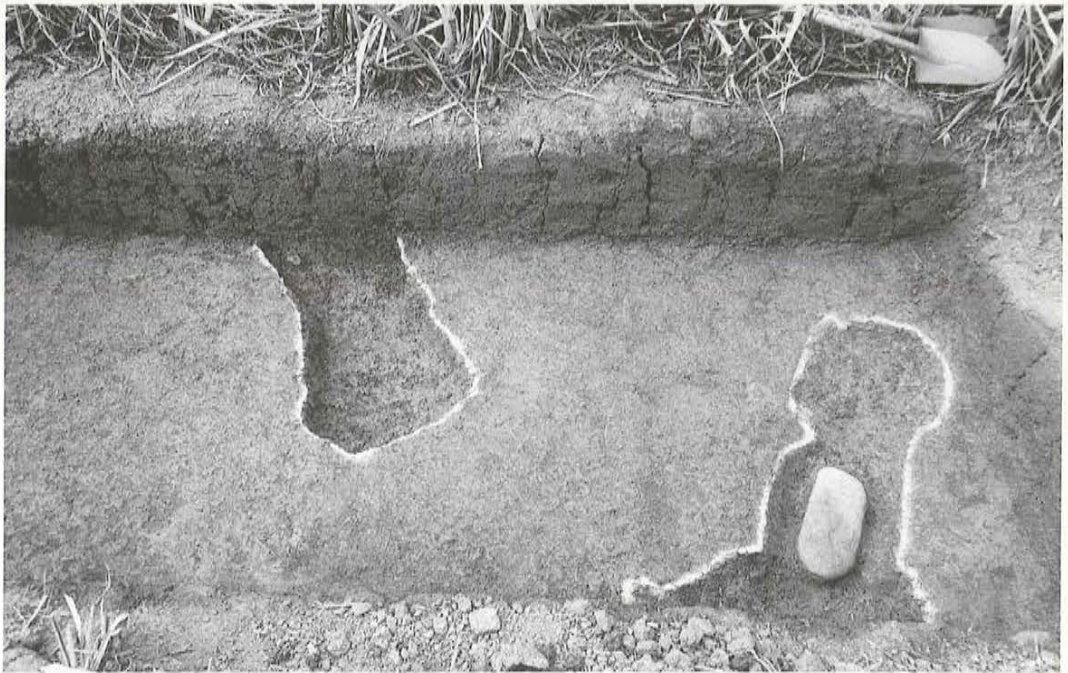
与那原遺跡の東側約300mの地点に丘陵がある。この丘陵地一帯が遺跡である。各屋敷跡は畑地・牧場などに利用されている。屋敷跡の周辺にはアダンなどの雑木が茂り、ある屋敷跡の周辺には部分的に土盛りを施して屋敷を囲い込んだとみられるところがある。また、本遺跡の西端部分は道路に接し、この道路に接する畑地の南側に往時の人々が使用したと思われる石囲いの井戸がある。井戸の直径は約80cm、深さ16mで周辺を野積面の石積みで囲っている。本遺跡からは青磁・土器などが採集されていて、与那原遺跡と一時期重なるようである。



P L . 44 与那原遺跡（上：遺跡遠景 西側、下：遺跡近景 南側）



P L. 45 与那原遺跡（上：発掘状況 西側、下：発掘状況 南側）



P L. 46 与那原遺跡 上：第1号・第10号土壙（J-19）
下：第2号～第4号土壙、Pit. 23（J-20）



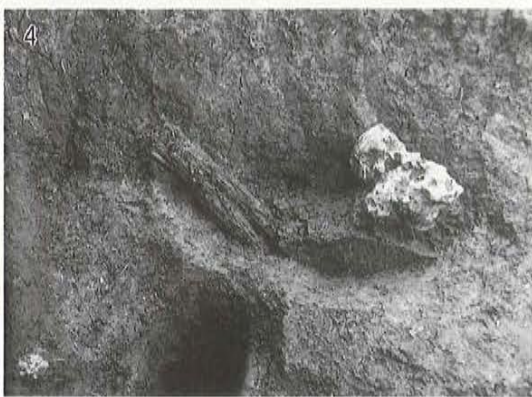
1



3



2



4

- 1・2 Pit. 1 と柱の検出状況(K-24)
 3・4 Pit. 3 と柱の検出状況(J-24)
 5 排水溝と Pit. 2 (K-24)
 6 J-22 の移動した礎石



5



6

P L. 47 与那原遺跡 柱と Pit.

③与那原遺跡

本遺跡は島の最高峰である宇良部岳の東側約1.5kmの地点にある道路に接した小高い丘（標高39m）にある。遺跡に入る道路脇には養蚕施設が一棟建っているため、この養蚕施設が遺跡へ入る際の目印である。本遺跡は1964年（昭和39年）に高宮廣衛氏によって発見されている。発掘調査は青山学院大学を中心として1982年（昭和57年）～1984年（昭和59年）にかけて、1～3次にわたる調査が実施されている。その後、1986年（昭和61年）～1987年（昭和62年）に町教育委員会によって畑地改良等に伴う緊急発掘調査が実施されている。

本遺跡内にはドナンバラ按司の屋敷跡（ドナンバラ・チディ）、集会吟味場（ミナガタ）、酒造場（サキダ）と称される場所が伝えられている。

この遺跡は口碑によると1500年に尚真王の命により宮古島から八重山の^{アカハチ}赤峰征伐の際、宮古島の仲宗根^{トイイヤー}豊見親が赤峰征伐と平行しながら与那国に仲屋金盛を将とする宮古軍を出兵させるが、サンアイ・イソバ（女性の首長）によって撃退させられている。この戦いの際にドナンバラ村やダティグ村は仲屋金盛らによって襲撃され、村を焼きはられ、按司も殺されたことが伝承されている。

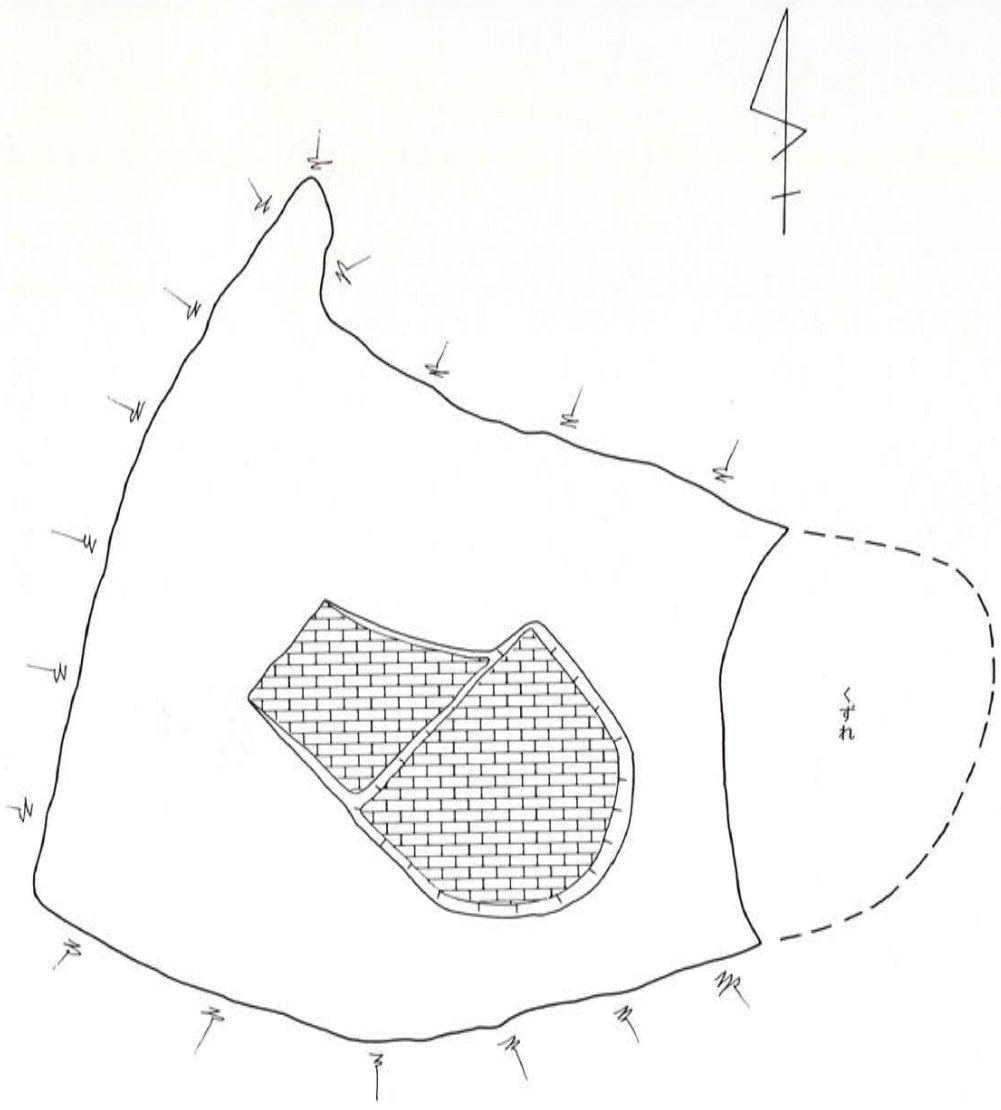
町教育委員会が実施した発掘調査では、高床式の倉庫や住居の基礎とみられる土壇群や排水溝が検出されている。出土遺物として青磁・白磁・褐釉陶器・須恵器・土器・石器・鉄製品・鉄滓・青銅製品・羽口などの他に焼けた柱が一本検出されていて、前述の伝承を裏付けている。遺跡の時期は14世紀初頭から16世紀初頭までの範囲に収まり、中心となる時期は14世紀前半～15世紀中頃と考えられている（註1）。本遺跡から出土した鉄塊や鉄滓の分析依頼を実施したところ鉄塊の産地が大陸側と考えられる結果が得られている。鉄滓については鍛錬鍛冶滓（小鍛冶）の可能性をもつことが判明している（註2）。

註1. 与那国町教育委員会「与那原遺跡」 1988年

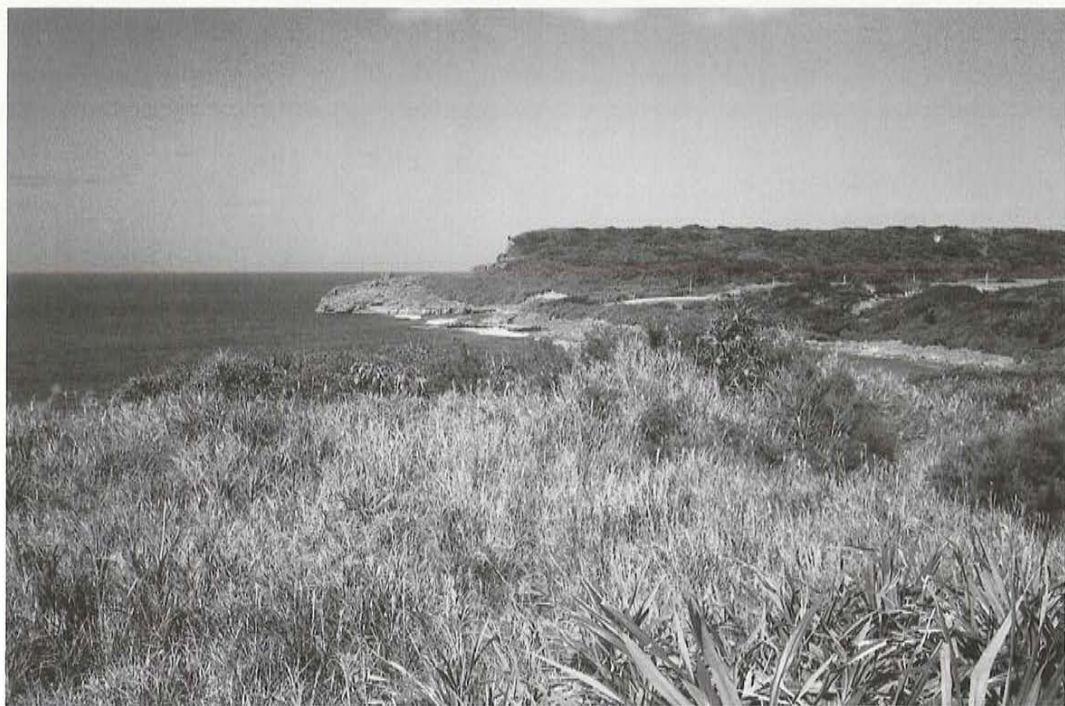
註2. 沖縄県教育委員会「船浦スラ所跡」 1991年

④伝ダンノアジ屋敷

遺跡は島の北海岸近く、久部良ゴミ処理場の東約200mの石灰岩台地上に立地する。現況は原野であるが、周囲はかつて採石場となって、その後埋め戻されているため旧地形は完全に失われている。遺跡は標高23.4mの琉球石灰岩台地上にあり、ほぼ中央に野面積みで約8m×6mの半円形状の石積みとこれから北西に伸びる石積みが約5m程残存している。この半円形状の石積みは「物見台」と言われている。伝承によればダンノアジの屋敷跡と言われ、かつてこの一帯にはダンヌ村があったと言われている。遺物は全く採集されなかった。



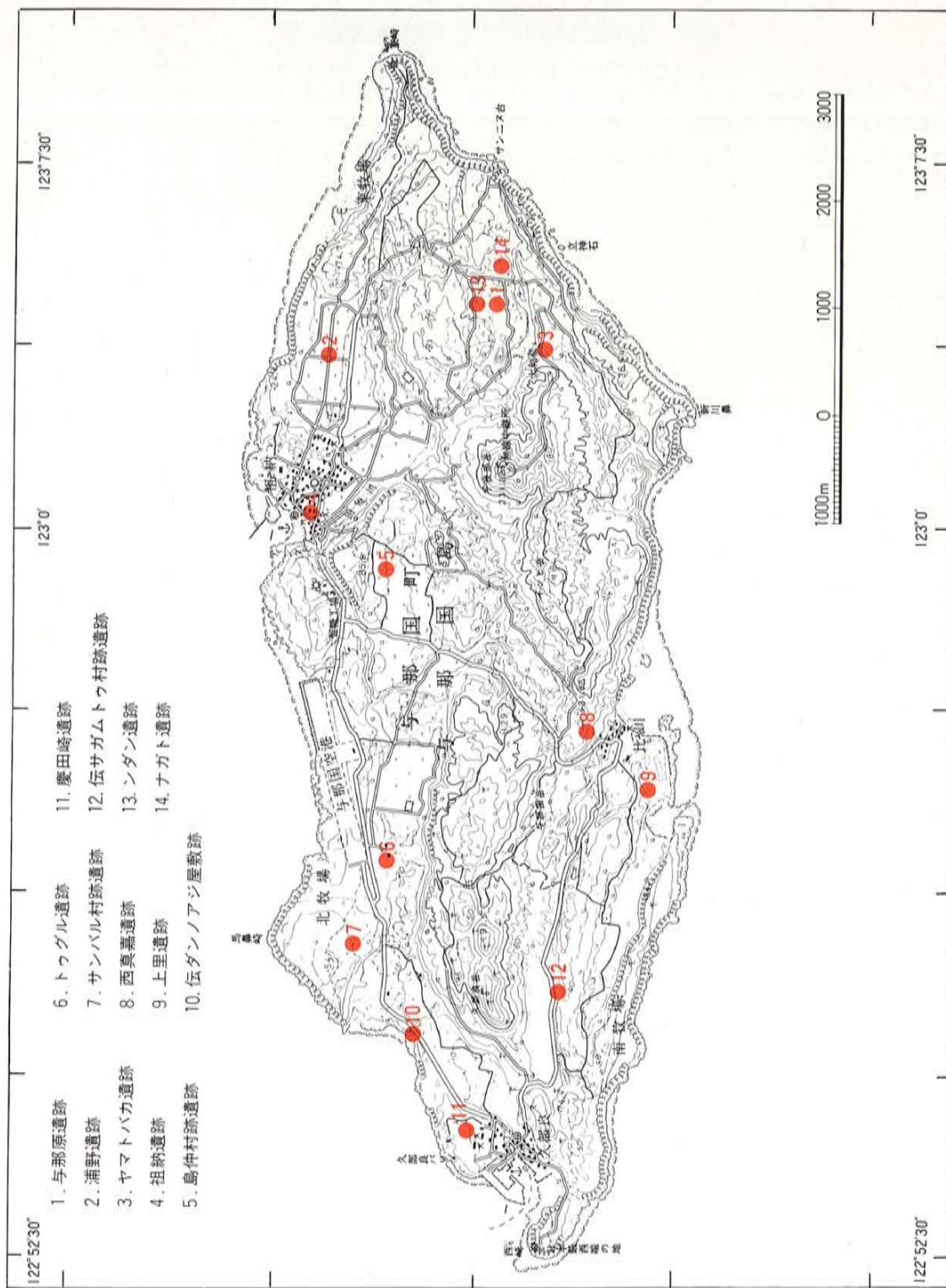
第41図 伝ダンノアジ屋敷の概略



P.L. 48 伝ダンノアジ屋敷（上：遠景、下：石積みの状況）

表10 与那国島のグスク及び相当期遺跡一覧

遺跡名	所在地	遺物	編年	備考
1. 与那原遺跡	与那国町	土器・外来陶磁器・石器・鉄製品	第三期	
2. 浦野遺跡	〃	土器・外来陶磁器	〃	
3. ヤマトバカ遺跡	〃	〃	第三・四期	
4. 祖納遺跡	〃	〃	〃	
5. 島仲村跡遺跡	〃	〃	第三期	伝サンアイソ バの屋敷跡
6. トッグル遺跡	〃	〃	〃	
7. サンバル村跡遺跡	〃	〃	〃	
8. 西真嘉遺跡	〃	〃	〃	石積み遺構
9. 上里遺跡	〃	〃	〃	
10. 伝ダンノアジ屋敷跡	〃	〃	〃	石積み遺構
11. 慶田崎遺跡	〃	〃	〃	
12. 伝サガムトゥ村跡遺跡	〃	〃	〃	
13. ンダン遺跡	〃	〃		
14. ナガト遺跡	〃	陶磁器・須恵器	第三期	



第42図 与那国島のグスク及び相当期遺跡の分布

第Ⅳ章 ま と め

これまで八重山地域のグスク相当期遺跡の概要について述べてきたが、最後にこれらの遺跡の内容を整理してまとめとしたい。

まず、石積みは全て石灰岩の野面積みで、他の技法はみられない。

次に、遺跡の立地については大きく次の4つに分類される。

- ①小丘または丘陵上。
- ②背後に崖を背負う緩い傾斜地。また、背後に海を背負うものも含む。
- ③海岸に突出した琉球石灰岩からなる小丘上。
- ④平地。

①の例としては、カーフ山遺跡、伊野田遺跡、皆野宿岡遺跡（石垣島）、ナーマヤーヤシキ（鳩間島）、ウティスク山遺跡（小浜島）、船浦遺跡（西表島）等がある。②の例はフルスト原遺跡、ピロースク遺跡、ニラスク遺跡（石垣島）、花城村跡遺跡（竹富島）、ユウンドゥレースク遺跡（小浜島）、伝マシク村跡遺跡（波照間島）がある。③の例は、野底石崎遺跡（石垣島）、ブシンヤー（鳩間島）、高那城跡（西表島）、ニシヌブシヌヤー、ポンヤマー遺跡（新城島上地）がある。④の例はアラスク遺跡、フカスク遺跡、ヴースク遺跡（黒島）、アラスク村跡（石垣島）等である。

次に、遺跡の構造については、大きく3つに分類される。

- A) 単郭式。
- B) 連郭式。
- C) 複数の郭が多数連結して構成されるもの。

A)の例としてフカスク遺跡、アラスク遺跡、ヴースク遺跡（黒島）、高那城跡、船浦遺跡（西表島）、ニシヌブシヌヤー、ポンヤマー遺跡（新城島上地）がある。B)の例には下田原城跡（波照間島）、ユウンドゥレースク遺跡、ウティスク山遺跡（小浜島）、伝ペーミシク村跡遺跡（波照間島）がある。下田原城跡は規模、構造ともに、沖縄本島のグスクと類似する点が多い。ユウンドゥレースク遺跡、ウティスク山遺跡、伝ペーミシク村跡遺跡は遺跡の規模が小さく、どちらか言えば単郭式に近いが、内部の区画から、一応連郭式として扱う。C)の例には、フルスト原遺跡（石垣島）、花城村跡遺跡、新里村遺跡（竹富島）、伝マシク村跡遺跡（波照間島）が挙げられる。これは、方形ないし長方形区画がいくつも連結して全体を構成するものである。

次に石積みの区画については、立地する場所の広狭にもよるが、まず、方形ないし長方形のプランを有するものがある。この例としては伝マシク村跡遺跡、花城村跡遺跡などC)に属するものが比較的しっかりしたプランを有している。他にはニシヌブシヌヤー、石積みはないが根石の痕跡からみて鳩間島のブシンヤー等が挙げられる。A)のタイプではフカスク遺跡・ヴースク遺跡が円形、アラスク遺跡が隅丸方形をなし、吉野遺跡は地形

に沿って石積みを巡らしており、不定形である。B)のタイプに属するユンドゥレースク遺跡は不定形に近く、ウティスク山遺跡、伝ペーミシュク村跡遺跡は長方形の区画である。こうしてみると石積みの区画には方形又は長方形・円形・不定形の3種あるように思われるが、この違いについては今の段階では結論は出せない。

遺物については表面採集資料が中心であり、また、遺跡によっては遺物の採集ができない場所もあったため、全てを比較することはできない。比較的遺物が採集された遺跡について参考までに記すると、船浦遺跡では、青磁・白磁・褐釉陶器、外耳土器の他に、須恵器が採集されており、14～15世紀代ではないかとみられる。花城村跡遺跡では、青磁の他、切高台の白磁皿、見込みに玉取り獅子を描くとみられる染付皿の口縁部が採集されることから、15～16世紀代ではないかとみられる。伝マシュク村跡遺跡は青磁・白磁・褐釉陶器・外耳土器等大型の破片が採集されている。踏査したかぎりでは、染付がほとんどみられず、青磁は剣先形蓮弁文碗が採集されることからみて15世紀代ではないかとみられる。

沖縄県文化財調査報告書第113集

ぐ す く

グスク分布調査報告書(Ⅲ)

— 八重山諸島 —

印刷 平成6年3月28日

発行 平成6年3月31日

発行 沖縄県教育委員会

編集 沖縄県教育庁文化課

〒900 那覇市泉崎1丁目2番2号(13F)

TEL (098) 866-2731~3

印刷 光文堂印刷(株)

TEL (098) 889-1121(代)

盛本
藏書

